

津町ノ内、字紺屋町、奈吳町、中町、山王町、四十物町、東町へ延焼、戸數約千百餘戸焼失セリ、然ルニ當日火災中時々風位轉變シ、殊ニ現在湊橋ノ位置ハ、川幅遙カニ廣ク、架橋ナカリシ爲メ、老幼ハ避難ノ途ヲ失ヒ、燒死又ハ井戸ニ墜チ、若クハ川海ニ入りテ溺死セシモノ、數十人ニ及ヘリト云フ、而シテ火元宗四郎ナルモノ、びつこナリシヨリ俗ニ之レヲちんば燒ト唱ヘ、當町未曾有ノ大火トシテ其慘憺タリシコト今ニ一般ニ傳唱セリ、而シテ燒失セシ重ナル建物左ノ如シ、

光正寺當時山勝光寺、當時十物町專念寺、大門、氣比社奈吳神明社、東町

〔増補大路水經〕

文政四年三月十八日、大西風放生津町出火大火事ト成、然所

同町之内、奈吳町迄は、海と内川と湊と三方は、行詰りの所にて、遊遅等なし、燒死人の者多く有之、依而組付射水郡御扶持人十村宗口庄兵衛願上、則同年の冬中御郡等を初而右湊に長參拾貳間の板橋を懸渡し、濱往來は放生津新町へ廻る所、右湊の橋を直に通行いたし、往來人等勝手宜敷事に相成る、

四月辛巳

七日、町富山愛宕町火あり、

〔杉木御觸留帳〕

一八拾五軒	船頭町燒失家
一貳拾三軒	手傳町燒失家
一五拾七軒	愛宕町燒失家
一九拾四軒	船橋今町燒失家
一百貳軒	船橋新町燒失家
一四拾四軒	古手傳町燒失家
一八拾壹軒	御福新町燒失家
一百九拾貳軒	船橋散地燒失家
一百六軒	愛宕村燒失家
一四拾八軒	畑中村燒失家
一七軒	駒見村燒失家
一拾四軒	五福村皮太

右當月七日酉の上刻頃、婦負郡愛宕村、百姓町並次郎兵衛家、出火仕、右之通燒



失仕申候、尤人異變之義無之由に御座候、

右承り合申に付、御注進申上候、以上、

天正寺村

十兵衛

巳四月十四日

御改作御奉行所

五月 庚戌

十七日、丙寅僧宣明寂す、

〔日本佛家人名辭書〕

宣明二四八一〇

〔真宗〕越中高岡開正寺の住持なり、宣明

號は巴陵、越中高岡の人、父は惠山、母は石井氏、寛延三年三月五日加賀の某地に生る、幼にして俗典を州の了現翁に學ひ、十八歳初めて京都高倉學寮に入り、業を伊勢の慧琳、播磨の隨慧に受け、奈良初瀬等の諸名刹に遊ひ、諸學匠に就きて、俱舍、唯識、維摩、勝鬘の諸經を學ひ、就中俱舍論に力を竭くす、故に俱舍宣明と稱せらる、某年高倉大學寮に開筵して、瑜伽師地論を講す、安永八年瑜伽釋論を校讐し、九年教行信證自釋を刊行す、天明七年越中高岡の開正寺に住し、寮舍を修理し、一切經藏を建つ、寛政三年六月擬講となり、翌年二十述記を講し、五年夏嗣講に進みて群疑論を講し、以後累年文類聚鈔、義林章書末、往生禮讚、勝鬘經、選擇

集、一念多念證文、維摩經正信偈、正像末和讃を順次講説し、文化八年閏二月十二

日に至りて講師に進み、同年文類聚鈔を講し、爾後安樂集、高僧和讃、正信偈、入出

二門偈、文類聚鈔、往生論註、選擇集を講し、文政四年五月十七日寂す、壽七十二、眞

宗史料○宣明の寂、越中史略に文、政三年九月十七日となす、

六月 庚辰

二十四日、卯癸高岡檜物屋町火あり、

〔高岡市沿革志〕

文政四年六月二十四日正午、檜物屋町、立野屋吉平火ヲ發シ、

大火災トナリ、鴨島町、大工町等僅ニ存ス、

七月 己酉

加賀藩、十村を廢め、奉行をして民政を理めしむ、

〔租稅志〕

本藩租稅ノ法ハ天正慶長ノ間、高德瑞龍二公、深ク意ヲ此ニ用ラレ

シト雖、時猶ホ戰國ニ係リ、且ツ爲政歲月ノ淺キヲ以テ、未タ其功績ヲ視ルニ至ラス、微妙公ノ時ニ至リ、天下漸ク治リ、專ラ力ヲ此ニ竭シ、一大良法ヲ創始セラ、ル、之レヲ名ケテ改作法ト曰フ、尋テ松雲公遺ヲ拾ヒ漏ヲ補ハレ、其法大成セリ、護國公以後諸公舊制ヲ守リ精ヲ勵マシ治ヲ圖ラル、然レモ歲月ノ久キ法制漸



ク素レ、弊害交々至ル、享和中之レヲ修正セント欲セラレシモ、其法頗ル密ニシテ反テ其功ヲ奏セス、文政四年ニ至リ、悉ク里正ヲ罷メ奉行ヲ直ニ百姓ヲ主宰セシメ、以テ宿弊ヲ釐革ス、既ニシテ弊復タ生ス、天保十年良里正ヲ舉ケ復舊ノ政ヲ布カレ、以テ維新ノ廢藩ニ至ル、

〔杉木御觸留帳〕

村々肝煎組合頭江申渡ス惣年寄演述之覺、

今般思召被爲在、十村役被指止、御領國百姓頭振、御奉行所直御支配被仰付、是迄之御郡御奉行、御改作御奉行、都而御郡御奉行ニ被仰付、是迄之十村手前ニおゐて取捌候品々、都而御奉行所におゐて御取捌被成候、依て石川河北兩郡の義ハ、御算用場御根役所に而御取捌、其外遠郡之義ハ、一郡々ニ御出役所被相建、御奉行之内御兩人宛御主附、其内御壹人宛御交代御詰切ニ而、夫々御聞取、御根役所御同役御詮義の上ニ而、御取捌被成候、定役御算用中等茂、相詰被申候事、  
一御郡方御法令之御條々、御改作方、御法之義、都而古來之通、彌以無違失相守可申事、

一是迄之組々其儘に被立置、組之名唱之儀、其組等之内、郷庄廣き名等を取、御改

被成候、○中

一惣年寄役被仰付、農事御收納勢子方、主附組被仰渡置、都而御郡人御支配方等ニ付、御奉行所御詮儀方相勤、且用水方之儀も致裁許候事、

但惣年寄役之儀、常々苗字相名乗可申旨、被仰出候事、

一年寄並被仰付、農事御收納勢子方、主附組被仰渡、惣年寄に准し相勤可申事、

一惣年寄、並年寄並共、石川河北ハ御根役所江詰番相勤、遠郡ハ御出役所暨御根役所江も詰番相勤申事、

一新田裁許、山廻等之儀、勤向是迄之通之事、

一是迄之十村手代之儀、以後某手代と申事無之、御役所附之趣ニ而、御郡手附と名目御改、御奉行所被召仕候、勤向之儀ハ、御米納方、書算方、使役等御召仕ニ候、尤石川河北之儀ハ、御根役所、並堂形御役所詰番、遠郡ノ儀ハ、御出役所詰番相勤候、都而身支配並役儀之筋、惣年寄之裁許ニ而、惣年寄、年寄並手前ニ而も、諸御用召仕候事、

一御郡之御奉行所江、手近之村々有之ニ付、所々ニ而御用取次所被立置、手附之内相詰指懸リ申品、又ハ爲指義ニても無之品、右取次所ニ而承、相辨申筈ニ候



事、

- 一 遠郡御出役所、暨御根役所共、寄合日相極置候而、惣年寄、年寄並、手附、何れも相揃候、村々不指懸義諸願等ニ付、百姓罷出候義有之候、右寄合日罷出可申候定日之義ハ、追而可觸聞候事、
- 一 遠郡金澤住番代之義ハ、以後手附棟取ト申名目ニ而、勤向是迄之番代ニ準シ、品々御用ニ御召仕之事、
- 一 秋縮之義、其組ニ主附之惣年寄等御請取立、皆濟狀引合之義ハ、諸郡共都而御根役所御取揃之事、
- 一 御收納米御定步入之義、其組ニ主附、惣年寄等、手前ニ而相しらべ申事、
- 一 村々御藏入御收納米之義、御侍代官並與力、明知之外ハ、新田裁許、山廻、御旅屋守共、以後御代官御指除、御直納ニ被仰付候、依而村々納口等之義、追而御極之上、夫々可申渡候事、
- 一 御藏入米米性等、前々之通少も、魚抹無之様可相心得、猶亦納手附御縮方之義も、嚴重被仰渡置候間、若不正之族、暨納方煩敷義共ニ而、百姓難義ニおよひ候儀有之候得者、納手附嚴重之御咎被仰付候筈ニ候、御米中入札之義、百姓名前

等納手付名前書記入置申義ニ、被仰渡候事、

一 諸返上米納口、是又追而可申渡候事、

一 是迄十村江相納候、繳役米之義、都而組々向寄之御藏所、明藏、並百姓持藏等之内江、相納可申候、尙納ヶ所之義、追而可申渡候事、

但浦方、並越中五ヶ山銀取立之分、御根役所上納之事、

一 百姓分等之儀ニ付、是迄十村ハ諸向懸合候儀共、以後御根役所、並御出役所ハ御懸合被成候、將又是迄金澤町を初、遠所町役人應對、十村ハ町肝煎懸合來候義有之候得共、以後ハ町役人江之應對方、町立、宿立之ヶ所ハ不及申、村々ニても辨方次第、其所之肝煎等應對仕可申義ニ被仰付候事、

一 諸郡共御田地方等ニ付、御見分之義、御出役所江願出候共、御根役所御同役御同し無御座候而ハ、一圓御出役無之候事、

一 御郡御奉行御廻之義、是迄春秋兩度ニ候得共、以後ハ御改作方御廻り共打込年中三度御廻村ニ候事、

但惣年寄、年寄並、山廻等其向々江罷出申事、

一 御參勤等御通御用之義、御先例之通ニ而、驛所馬寄等、年寄並、山廻リ等江被



相渡相勸申答ニ候、尙其向々委敷儀ハ追而御僉義有之事、

一人別之義、一村切相しらへ帳面御取立ニて、御縮方被仰付候、他之御支配江人別切被遣候義、是迄之振を以相願、御詮議之上不指支者ハ御聞届有之候、右人別帳仕立方之儀、追而可及指圖候事、

一 每歲御改之宗門帳ハ、手附ニ被爲調、御奉行所方御達方有之候事、

一 宗門方御徒歩相廻リ候節、泊所等ニおゐて、村々肝煎中印形見届之義ハ、是迄之通ニて手附罷出致指引候事、

一 七木御縮方之儀、御郡々先、是迄之通相心得可申、尙追而被懸御詮議儀、御郡茂有之事、

一 檢使方之儀、三州共年寄並之内一人、山廻之内一人、御指出被爲見届、手附罷出口書等取請申事、

一 火事有之節、火元人御詮議の儀ハ、御出役所向寄ハ直ニ御糺、手遠成村方ハ惣年寄等聞糺、口書取立御達申義ニ候、併出火之體疑敷品有之歟、或ハ人損又ハ一村皆焼と歟申様成品ハ、御出役所江直ニ御呼出之事、

但石川河北兩郡之義ハ、是迄の通火元人御呼出、御奉行所ニおゐて御聞糺

之事、

一 津方御縮物、他國出尿物等品々之義、是迄之通彌嚴重相心得勿論、出津、入津願之義、御奉行所ニ而御詮議之上、御聞届被成候間、倉抹無之様可相心得候、將又竹木御國廻尿物等津出、是迄十村手前ニ而取捌候品々、船入津出航其時々指懸申儀ニ付、兼而御用取次所江御役所方印章御渡置、時々不指支様被仰渡候、右印章之義、向寄物年寄等之内、預リ置時々見届押遣、尤津出押切迄ニ而、他事ニハ相用不申義ニ候事、

一 御關所過書願之義、村役人等手前ニおゐて、是迄之通致、人縮主付惣年寄等、加僉儀奥書を以御達申、御奉行所方過書御指出ニ候事、

但能州之内、他國江罷越候者、所方向寄隨ヒ所口、町御奉行所方過書御指出候得共、以後ハ都而御出役所方御渡ニ候事、

附リ、能美郡、石川郡、新川郡、御境筋村々之義ハ、是迄之通之事、

一村々定散役銀之義、向寄取次所江取立、幾組と歟仕分御出役所江指出、御奉行所御切手ニ而、諸方御出藏等江上納之事、

但定散共諸上納銀之義、惣年寄役裁許ニ被仰付置候間、座封銀名前之義、惣



年寄致名印候、石川、河北兩郡之義手附方え取立勿論、惣年寄致名印、御奉行所御切手ニ而上納之事、

一藏宿御縮方、前々之通相心得可申、誓詞之義藏方ニ携リ申者迄御見届、尤五人組等縮方は迄之通ニ而都而三州一様ニ被仰付候事、

一浦方難破船有之節、御縮方は迄之通ニ而惣年寄等組々主付之者罷出取捌、尤手附之内も罷出請書物等相調申事、

右今般御仕法之趣、拙子共々先可申渡旨、御奉行所就被仰渡候、夫々申渡候、尤前條にも申渡候通、第一御改作方等、古來御法條ニ少も無違犯、末々迄堅相守可申儀、肝要ニ候、尙又村役人中手前ニおゐて指當る儀ニ付、取扱方相辨兼候品も有之ハ、向寄年寄役等より可申諭事、

文政四年辛巳七月

付札ニ

本文之通、先其元中々夫々可申渡置候事、

七月九日

御郡奉行

諸郡惣年寄中

文政五年壬午

紀元二千四百八十二年

閏正月丁丑

僧義諦京師に寂す、

〔日本佛家人名辭書〕義諦(二四八一)〔真宗攝津三島郡上殿村慈明寺の住持なり、義諦は越中の人にして、宗學を快樂院に受け、法門改革後、本山の御用僧となり、後本山の命に因り攝津慈明寺に住す、蓋し同地三業の餘黨猶ほ多く存するを以て、師をして異計を改悛せしめんか爲めなり、文化十二年及び文政四年の安居學林の代講を勤む、著書、略文類記三卷、般舟讚記一卷、王本願成就文記一卷、八番問答錄二卷あり、寂するや諡を下して速成院といふ、清流紀談、學苑談叢、本願寺派學事史、〕

〔越中史略〕 義諦、名は智達、北峯また佛山と號す、越中の産にして、柳溪の門人なり、法門惑亂の頃、河州大峯正宗寺に看住し、京畿の間に在りて、折衝の先鞭を以て、同國魯導と名を齊す、文化三年堂職に擢てられ、兼て法門糾繩の任たり、同十年攝州上殿慈明寺の住職となり、同十二年代講師を命せられ、又文政四年重ねて代講の命を奉し、侍講を兼ね、翌年閏正月京師の客舎に寂す、年五十一、速成



院と諡す、

四月乙巳

幕府、富山藩に淺草火の番を命す、

〔前田氏家乗〕 五年四月、淺草火の番を命せらる、

十一月辛未

二十一日、<sup>辛卯</sup>加賀藩主前田齊廣致仕す、子齊泰封を襲く、

〔本丸廻状留〕 十一月廿一日

松平加賀守

名代松平淡路守

松平若狹守

右加賀守、願之通、隱居被仰付候得共、若狹守若年之内は國中仕置等加賀守心を  
付取計候様被仰出之旨、於御白書院御縁頼、御老中列座出羽守殿被仰渡之、

松平若狹守

右居殘、於鷲之御杉戸際、御老中御逢候

〔文政日記〕 十一月廿一日

御座間

松平加賀守

名代松平淡路守

嫡子

同 若狹守

右病氣ニ付願之通、隱居被仰付、家督無相違嫡子若狹守江被下旨、於御前被仰付  
之、

十二月朔日

御黒書院

家督之御禮

松平加賀守

銀百枚  
卷物五  
綿物十  
御刀美  
御馬代  
正金の  
二國  
十兼  
枚明

隱居之御禮

銀三十  
卷物五  
枚

松平肥前守

名代松平淡路守

右御目見相濟、御白書院江渡御、

仁孝天皇文政五年



松平加賀守家來

卷物五銀馬代 長 甲斐守  
 同 奧村 内記  
 同 村井 又兵衛  
 卷物三銀馬代 前田 織江  
 同 前田 修理  
 同 前田 内記  
 同 竹田 市三郎

十六日

被任中將

松平 加賀守

被任叙從四位下

松平 教負

肥後守卜稱

右被仰付旨於御白書院縁頗老中列座備中守申渡之若年寄中侍座

〔二條家番所日記〕 十一月廿八日

加賀中將殿使者古谷奎

中將儀持病之疝邪其上氣塞疝ニ而致難儀追々相願在國遂療養候得共快氣期も無御座依之致隠居若狹守江家督相續被仰付候様願書當十六日御用番水野出羽守殿江細井出雲守殿を以差出候處無滯御受取被成候右之趣爲御知以使者申上候事

十二月八日

加賀少將殿使者古谷奎

彌御安泰可被成御座與日出度奉存候然者前日依御奉書去月二十一日加賀守名代同姓淡路守並私儀登城仕候處於御座間加賀守願之通隠居私江家督之儀御直被仰渡御懇之蒙上意忝次第奉存候右之段以使者申上候也

〔加賀藩歷譜〕 金龍公記

金龍公 尊諱齊廣

初名利厚 御幼名龜萬千 勝丸 犬千代丸 又左衛門

筑前守 加賀守 肥前守 正四位下 左中將 御宇世功

御堂號大信堂 清靜齋

泰雲公第二御男也御生母山脇氏貞琳院殿天明二年七月廿八日金谷殿ニ降誕シ玉



と、御幼名龜萬千ト申シ、前田氏ヲ稱セラル、四年十一月十三日御髮置アリ、六年十一月朔日御着袴ノ慶アリ、七年二月廿二日卯辰山王へ御社參アリ、御歸ニ御ナサル、寛政三年四月十五日御乘馬始、七年六月廿二日御弓術、劍術、御讀書始、十月十六日太梁公御養子ニ成セラル、廿六日金谷殿御表住居ニナサル、八年三月六日掖留ノ慶アリ、十月廿六日始テ首途、十一月十一日江戸ニ至リ玉フ、是日松平氏ニ御改稱アリ、且乘輿御槍二本持セラル、事台命アリ、十四日太梁公ノ世子ニ立玉フ、廿三日上使本庄甲斐守ヲ以テ賀セラレ、一種一荷ヲ賜フ、亞相公家慶ヨリモ一種ヲ賜フ、廿五日右御禮公御名代飛騨守利孝君、太梁、拜謁アリ、御太刀馬代綱紗五卷ヲ獻セラル、太梁公ヨリモ御太刀馬、廿九日尾張亞相宗睦卿御養女實同宗彈正大ト御縁組ノ許命アリ、十二月三日御名勝丸ニ改ラレ、又犬千代丸ト御改、翌四日又左衛門ト改ラレ、尊諱利厚ト稱セラル、十五日始テ大樹公へ謁セラレ、御太刀並白銀等ヲ獻セラルル事例ノ如シ、九年二月九日殿中ニ首服、正四位下ニ叙シ、左少將ニ任セラレ、筑前守ヲ兼玉フ、御名ノ字ヲ賜リ、尊諱齊廣ト改メラレ、御刀青江守次ヲ賜フ、御杯御手自若ヲ賜公ヨリ御太刀並御刀備後正興代、美濃兼定代黄金縹紗良馬、西丸へ御太刀並御刀金十五枚ヲ獻セラ

ル、且數等例、廿二日、佳節月次御出仕御願ノ如シ、上命アリ、廿八日初テ月次ノ賀ニ御登城、此日御前髮ヲ執セラル、六月十六日、初テ嘉定ニ御登城、閏七月十八日、上使石谷周防守ヲ以テ御應ノ雲雀三十ヲ賜フ、以來御應ノ賜物等略之、十年正月二日初テ歳首ノ賀ニ朝セララル、五月十一日、上使本多彈正大弼忠格老中ヲ以テ御暇ヲ賜ヒ卷物二十ヲ賜フ、西丸ヨリハ水野出羽守忠友ヲ以テ卷物十ヲ賜フ、十五日謁見拜謝アリ、命アリ、御怒ノ上應一据馬一疋ヲ賜フ、十九日首途、六月朔日、歸藩金谷殿ニ入セラル、御謝使トシテ前田修理知周ヲ江戸へ遣ハサル、以來隔年東、十一年六月十五日、大梁君御養子ト定リ玉フ、

〔前田金家譜〕

齊廣、小字ハ龜萬千、初ノ名ハ利厚、重教ノ第二子、生母山脇氏、守

女ノ天明二年七月廿八日金澤ニ生ル、享和元年三月十三日、齊廣江戸ニ如ク、十二月、齊廣治脩ニ請フテ政事堂ノ記録ヲ觀ル、二年三月九日、齊廣治脩ノ讓ヲ受ケ封ヲ襲フ、是日、大將軍親シク齊廣ニ諭スニ治國ノ要ヲ以テス、齊廣其辱ヲ謝シ退ク、十一日、齊廣稱ヲ加賀守ト更ム、五月、齊廣多賀直清ヲ京師ニ遣リ恩ヲ謝シ物ヲ獻セシム、略中、六月十三日、齊廣左中將ニ轉ス、十五日、齊廣篠原一進ヲ京師ニ遣リ恩ヲ謝シ物ヲ獻セシム、八月廿五日、齊廣江戸ヨリ至リ初テ封ニ就ク、九



月五日、齊廣法會ヲ天徳院ニ行ヒ、重請天珠院五十年忌辰ヲ薦ム、是月、齊廣城下ノ民ニ錢穀ヲ與フ、十月、齊廣諸長官ニ諭スニ、偷安ヲ離視シ、忠信ヲ寶守シ、藩士ノ標準トナルヲ以テス、是ノ年五穀熟セス、齊廣小臣及ヒ窮民ニ賑貸ス、是ノ歲、齊廣喪制ヲ釐正ス、三年閏正月、齊廣教ヲ諸長官ニ下シ、曰、承平ノ久キ風俗頹敗ノ屏弱ニ流レ、費ヲ無用ノ華麗ニ致スヲ勤メテ、文學武技ヲ度外ニ置ク、故ニ其職ニ居テ其職ニ任エル能ハサル者モ、亦往往ニ之レアリ、既ニ卿等ニ附スルニ手下ノ士ヲ以テスレハ、卿等之ヲ道ニ諭スヲ以テ其任トナササルヲ得ス、庶コフ卿等手下ヲ牽ユルニ正道ヲ以テシ、以テ風俗ヲ敦フシ、諸士ヲノ士ノ道ヲ得セシムルヲ以テ急務トナセト、是ノ日、亦人持組ニ教シ曰、卿等ノ祖先、國ニ勤勞アルヲ以テ其位ヲ貴フシ、其祿ヲ重フシ以テ之ヲ世ニス、而ノ卿等今日貴重ニ處スル所以ヲ念ハス、動モスレハ輒チ門閥ニ誇リ奢麗ヲ競ヒ、珍膳奇服ヲ闘ハスヲ以テ是レ勤トナシ、下情ニ通スルノ急務タル家國ノ重任アルヲ知ラス、否ラサレハ則チ吝嗇ヲ以テ儉約トナシ、唯貨殖ヲ之レ勤メ仁慈惠恤ノ道アルヲ知ラス、是皆職トシテ不學無術ニ之レ由ル、今ヨリノ後、心ヲ文學武技ニ専ラニシ、以テ貴重ニ處スルノ道ヲ盡セト、四月齊廣教ヲ群臣ニ下シ曰、汝等ノ祖先功アルヲ以

テ其祿ヲ世ニスルモノ、特ニ其功ニ報ユル而已ニ非ス、抑亦其功ヲ世ニセント欲ナリ、乃チ其義ヲ知テ其事ニ怠ラサル者ナシト曰フニ非ス、然リ近來弊俗ニ染汚シ、復スルヲ知ラサル者滔々皆是ナリ、故ニ子弟輩父兄ノ教ヲ聞ヲ得ス、唯奢侈放縱ヲ之レ傲ヒ以テ常性トナル、武士ノ名ノミ有テ武士ノ實ヲ失フ、忠孝ノ道ニ於テ背クナシト謂ヲ得ス、要スルニ熙々座食シ其道ヲ講セサルニ由ル、今ヨリ孳々ト文學ヲ勉メ、文弱風流ニ陥ルナク、武技ヲ習ヒ暴戾僞俗ノ憂ヲ免ル、學問始テ其要ヲ得テ其功ヲ世ニスル期スヘキナリ、○中七月、齊廣省略所ヲ置ク、長瀬有毅、人見忠貞等ヲ以テ之ニナス、略令シ曰、先例古格ニ拘泥セス、一ツニ儉約ニ從事セヨト、○中十二月九日、近習用坂井克昌ヲ褒シ秩百石ヲ加ヘ賜フ、克昌ハ故ト廣式用達タリ、寛政五年轉メ齊廣ノ保トナル、齊廣過チアル克昌輒チ觀樹世子ノ言行ヲ舉テ齊廣ヲ規ス、克昌近習ニ在ル凡十餘年知テ言ハサルナシ、故ニ其命ニ曰、某シ余レノ幼時ヨリ能ク余レヲ左右ス、余ノ人トナルヲ得ル其規諫ノチカラ多キニ居ル、余レ其忠誠ヲ嘉シ之レカ德ニ報ント欲ノ未タ果サス、今ヤ不幸疾ニ罹リ起キサルニ至ルト聞ク、故ニ之ヲ賜ヒ其勤勞ヲ慰スト、十六日老臣前田孝友從五位下ニ敘シ伊勢守ニ任ス、是ノ歲、麻疹流行ス、齊廣封内



ノ民ニ樂十萬餘劑ヲ頒施ス、略○中 文化元年四月二日齊廣江戶ヨリ至ル、七日霞ヲフラス、是ノ月、齊廣、去年小松城ノ貧民麻疹ニ罹ル者ヲ救恤セシ富戸數十名ヲ褒賞ス、六月十二日、礪波郡南大豆田村報ス、正月ヨリ山鳴リ地裂クト、略○中 二年五月九日齊廣奢侈ヲ禁ス、略○中 八月廿七日、齊廣諸老臣ニ教シ曰、余レ襲封以來施設スル所事或ハ急遽ニ出テ今日ニ不便ナルモノ無ヲ必セス、獨リコレ而已ナラス、凡ソ事今日ニ行フヘクモ、他日ニ至リ其害アルモノ余レ盡ク之ヲ改ント欲ス、卿等、余カ斯意ヲ體シ忌諱スル所アルナク、其利害得失ヲ精議ノ以聞セヨト、十月十三日赦ス、略○中 四年二月晦日、齊廣明倫堂ニ臨ス、略○中 是ノ歲熟セス、齊廣封内ノ民ニ賑貸ス、五年正月十五日、金澤城焚ス、富山大聖寺使ヲ遣シ災ヲ弔ハシム、廿七日、大將軍堀内藏頭ヲ來リ災ヲ弔ハシム、是ノ月、群臣及ヒ封内ノ民、爭フテ金及ヒ屋材ヲ致ス、齊廣之ヲ聞キ教ヲ老臣ニ下シ曰、頃者治城災ニ罹リシヨリ、臣民志ヲ輸スル殆ント子ノ父母ニ於ル如シト聞ク、然リ余レノ不肖不徳ヲ以テ之ヲ臣民ニ得ル、固ヨリ其謂レナキヲ知ル、而シテ今コレアル、但シ祖宗ノ餘澤群下ニ沁スルアルヲ以テ耳、苟モ之ヲ知レハ則余レ一身ノ奉益々足ラサルアルニ安ンセサルヲ得ス、卿等余カ此意ヲ體シ群下ヲ煩ラハサ、ルヲ

以テ心トナシ、諸長官ヲ亦此意ヲ知ラシメヨト、二月、老臣等治城災ニ罹ルヲ以テ例ニ據リ、金ヲ幕府ニ借ルヲ以テ請ヲ得ン、然リ余レ別ニ思フ所アリ、故ニ請フヲ欲セサル也ト、三月十三日、大將軍、老中牧野備前守ヲ來リ齊廣ニ休暇ヲ賜ハシム、十五日、齊廣大將軍ニ謁シ暇ヲ告ク、大將軍老中ヲ旨ヲ傳ヘシメ曰、治城災ニ罹リ憂艱當ナラサルヲ知ル、之レニ山テ將サニ貸金ノ典アラントス、而シテ卿請フ所アルヲ以テ止テ行ナハス、乃チ特ニ朝親ノ期ヲ緩フシ且ツ今年ヨリ進貢ヲ蠲スル五年ト、廿八日齊廣江戶ヨリ至リ本多政禮ノ邸ニ入ル、五月廿四日、文學武技ヲ勉ムル子弟ニ物ヲ賜フ差アリ、略○中 閏六月廿八日、金澤城ヲ作ル、是ノ日越中洪水、富山城下家ヲ流シ人畜溺死ス、齊廣使ヲ富山ニ遣リ災ヲ弔ハシム、略○中 七年三月二日、是ヨリ先キ齊廣我カ治下ニ屬スル所能州官地ノ治、一切我カ國法ヲ以テ從事セント請フ、是ノ日、大將軍其請ヲ允ス、略○中 七月十一日、文學武技ヲ勉ムル子弟ニ物ヲ賜フ差アリ、十一月、齊廣教ヲ諸官長ニ下シ曰、延寶年中先君教養ノ道ヲ立テ、諸官長ニ示スニ官戒ヲ以テス、世々相承ケ庶官相告ケ以テ今ニ至ル百有餘年、而シテ歲月ノ久キ人情世態ト共ニ降り、偷安奢侈風ヲナシ、或ハ國家ノ經法ヲ遺忘ノ自ラ復ルヲ知ラサルニ至ラントス、今



ヨリ約ス、卿等祖宗ノ法ヲ確守シ、子弟ヲ鼓舞シ、文學武技ヲ研修セシメ、風俗ノ頽敗ヲ救ヒ諄朴ノ古ニ復スルヲ務トナセト、略中是ノ歲八礪波郡水害ヲ被ルノ地五十村、及ヒ江州今津等今年ノ租賦ヲ減ズ、略中十年正月、本吉湊裁許中村安積ヲ改作奉行ニ轉ス、本吉及ヒ湊ノ民、路ヲ遮リヤラス、事聞ス、齊廣吏ヲ遣シ其民ヲ慰諭シ安積ヲ褒賞シ秩五十石ヲ増シ賜フ、四月十三日、礪波郡福光城端ノ二邑大風屋ヲ倒シ人死ス、五月齊廣法會ヲ高岡瑞龍寺ニ行ヒ、瑞龍院二百年忌辰ヲ薦ム、十九日ヨリ廿日ニ至ル、廿九日赦ス、七月、河合佳柄罪アリ、齊廣之ヲ越中五ヶ山ニ竄シ、其子祐吉ヲ能州ノ海島ニ流ス、既ニノ祐吉數々父ヲ諫メ且ツ武技ニ長スルヲ聞キ、祐吉ヲ途ヨリ召シ還シ、秩三百石ヲ賜フ、略中閏十一月三日、上皇崩シ玉ヲ、齊廣山村慎之ヲ京師ニ遣リ賻ヲ獻セシム、略中是ノ歲熟セス齊廣封内ノ民ヲ賑貸ス、略中十一年五月、越中魚津ノ人大梅寺屋與一郎ナルモノ私金ヲ藩府ニ納レ、其足ヲ以テ驛遞ノ役資ヲ助ント請フ、齊廣其請ヲ可ス、八月、羽咋郡富木地頭町村ノ孝子九郎三郎ヲ褒旌シ物ヲ賜フ、是ノ歲、大風穀ヲ傷フル、齊廣封内今年ノ租稅五十一萬九千五百五十石ヲ蠲ス、十二年正月廿二日地震ス、小松城壞敗尤モ甚シ、是ノ月廿日ヨリ鳳至郡淺生田邑ノ西山地動

止マス、二月十八日ニ至リ峯崩ル、モノ十有七、三月廿八日、大衆免火アリ、延燒千百九十四家、五月、齊廣河北郡大樋邑ノ孝子宗次郎ヲ褒旌シ物ヲ賜フ、略中十年九月廿一日、天皇即位ノ禮ヲ行ヒ玉ヲ、略中十月二日、齊廣今枝直寬ヲ京師ニ遣リ賀ヲ奉シ物ヲ獻セシム、略中十二月十二日、女御人内、文政元年正月齊廣小原惟彰ヲ京師ニ遣リ去年ノ大婚ヲ賀シ物ヲ獻セシム、二月、生母山脇氏疾アリ、齊廣國ニ就キ侍病セント大將軍ニ請フ、大將軍其請ヲ許ス、三月十日、齊廣江戸ヨリ至ル、九月齊廣教ヲ下シ曰、太平ノ久キ上下奢侈ニ溺レ、繁文虛飾ヲ以テ禮トナシ、競走返ルヲ忘ル、君臣心ヲ同シフシ、先ツ此濁流ヲ出ル能ハスノ風ヲ移シ俗ヲ易ント欲ス、猶ホ海ニ航セント欲シ車馬ヲ求ルニ異ナラス、今ヨリノチ痛ク質素簡易ニ從事シ、封内ノ民ヲ各其所ヲ得セシムルヲ之レ務トナセト、二年二月、天皇痘ヲ患ヘ玉ヲ、齊廣、戸田有勝ヲ京師ニ遣リ安ヲ問ヒ物ヲ獻セシム、天皇痘瘥エ玉ヲ、齊廣、小林益道ヲ京師ニ遣リ賀ヲ奉シ物ヲ獻セシム、略中文政二年六月十四日、封内ノ民ヲ有スル所田疇ノ數ヲ呈狀セシム、七月廿三日近臣關貢秀ヲ出シ改作奉行トナス、三年五月十七日皇子降誕シ玉ヲ、六月齊廣駒井守眞ヲ京師ニ遣リ賀ヲ奉シ物ヲ獻セシム、八日、九日大風雨洪水、九月十日



射水郡小杉邑ノ孝子六右衛門新川郡寺家邑ノ孝子又藏鹿島郡矢田邑ノ孝子長松金丸邑ノ孝女壽璋ヲ褒旌シ物ヲ賜フ十月十四日群臣國用ノ給ラサルヲ聞キ錢穀ヲ獻ス數内償債ニ廉ナラサルモノ七人アリ齊廣辭ノ之ヲ卻ソク十九日齊廣藩臣及ヒ陪隸ノ風俗ヲ亂ルモノ十八人ヲ禁錮ス十二月八日本郷藩邸外ノ棄兒ヲ收養ス十六日老臣奧村榮實從五位下ニ叙シ伊豫守ニ任ス是ノ歲旱蝗封内ノ租稅三十五萬千九百二十石ヲ蠲ス四年正月六日支藩富山ノ臣市河三亥ヲ辟シ藩臣トナス善書ニ名アルヲ以テ也三月改作奉行ヲ十村ニ任ユル者ノ名ヲ上ラシム改作奉行乃チ先キニ流ニ處セラル所ノ者ヲ以テ命ニ應ス老臣等終身吏トナルヲ禁スルノ令ヲ固ク執テ聽カス時ニ齊廣屏風ヲ隔テ朗誦シ曰縲綬ノ中ニ在レモ其罪ニ非ルナリト是ニ於テ改作奉行ノ撰ヲ用ユ五月十二日馬廻頭笠間以信堀善勝大地文實連署ノ建言ス其略ニ曰閣下毎ニ令ヲ出シ風ヲ移シ俗ヲ易ヘ古ヘ諄朴ノ域ニ返ルヲ以テ今日ノ急務トナス而ノ近者風ヲ亂シ俗ヲ敗ルノ戲場ヲ設ケ娼館ヲ置ク是レ期スル所ト行フ所ト自ラ矛盾ヲ相ナス也臣等オモヘラク此二者ヲ廢セサル士氣ヲ興シ風俗ヲ敦フスル能ハサル也ト書入ル齊廣山崎範侃ヲ召シ三人ト相問難セシ

ノ親シク其議ヲ聽ク既ニノ以信等ヲノ貧民ヲ救ヒ曠夫ヲノ其情ヲ伸ルヲ得セシムルノ術ヲ條陳セシム以信等乃チ上陳シ曰臣等オモヘラク夫レ人ヲノ怨曠ノ懷ヒナカラシムルノ道ハ必ス先ツ私窩娼館ヲ杜絶シ國中ノ風俗ヲ正シフシ士氣ヲ振起シ然ル後其方法ヲ求ル自ラ應サニ人ヲノ其慾ヲ達セシムルノ道アルヘシ然リ閣下臣等ノ言ヲ聽キ近者設ル所ノ戲場娼館急ニ一切之ヲ罷ント欲スルモ方今町奉行施設スル所已ニ十ノ七八ニ至レハ則假令其令ヲ下スモ奉シ得サルモノアラン故ニ今ノ計ヲナスモノ先ツ盛大ノ舉ヲナスヲ禁シ貧僕賤隸ノ徒ヲノ其慾ヲ達セシムルニ足ルヲ以テ定限トナシテ可ナリ然リ臣等見ル所ノ如キハ則先ツ四民ヲノチカラヲ其業ニ專ラニセシメ儉素ヲ以テ本トナシ遊惰奢侈ノ害ヲ知ラシメ閣下積年期スル所ノ如ク風俗ヲ一變シテノチ怨曠ノ徒ヲノ情慾ヲ遂ケシムルノ政施スヘキナリ若夫レ貧民救助ノ法ハ既ニ先世置ク所ノ悲田院ニ足ルト書ル是ニ由リ戲場娼館罷ムルヲ果サス六月九日齊廣老臣橫山隆章奧村直從村井長道ニ命シ寛文以後ノ政令後世ノ法トナスヘキモノヲ輯録セシム十月廿三日生母山脇氏卒ス○中五年八月十三日齊廣吉田侯ノ臣太田才佐ヲ乞ヒ以テ儒官トナス十月五日齊



廣教ヲ組頭ニ下シ曰庚辰ノ年卿等ニ委スルニ奢侈ヲ抑エ風俗ヲ正シフスルノ任ヲ以テス卿等乃チ余カ意ヲ體シ説諭チカラヲ盡シ殆ント士風ヲ一變ス余レ甚タコレヲ嘉ス然リ進ミ難フシテ退キ易ハ人ノ常情況ヤ二百年太平ノ久シキ染習骨ニ入ル之ヲ拔キ之ヲ新ニスル抑難ヒカナ夫レ風ヲ移シ俗ヲ易ル古聖賢ノ難ニスル所而シテ余レノ不肖ヲ以テ之ヲナサント欲ス固ヨリ易カラサルヲ知ル然リ難シトナシテ自ラ勉メサル可ラス故ニ卿等聖經賢傳ノ經濟ヲ本トナシ余カ心ヲ以テ卿等ノ心トナシ益々説諭ニ惰タラス余カ期スル所ニ負ク勿レト是ノ月藩臣ノ禁ヲ犯シ風俗ヲ亂ルモノ三十三人アリ齊廣其巨魁二人ヲ流シ其餘三十一人ノ罪ヲ鳴ラシ秩ヲ減シ譴責スル差アリ是ニ由リ教ヲ組頭ニ下シ曰頃者一日ニ三十三人ノ士ヲ罪ス夫レ余ヲノ多ク人ヲ罪セシムルモノ抑卿等ノ致ス所ナリ夫レ卿等ニ部下ヲ附シ以テ其教養ノ責ニ任セシム乃チ卿等部下ノ士ノ德ニ興ラス淫ニ流ルヲ誠シメスト云ニ非ス卿等之ヲ誠メテ變セサルモ而シテ余レニ之ヲ知ラシメス其心オモヘラク余レヲノシラシムル則必ス不測ノ譴責アリト是ヲ以テ言路通セス下情聞エス故ニ小惡ニシテ懲スヲ得ス卒ニ其惡稔ノ蔽フ可ラサルニ至ル夫レ犯ス所ノ罪

既ニ大ナレハ則罰モ輕フスルヲ得ス然リ余レ其父母妻子ノ情ヲ察スルニ悲嘆憂戚若爲ントナスヤ余レ之ヲ念ヒ寢食ヲ安ニスル能ハサルモノ數日然レモ禮ヲ貴ヒ義ヲ重ンシ邪ヲ罪シ正ヲ賞スル政ノ大經ナレハ則止ムヲ得ス頃者ノ如ク其罪ヲ科ササルヲ得ス庶チカフ卿等余カ臣民ヲ視ル子ノ如クスルノ心ヲ體シ勢威ヲ以テ部下ヲ欺ク勿ク教戒倦マス忠信ヲ以テ其腹内ニ布キ自ラ惡ヲナスノ耻ツヘキヲ知ラシメ禮ヲ守リ義ヲ重ンシ人々ヲ道ヲ得セシムル舊弊始テ除クヘク風俗始テ革ムヘキナリト十一月三日萬石以上及ヒ物頭以上ニ帛ヲ服スルヲ許ス四日磔以上ノ刑ヲ受ル者ノ子斬ニ處スルノ律ヲ除ク是ヨリ先キ磔以上ノ刑ヲ被ル者アル其子ノ幼壯ヲ問ハス一切之ヲ斬ル大梁院治屢是ノ律ヲ除ント議ス老臣及ヒ獄官ノ長曰祖宗ノ法革ムルヲ得スト固ク執テ聽カス齊廣大梁院ノ志ヲ繼キ亦之ヲ除ント欲スル久シ是ニ至リ斷然教ヲ下シ曰國初定ル所磔以上ノ刑ヲ受ル者ノ子一切斬ニ處スルノ法一時ヲ懾服スルノ權道ニ至治ノ澤ニ浴スル民ヲ治ムル所以ノ成法ニ非ス記ニ曰ハスヤ悼ト耄トハ罪アレモ刑ヲ加ヘスト況ヤ親ノ罪ヲ以テ刑ヲ無知ノ幼稚ニ施スニ至ル甚タ謂レナキ也今ヨリ後チ年ノ長幼ヲ問ハス一切此律ヲ



除ケト、十五日、齊廣致仕シ封ヲ世子ニ傳ント大將軍ニ請フ、廿一日、大將軍、齊廣ノ請ヲ許シ且ツ特ニ命ヲ齊廣ニ致シ、曰、若狹守歳尙ホ幼ナシ、卿宜シク寧靜疾ヲ養ヒ政事ヲ總聽スヘシト、廿二日、齊廣肥前守ト改稱ス、廿九日、齊廣教ヲ老臣ニ下シ曰、余レ多病ノ故ヲ以テ致仕ヲ大將軍ニ請フ得然リ加賀守尙ホ幼弱ナルヲ以テ、余ヲ政事ヲ行ナハシム、夫レ余ノ不肖固ヨリ今日ニ始ラサレモ既ニ大將軍ノ命ヲ奉スレハ、則加賀守成人ニ及フニ至ル政ヲ聽カサルヲ得ス、卿等余カ斯命ヲ以テ臣民ニ布告セヨト、又特ニ老臣ニ手教ヲ下シ曰、余カ不肖ヲ以テ頃者大將軍異數ノ寵遇ヲ賜ヒ、老ヲ國ニ養ナハシム、夫レ余レ襲封以來祖宗ノ位ニ立ツモノ二十有餘年、一善政ノ祖先ニ紹キ後裔ニ垂ル、ニ堪ルナシ、然レモ亦大過咎ノ以テ罪ヲ邦内ニ獲ルアルナク、今日ニ至ルヲ得ルモノ、頗ル卿等補佐ノチカラニ之レ頼ル、而シテ今又大將軍ノ命ヲ奉シ加賀守幼弱ノ中政事ノ責猶ホ余レニ在レハ、則卿等更ニ輔佐ノ力ヲ盡シ、庶ハクハ余ヲ始終ヲ全フセシメヨト、十二月十六日、是ノ歳ノ春、齊廣薨去ヲ辰巳ノ地ニ營ム、是ノ日徙リコレニ居ル、稱シ竹澤ト曰フ、○下文ハ文政七年七月ニ収ム

〔加賀藩史彙〕

歴世襲封一覽

金龍公

諱齊廣、泰雲公、第二子、享和二年三月襲封、文政五年十一月退老、七年七月薨、年四十三

温敬公

諱齊泰、金龍公長子、文政五年十一月襲封、慶應二年四月退老、明治十七年一月薨、年七十四

〔石埭記録〕

文政五年十一月二十一日致仕、金龍公齊廣

〔参考〕

〔憲令要略〕

文政七年、御入國初之御儀ニ付、家一軒へ米三升ツ、被下候ニ付、右恐悦として、益正月之儀、十二月十六日十七日兩日にして、籠をおろし、二夜共軒燈出し、尤賑ひ勝手次第ニ可致事、

是歳、新川郡東岩瀬の人、松前より始めて海産肥料を輸入す、

〔富山縣内務部勸業課調査〕

東岩瀬の肥料沿革 往時未だ北海産肥料の輸入なかりし以前、農家は専ら菜種、油粕及米糠を以て主要とせしか、其後地干鰯及秋田附近より輸入せる鱒類をも、施用するに至れり、然るに文政五年夏、初めて東岩瀬町の佐藤屋三右衛門、所有船大黒丸、(石積百) 舊松前即ち今の北海道福山附近より、笹目二千貫目計りを岩瀬港へ積來りて、各村落の豪農を説き之か施用奨励に力めたるか、未だ充分に其効果を知らざる時として、僅々二千貫目の笹目を、漸く三年間に賣盡したるか如き状況なりき、當時最も多用せしは、新川



郡宮地、村金山、茂左衛門、大石原村治左衛門、東大森村源右衛門等なりしと云ふ、斯くて笹目施用の効果を現したると共に、郡奉行平野知太夫又之れを保護奨勵せしを以て漸次輸入を高めたり、天保の頃、凶作等のため不況に陥りしも、漸次回復して今日の盛況を見るに至れり、當時最も早く輸入されたるは、上述の笹目にして、漸次羽鯨を加へ、追て鯨搾粕をも輸入するに至り、又近年鱈鱈粕、雜魚粕等を見る、綠肥、紫雲英は、天保年間、新川郡西田村土火寺住職の、江州より種子を得來り蒔付せるを初めとせり、扱て、維新前の輸入機關として同町の船は、僅々數隻に過ぎず、他は概ね加賀越前の和船によりて輸入されしも、北海道の開くるに従ひ漸次船數を増し、今日は數百隻の多きを數ふるに至れり、

〔社團伏木商工會調査〕

初メテ鯨ノ越中ニ入りシ年度及沿革詳カナラス、然レトモ文政年間ニ於テハ和船ニテ僅カツ、ノ輸入アリタルモノナリト云フ、

文政六年癸未

紀元二千四百八十三年

二月 辛丑

二十三日、<sup>癸亥</sup>幕府、關東諸川の修理を富山藩に命す、

〔前田氏家乗〕

六年二月二十三日、關東諸川修營ヲ命セララル、十月落成、登營例

ニ依リ、時服十五枚ヲ賜フ、掛員モ物品ヲ賜フ、

六月 戊戌

加賀藩、難破船處置の方法を領内に告示す、

〔杉木御觸留帳〕

公義御城米等積船難破船、暨諸商船難船等之義ハ、其時々波濤風雨等之様子ニ依て、破船方不一樣事ニ候へ共、其内甚危難ニ迫リ、上陸之者ハ、先不取敢助命之手當厚取扱、食事且病養等之義、肝要ニ相心得可申事ニ候、其時宜により御賄病用等之義、御上より被仰付義も可有之候、併難船之始末、自然船頭等手前奸曲之義も難計候間、此所入念承糺始末之様子も、得と相考可申出候、尤御米并積物之義ハ、大切成義ニ候條、取揚方等綿密ニ取扱、御縮方殿重ニ可相心得、且又難船方にて人足遣方も不少、惣体役人共等人數多相集候ニ付、所方雜費も多相懸様子ニ候條、是等は幾重ニも令省略、萬端易簡相心得可申候、御郡奉行等出役之上は、猶可有指圖候得共、指懸急切之心得方、右之趣、兼て浦方等役人共江、可被申渡置候、右之趣被得其意、尤文化以後取捌方之義も、文本之通可被相心得候、以上、

六月



金谷佐太夫殿  
關屋直馬殿

右寫之通り申來候ニ付、相越候條、難破船有之節無違失、可相心得候也、

未六月六日

御郡奉行印

新川郡浦々役人

十月丙申

加賀藩、領内下吏の不正を戒む、

〔杉木御觸留帳〕

諸奉行人等、正路ニ無之品も有之候故、下役人之内奸曲成者、依姑最負ニ依て、色々不筋成品共有之段被聞召候、奉行人等不正候得は、下々邪智之者、其風ニ應候様種々謀計を巧候て、身分々々の利を而巳事といたし候、右正直成性質之者も、自然と其風ニ押移、富者は彌富、貧者は彌貧ニ相成候、支配之人々之諸願、或下民之爲と申立、或上之益坏と申出候事にも、右様之品有之、却て風俗を害し候段、其奉行下役人等不心得之至りに候、依之、急度御糺可被成候得共、是迄之儀ハ御寛

免被成候條、以來諸奉行人等、暨其下役人も萬端正路に相心得、少茂依姑最負仕間敷候、是以後若不心得之者有之候は、曲事可被仰付旨、寛政元年被仰出、其節諸奉行等に申渡候通に候、然處近年諸役所向を始、下役共申分に任せ置、御用取捌方不行届、其上囑託賄賂之義も有之、暨役先御用聞町人共、江、銀子調達等頼込候、人々も有之體粗相聞候、右様之義有之候ては、下々不正之糺方可行届様、無之事に候條、先達而被仰出置候趣、違失無之、嚴重相守候様可申渡旨、重て被仰出候事、右之趣、夫々被得其意、可申渡候事、

癸未 十月

別紙之通、御用番より被仰渡候に付寫相越之候條、可得其意候、風俗等心得方之儀に付、是迄毎度申渡置候得共、彌嚴重相守可申候、尙更手附とも江も、夫々不相渡様、可申渡候、以上、

癸未十二月

廣瀬次左衛門

金子與三之助

諸郡總年寄中

年寄並中等



十一月朔乙丑

加賀藩、領民に東本願寺焼失の勸財に應ずることを禁す、

〔杉木御觸留帳〕

今度東本願寺焼失に付、勸化方之儀堅く無之様、別紙之通被仰渡候、此節一向宗寺庵追々致上京候體相聞得候、右に付指懸り、旅用等門徒共江無心中出候義も可有之、先以本山への勸化非常の事に付、無餘義追々相勤め候義も可有之、假令且那寺より不勸とも、門徒之内、本山火災之義格別故、込寄進銀張込候族も可有之哉、既に先年本願寺類焼に付、諸郡之内、身元不相應之寄進いたし候者も有之、且一時には勸化銀不相増候故、申談勸化銀年割に相究、近く迄年々指出候向も有之體、是等は別て、百姓共憂不少義、畢竟申談、棟取候者も有之故之儀と相聞へ候、信心に事寄身元相應之者は不及申、難澁之百姓等を勸め、沙汰之限に候、近來、寺庵勸化銀之義に付、急度示方申渡置候通に候條、別て此度之儀は、末々迄堅く心得違無之様、綿密に可申渡候、若密に寄進之沙汰於承及は、夫々相糺、無用捨手當方可申付者也、

未十一月

御郡奉行

村々役人

別紙之通、諸郡共申渡候條、其許中にも尤急度心得可有之候、若心得違之者有之候は、無泥可有申聞候、此段格別申渡候、以上、

癸未十一月

木梨 左兵衛

中村新左衛門

諸郡

總年寄 中

年寄 並 中

無役年寄 列 中

小 廻 中

追て御旅屋守等、分役之人々は、總年寄より可有演述候、以上、

文政七年甲申 紀元二千四百八十八年

四月朔甲午

十四日、丁未御郡奉行、新川郡三日市柿の木騒動を處斷す、

〔下新川郡三日市町役場調査〕



柿ノ木騒動

三日市三本柿ハ、承元ノ頃、親惣上人北國下向ノ際、當所經由屋古兵衛ト云フ者ノ婆々ニ串柿ヲモラヒ、其種ヲ其宅前ニ植置ケレ三本柿生ズ、爾來幾多ノ星霜ヲ經テ、島山圓淨ノ有トナリ、今ヤ庵室ヲ建立シ、信者ノ參詣モ少ナカラサルヲ以テ、串柿ヲ製造シ、信者ニ與ヘ其喜捨ヲ得テ、庵室永綴ノ資トセリ、然ルニ辻徳法寺ト云フ寺アリ、主張シテ曰ク、親惣上人コノ三日市ニ行暮レ、徳法寺ノ開基辻源左衛門時國、一夜ノ宿ヲ與ルニ其報酬トシテ名號ヲ賜ハリ、該寺ヲ安置セルカ故ニ、三本柿ハ當ニ我寺ノ附屬ナリト、因テ徳法寺ノ境内ニ之ヲ移サントテ、互ニ烈シク相争ヘリ、當時三日市ニハ真宗ノ門徒二百餘戸アリ、コノ者二派ニ分レテ、各之ヲ助ケ、中ニハ死ヲ決シテ争フアリ、嫁婿ノ子供ノ有ルモノヲモ願ミズ、離縁スルモアリ、村内潮ノワクガ如キ騒動數年ニ涉レリ、文政七年ニ至リ郡奉行ノ調トナリ、左ノ通り裁決セラル、

覺

三日市村麻地屋新左衛門

同 村長谷川屋佐五右衛門

同 村島屋茂右衛門

右之者共、其村三本柿之義ニ付、不都合之趣有之ニ付、追込申付候條、此段可申渡者也、

申四月十四日

御郡奉行印

三日市村役人江

覺

三日市村長百姓次郎左衛門

右之者、同所ニ有之三本柿之義ニ付、不都合之趣有之、追込申付候條、此段可申渡もの也、

申四月十四日

關屋平馬印

三日市村役人江



三日市村肝煎八郎右衛門  
 同 村組合頭庄右衛門  
 同 彦左衛門  
 同 斷 庄三郎  
 同 斷 清吉

其方共儀其村ニ有之三本柿之儀ニ付、不都合之趣有之ニ付、御用之外、徘徊指留候條、可得其意もの也、

申四月十四日

關屋平馬印

右追込トハ重罪ノ刑ニテ、之ニ處セラレタルハ双方關係ノ主謀者ナリ、又關屋平馬ハ郡奉行ナリ、人民相互ノ爭論ハ所方役人ニ及ヒ、前記ノ如キ咎トナリ、三本柿ハ之ヲ取リ上ケラレ、更メテ三日市百姓共ヘ下サレ、島山圓淨ハ、所方追放、徳法寺ハ其儘ニテ事落着セリ、古語ニ桃栗三年柿八年ト云フニ違ハス、柿木騒動ハ八ヶ年ニテ落着セシト、今ニ云ヒ傳フ、當時「圓淨を落せは、何の徳法寺柿

とるための九字の名號」ト云フ、落首アリシト云フ、

加賀藩、酒醬油商等に、一定の柵下附せんとす、

〔憲令要略〕

酒屋共、自分升を以相計り申に付、是迄計方、區々相成候趣等相聞江候、依之、右計り升、改方被仰渡候に付、於役所、右升爲拵可相渡候條、是迄用來候、古升相しらへ、升數之儀早速可被及斷候、以上、

申四月十八日

柏木磯五郎印

今石動氷見町肝煎中  
 同 酒屋 肝煎中

味噌醬油、酢、是迄人々自分升を以相計、賣出候に付、計り方區々相成候趣に相聞へ候、依之、右計り升、改方候條、被仰渡候に付、遂僉儀於役所、右計り升爲拵可相渡候條、是迄味噌醬油屋等用來候、自分古升相調理、升數之儀、早速可被及斷候、以上、

申四月十八日

柏木磯五郎印

今石動氷見城端町肝煎中  
 同 味噌醬油屋肝煎中



七月 壬戌朔

十二日、西癸前加賀藩主前田齊廣薨す、

〔加賀藩史彙〕 歴世嚴封一覽

金龍公 諱齊廣 齊雲公第二子 享和二年三月襲封 文政五年十一月退老 七年七月薨 年四十三

〔前田家譜〕 ○上文ハ文政五年十一月十一日條ニ納ム 文政六年正月七日、去年ノ冬、大將軍齊泰

ヲ以テ女婿トナサント欲シ、老中水野出羽守ヲ藩臣ニ因リ、以テ之ヲ齊廣ニ告ケシム、且ツ曰婚媾約定ル、禮數ノ未タ許サ、ル者、請アル必ス其請フ所ノ如クニセント、是ノ日齊廣、聞番長瀬忠良ヲ報ヲ出羽守ニ傳ヘシメ曰、婚媾ノ事ハ已ニ命ノ辱ナキヲ拜ス、禮數ノ請ニ至テハ大將軍ノ盛意ナレト、事借踰ニ屬スレハ則敢テ請ハス、固ヨリ亦請フヘキニ非ス、然リ余レ襲封以來國民ノ爲メニ、大將軍ニ請ハント欲メ、敢テ請ハサル所ノモノアリ、今ヤ特ニ大將軍ノ德音ヲ受ク、而メ言ハサル復タ言フ可ノ時ナシ、請フ敢テ其旨ヲ陳ン、夫レ天下ノ諸侯大小ノ異ナルアレト、民ヲ安ニスルノ責ニ任スルハ則同シ、然リ國ノ小大既ニ異ナレハ、則其責ノ輕重モ亦自ラ同シカラス、而メ余レハ則大國ヲ治ムルノ責ニ任スレト、間歲江戸ニ朝スルヲ以テ、行ヲ治メ裝ヲ卸スノ前後二三月、百事

輻湊、經國ノ大務ヲ理スルヲ得ス、然レハ則心ヲ專ニシテ政事ヲ議スルヲ得ルモノ、三年ノ間ニシテ六七个月ニ過キス、而メ國ノ治マルヲ欲シ民ヲ安ニスルヲ欲ス、抑亦難カラスヤ、且ツ襲封ノ初、大將軍親シク教戒ヲ賜ヒ、曰國大ニ民繁シ心ヲ政事ニ盡シ懈怠アルナカレト、其命ヤ是ノ如ク重ク其責ヤ是ノ如ク大、而メ其往來ニ奔走スルヤ是ノ如キノ劇、故ニ國ノタメ民ノタメ五年ニ一朝、止ムヲ得サレハ則間二歲ニシテ一朝、期ハ二百年來幕府諸侯ト約スル所ノ經制ニシテ、幕府モ亦容易ニ革ムルヲ得サルヲ知ル、故ニ余モ亦容易ニ敢テ請フヲナサス、然レト大將軍ニシテ必ス余レニ請フ所ヲ言ハシメント欲ス、此ノ他請ハント欲スル所ナキナリト、出羽守依違ノ報セシ、二月廿七日郡奉行小堀政安等連署メ、一人博奕スル一村連座ノ法ヲ置ント請フ、是ニ於テ初テ博奕連座ノ律ヲ定ム、九月三日是ヨリ先キ齊廣人ヲ老中水野出羽守ニ謂ハシメ、曰余レ在位中大暑大寒ニハ、則大將軍急遞ヲ以テ存問ヲ賜フヲ辱ナフス、故ヲ以テ大將軍ノ安モ亦之ニ由テ親シク知ルヲ得、然リ致仕ノノチ例ヲ以テ斯禮ヲ賜ハス、故ニ隔離ノ親シク大將軍ノ安ヲ知ル能ハサル、殆ント異世ノ如シ、頗ル仰望ノ心ニ負クアリト、出羽守之ヲ以テ大將軍ニ告ク、大將軍以テ然リトナシ、是ノ日特旨ヲ以



テ每歲鶴ヲ賜フノ命アリ、十一月五日物頭以上ノ漁獵ヲ禁ス、略○中是ノ月、二月十  
 齊廣侍臣ヲノ老臣ニ命ヲ傳ヘシメ曰、先年來風俗ヲ正シフセント欲シ組頭ニ  
 諭スモノ數回、卿等モ亦親シク見テ知ル所ナリ、近者復タ親シク組頭ト謀リ教  
 諭ノ法ヲ立ツ、爾來少シク變スル所アルニ似タリ、而シテ未タ樂ンテ上ノ欲スル  
 所ニ趣カサル者モ亦之レアリ、夫レ君臣ハ一體ニシテ臣民各其心ヲ心トスル、譬  
 ヘハ猶ホ一身ニシテ手足ノ病ヒアルニ同シ、余レ之ヲ憂ヒ、昨日フ復タ組頭ヲ召  
 シ、一一款條シ以テ教諭ノ目ヲ示シ、且ツ人人ヲシテ其意見ヲ言ハシメ、然後定ル  
 所ノ條目ヲ諸頭ニ頒布セシム、卿等モ亦余カ斯ノ諸頭ニ示ス所ノ條目ヲ體シ、  
 各管下ノ人ヲ諭セト、七年春、齊廣教諭局ヲ竹澤ニ置キ、群臣ノ中十有二人ヲ撰  
 ヒ之ニナス、時ニ三老三才ノ目アリ、三老ハ杉野盟岩田盛照、笠間定懋ヲ曰ヒ、三  
 才ハ山本守令、寺島競、太田盛一ヲ曰フ、其他六人ハ津田居方、笠間以信、堀善勝、坂  
 井克任、松原在之、神田保益ナリ、齊廣退朝ノ暇、老臣及ヒコノ十二人ト政事ノ得  
 失施設ノ先後ヲ議シ、士氣ヲ興シ、民風ヲ正シフシ、封内ヲ至治ノ澤ヲ被ラシ  
 メント詢ル、毎ニ席ニ臨ミ、嘆惜シ、曰、坂井克昌、山森弘ノ二人ヲシテ今日ニ在ラシ  
 メハ謀議ノ間必ス發明裨益スル所多カラント、一日某シ其聲ニ應シ、曰、二人ノ

者地下ニ在リ、君ノ斯ノ德音ヲ得ル其悦ヒ知ル可ナリト、齊廣曰、二人ノ者ヲシ  
 生時ニ今日ノ舉ニ遭ハシメス、地下ニ之ヲ悦ハシムル、余レ甚タコレヲ憾ム  
 ト、三月廿八日齊廣痲疹ヲ患フ、略○中齊廣人トナリ、穎秀勤敏、明恕ニシテ嚴肅、弱冠  
 ヲリ有爲ノ志ヲ抱ク、故ニ封ヲ襲ニ及ヒ治ヲ求ル太々急、是ニ於テ位ヲ固フス  
 ルモノ、虛美ヲ獻シ、躁進ノ徒一時ノ榮ヲ竊ント欲シ、功利ノ說ヲ進メ、機ニ乘シ  
 好ニ投シ、聰明ヲ亂ル者モ、亦其際ニ出ツル無ニ非ス、然リ之ヲ試用ノ責ルニ實  
 効ヲ以テス、故ヲ以テ幸進者其職ニ久シキ能ハス、晚ニシテ益々世事ニ老シ、昔テ  
 行フ所未タ其道ヲ得サルヲ悟リ、自ラ更始ノ治安ノ策ヲ建テ、一書ヲ著シ、大綱  
 ヲ示ス、命ツケテ猩鸚鄙言ト曰フ、乃チ老臣及ヒ擢用スル所ノ三老三才等ト、背  
 肝ノ勞ヲ辭セス、勵精治ヲ詢ル、是レニ由リ一事ノ未タ施設スルアルニ及ハサ  
 レ、一時風ヲ受ケ、臣民觀ヲ革ム、而シテ其餘音流風後ニ及フ者少カラス、但シ惜  
 ムトコロノモノ、天之カ年ヲ奪ヒ、有爲ノ志ヲ遂ルヲ得ス、一時有用ノ才ヲシ  
 テ淪沒ニ歸セシム、噫、

〔石埼記録〕

金龍公 利厚 齊廣 龜代丸 加賀守 肥前守 中將 文政五年十一月二十一日致



〔憲令要略〕

申七月中將様御逝去ニ付町々へ申渡覺  
一商見世すたれ下し申事、

附り、一七日相濟候上は、指解申候、

但店簾おろし候義は、前々之振合を以、七月十二日か一七日、同十八日迄に  
而爲上申候、

一町方さわがしく無之様に可仕事、

一魚店あげ可申事、

附り、一七日相過候上は、指解申候、

一魚振賣仕間敷事、

右同斷

一諸殺生仕間敷事、

一獵業指留可申事、

附り、十二日か一七日相過候上は、指解申候、

一鍛冶細工遠慮之事、

右同斷

一麥屋遠慮之事、

右同斷

一町中普請遠慮之事、

附り、少し普請に而も勿論、板返等も遠慮之事、

一家内並外仕事之時分、下人下女等、諷等うたひ高笑仕間敷事、

一鳴物遠慮之事、

一寺方談方講釋等に、町方か參詣遠慮之事、

一町々此節祭禮有之候共、指延可申事、

一綿打遠慮之事、

附り、十二日か一七日相過候上は、指解申候、

一墓所江切籠之儀穩便指遣候儀、不若候旨被仰付候、右に付一統心得も可有之  
事に候、町役人切籠上方は、指止候趣候條、可有其心得候、

一盆中子供共、慰に墓所江罷越候儀、堅く不相成候事、



一町方子供等、不用の夜行堅く不相成候事、  
右之外、諸事急度相愼可申事、

申七月

前段簾之儀、前振に仕候所、同十九日御與力石原左盛殿、御鹽方御用として當地江御指向に付、三役人見舞に罷出候所、當地愼方之義は不宜、今石動に而雪踏迄も指留候旨、御咄に付、改而此義一統申渡、又候簾おろし申候、尤今石動之儀聞合候様御申渡に付、彼地聞合候而二七日相愼、二十六日迄にすたれ爲上申候、

但十二日御三十五日迄、町役人町廻二へんつ、夫御五十日まで、町廻一へんつ、尤夜中之事、

右

中將様御逝去に付、御觸御紙上之趣、嚴重相愼申候様、被仰渡奉畏候、私共町内急度相愼候様申渡候、以上、

申七月十三日

惣町組合頭  
兩人つゝ、連印

町肝煎衆中

文政八年乙酉

紀元二千五百八十五年

三月 朔子

六日、<sup>巳癸</sup>竹亭燒製造者太田傳右衛門死す、

〔太田舊記〕

竹亭燒及埴生燒

西礪波郡埴生村太田氏は、平氏ニシテ二十六代ヲ太田信岑ト云、<sup>明治年間ノ是ヨリ前代、十村ト云フニ當ル</sup>屋ヲ勤ムル事十代ニ及フ、信岑高祖父ヲ佐次兵衛信就ト云、安永天明ノ頃マテ、公務ノ餘暇好シテ樂燒ヲナシ、様々ノ茶器ヲ製ス、然レ共、釉藥未タヒラケス、飾色又ハ薄萌黃ニテ多分大槌樂體ナリ、寛政三年、享年六十三ニテ没ス、同人孫、則チ信岑曾祖父ヲ通稱傳右衛門竹亭ト號シ、柳溪ト云、性茶道ヲ好ミ、千家ノ後見、鑑樂庵澤宗直ニ教ヲ請ケ、書ハ始メ瀧本流、後チ焉石ヲ學フ、多年樂燒ヲ練磨シ、ノンコ一入ヲ目的トシ、黒赤青白ハ云フモ更ナリ、朱紅金入銀星杯ヲ燒ク、就中銀星紅、藥ハ家ノ發明スル所、邸内及金澤ニ於テ所望ニ隨ヒ製ス、門人モ高丘瑞龍寺藏六庵、<sup>和尙ノ號</sup>、<sup>ヲ失ス</sup>、舊藩士等ニモ數人アリ、富田



痴龍翁トモ親密ニテ、秋産戴笠老人ハ朋友ニテ、燒物ニ捺用スル戴笠彫ノ印章數顆ノコレリ、原土ハ多分西京ノ土ヲ取寄用ヒタリト、今猶殘土若干アリ、一ト年同人、二男柳谷柳谷ハ作ニヨシヲ伴ヒ京師ニ出テ、五條坂茶碗屋長兵衛方ニ寓ス、知恩院ノ宮尊超親王ノ御愛顧ヲ蒙リ、屢々旅寓ヘ光臨御傳授アリテ、即手製モアリ、竹亭ノ茶碗ニ「唐錦」ト銘セラレ、御自作ノ香合モ下賜アリテ、畏クモ殿下ト合作ノ香合杯モ于今所藏セリ、又庭田亞相公ノ洛外閑居ヘモ被召、茶碗ニ「紫」ト銘モ給ハリ、殊ニ饗饌ヲ被下タリト云、將タ花頂山ヲ辭シ、歸國ノ節、今一度上京スヘシト下命アリシモ、幾年ナラスシテ此宮モ薨去アリ、竹亭モ文政八年、行年五十四ニテ歸泉セシニ依リ、再度ノ上京ハセサル也、金城山本與興、晩年入成、最早老年ニ及ヒタレハ、多年刻苦ノ法ヲ讓リ度ト申セシニ、竹亭曰ク、互ニ己カ得意ノ所ヲ燒クヲ妙トスヘシト、固ク辭シテ其法ヲ受ケズト云フ奇話モアリ、又生前數十個ノ樂燒ヲ邸内ニ埋ム、今ニ至テハ其所在不明ニテ掘出ササルナリ、京都ニテ燒シハ花頂山ニ而作ルナトノ記文アリ、前述ノ樂燒ヲ竹亭燒ト稱スルナリ、

信岑ノ祖父、通稱佐次兵衛信近ト云、柳山ト號ス竹亭ノ長子ナリ、天保年間陶器

ヲ製ス、多分土燒ニテ石燒モアリ、原土ハ埴生村山間、又近村山地等ノ土ヲ用ユ、石ハ五ヶ山厚朴峠、又能登地名不詳ヨリ曳クト云、全ク古九谷ヲ目的ニテ、錦手、又青九谷手又ハ三島瀬戸、織部燒、青磁物モ燒キタリ、皿鉢等種々日用ノ調度ヲ製ス、文久二年歿ス、行年七十二、其後同村牧谷嘉左衛門ト云人、此竈ヲ襲ヒテ燒クト雖モ、柳山製ノ如キニ非ス、粗品而已店賣ス、此嘉左衛門モ歿シ、其後ハ竈廢絶ス、是ヲ埴生燒ト稱スルナリ、

〔西礪波郡埴生村役場調査〕

太田傳右衛門(竹亭)ハ、文政八年三月六日、五十四

歳ニテ死歿ス、

〔參考〕

〔加賀越中陶磁考草〕

埴生燒

埴生村太田佐十郎、元埴生村佐十郎ト稱シ、礪波郡宮島組十村役タリ、陶器ヲ燒シハ天保ノ頃ニシテ、維新前ニ故人トナレリ、埴生村八幡社ノ後窯ヲ築キ、陶器ヲ燒ク、土燒物ヲ製ス、多クハ茶器ナリ、五ヶ山ホウ峠ノ石ヲ採リ、石燒ヲ試ミタリ、余其試燒ノ一ヲ得タリ、磁質堅牢、淺青ニ鼠色ヲ帶ヒテ、白磁ト稱スルニ至ラ



サレテ、亦土焼ニ非ラス、染付ヲ以テ外面ニ廣狹四條ノ線ヲ規シ、内面ニ二條一ハ廣ク、一ハ狹ク、所謂子持線ヲ規ス、外面ハ中央ニ左ノ文字ヲ書セリ、

越中礪波五ヶ山、ホウ峠石、一色以造、至極細工出來安、天保三年九月 柳山 陶器所、

一 佐十郎ノ製陶ハ其傳詳ナラス、

嘉永安政頃迄、同村ニ土器ヲ焼シハ佐十郎ノ遺法ニ依ルカ、其窯ハ別ナルカ、而シテ此ハ全ク營利ノ爲ニスルモノニシテ、佐十郎ハ十村役ニシテ、有福者タレハ其製陶ハ、全ク慰ニ製シタル者ト見ユ、

佐十郎ノ土焼茶碗ヲ製スルヤ、大甕ニ其製品數十百個ヲ容レ、此ヲ土中ニ埋ム、年ヲ經テ穿出セハ、其製品古色ヲ帶テ上品トナルト云ヒ自ラ之ヲ土中ニ埋タリ、然ルニ其義子、太田千作其埋シ箇所ヲ知ラス、養父生前之ヲ聞カザルヲ悔ヒ、甚タ遺憾ニ思ヒシト云、

同村別ニ陶器ヲ製スル者アリ、廬ヲ開テ其製品ヲ賣ル、維新後猶其業ヲ繼續ス、而ルニ其製スル所皆雜器ニシテ、近村ノ需用ニ應スルノミ、蓋佐十郎ノ遺傳ニアラザルベシト云、

十二月癸丑

八日、庚申江戸の加賀藩邸火あり、延て富山藩上邸に及ぶ、

〔前田氏家乗〕 宗家邸ヨリ失火、爲メニ我カ上邸延焼ス、

是歲、加賀藩、始めて印札を通用す、

〔憲令要略〕

一文政八年、御印札初而御通用、尤升屋次左衛門、酒屋宗右衛門、兩替二人之預り手形に御座候間、十年亥閏六月、壹匁、貳匁、參匁、五匁、拾匁、等之品々初而御出來通用仕候處、右兩人之名前御指止銀仲預りと、天保七年申、正月、御改被仰付候、五分札は同八年酉八月初而御出來、引替所、淺野屋次郎兵衛方御指止、御算用場に而嘉永四年八月より御引替被仰渡候、

文政九年丙戌 紀元二千四百八十六年

十一月戊寅

二十五日、壬寅加賀藩、綿羊下附のことを、礪波郡今石動等の者に告ぐ、

〔憲令要略〕

公邊、先年、金龍院様御所望之綿羊、當時貳拾疋計御用無之候に付、御領國町人



共之内伺置、羅紗等織出申度望之者も有之候は、可被下置候之條、此段一統可申談旨御勝手方、年寄中被申渡候に付、支配所へ申渡候様、御算用場奉行、堀孫左衛門より申談有之候條、被得其意、右之趣、今石動等三ヶ所江被申渡望之有無、申聞候様可被申渡候、若相望候者有之候得は、其段早速御算用場江可申達筈に候間、急速夫々可被申渡候、以上、

戊十一年二十五日

本多式部印

鑄木誠太夫殿

文政十一年戊子

百八十八年

五月己亥朔

僧純稱寂す、

〔礪波誌〕

僧純稱 福光の人、氏家正悦の男なり、天性温和、幼にして恬を喪ひ、母に事へて孝順、長して釋氏を好みぬ、初め加賀國金澤に往き、丸山了悦に従ひて醫を學ひ、居ること多年なりしかと、未だ曾て意と爲さず、心を佛經に一らし、遂に去りて京師に之き、東山西光寺の住僧某に師事し、祝髮して淨土律の僧と爲れり、時に年二十六、研省覃思、大に啓發するところあり、後ち近江國矢橋、大

津、及び山城國、伏見の諸寺に歷住し、四十歳にして身淨土律にありて禪學を好み、五十餘歳にして遂に皇都東福寺の方丈と爲れり、時に母の病革るを聞き、福光に歸りしかと、未だ家に到らずして母歿せり、純稱喪に居ること數月甚た謹む、晩に周防國山口常榮寺に住し、文政十一年五月寂せり、年六十二、

七月己亥朔

十日、申、黒部川氾濫す、

〔下新川郡役所調査〕

黒部川ハ、口碑ニ傳フル所ニヨレハ、往古愛本橋下中ノ口ヨリ、愛本村、新屋村間ヲ貫流シ、横山村大字古黒部村ヲ經テ海ニ注キシモノナルモ、貞享二年ノ大洪水ニテ、現今ノ位置ニ變遷シタルモノナリ、或ハ寶曆年間ノ洪水ニテ變遷シタリトモ云ヘリ、當時ハいろは川ト稱ヘ、四十八瀬アリ、洪水毎ニ流域ヲ變シ、隨テ村界ヲ左右シタル形跡アリ、又三日市以東國道甲線ノ沿道ハ、一體ノ雜林ニシテ荆棘繁茂ノ未開地ナリシカ、佐々成政時代ニ堤防ノ築造ヲ命シ、流域ヲ制禦シ、漸々開墾セラレタルカ如シ、降テ文政十一年七月十日ノ洪水ハ、下立、浦山、若栗、荻生、大布施、村椿、生地、石田ノ諸村ニ氾濫シテ海ニ注キシモ、河流ハ漸次東ニ移リ、現在ノ位置ニ變セリト云フ、



此者同町祭禮之儀に付、兼々信仰いたし候神社持分之神主申合不相立義は、手筋之役人、外方賄賂を取請候故、不筋之取捌に相成候、坏と品重き虚談を外之者共江申合書認め、其外の支配奉行人手前を悪祭いたし候趣をも調込、手違之方江及内訴に候義有之畢、不届至極に付、如斯申付者也、

寅九月二日

一 御公事場行、相濟申候故、右之者共都合七百餘人印を押、則御公事場に相納可申候事、

天保元年庚寅

紀元二千四百九十年

三月 己丑

加賀藩、領内に用金を賦課す、

〔憲令要略〕

文政十三庚寅三月、御領國町在へ五ヶ年に而、五千貫御調達被仰渡、尤割符左之通

一 三百貫目

高岡町

一 百三十一貫八百目

三ヶ所

内 四拾貳貫六百目

今石動

五拾五貫目

氷見

三拾四貫貳百目

城ヶ端

一 六拾六貫目

魚津町

一 四百七拾參貫三百八拾目

礪波郡

一 三百三拾六貫百七拾四匁

射水郡

一 貳百九拾貳貫四百五拾八匁

新川郡

〔參考〕

〔金府舊記〕

問、拜借銀は何年何故事起候哉、答、利家公御代徳政と云事被命、借狀破却して、貸借徳返濟なく、又連々諸士困窮して、借銀莫大におよび、延寶五年、公庫が金銀を被出諸士ニ與へ、知行之内令除知上濟する事也、銀主は銀を渡す證文取返破却す、今年以後年銀相定之通、拜借銀上濟知行令收納候、然る所元祿年中日本一統花美に成、諸國困窮之處、將軍家が金銀吹替被命、古金銀元之字金銀ニ吹替所品下リ候故、米價貴となり、是ニよつて世上ゆるやかに、御領國商人柳橋屋某、諸民之貯用銀等請、諸士收納一々被償、不足の輩は其頃ニ□□銀子を借足を償銀と云、利足を指添兩收納賣代を以返濟する事也、連判退轉人及



文政十二年己丑

紀元二千九百八十九年

六月 癸亥

新川郡魚津町民、奉行の處置を憤りて騷擾す、

〔富田覺書〕

- 一文政十一年八月、田地方八幡宮江、江戸より富山淡路守様御拜領挑灯四張參り候に付、其節町奉行所岡田八兵衛御代に而、御咎有之候故出祭相止申候、
- 一同十二年、出合之諏訪宮、三月十七日、當番高倉相勤候所、田代第湯立神樂之上申分仕候而、段々詮義之上録所罷出、其上寺社奉行咄ニ相成候、
- 一同十二年六月十八日、亥上刻より中島田におゐて、太鼓打出し時之聲を上、數多集り申候事、
- 一同月二十一日、同刻右同斷、
- 一同月二十三日、同刻右同斷、
- 右に付六月二十七日、角川町倉屋傳四郎宅に而、御出張役所相立、右上手七百餘人集り御用之節も不聞入、其上役人江過言申聞候事、
- 一同月二十八日、奉行所江頭立人呼出し詮義御座候事、

- 一 七月六日、金澤御公事場、御差向に而、御呼出御座候而、五六人被召捕候、
- 一 軍代御役所江被召捕候人々

濱屋 彦助

稗島屋三郎兵衛

獵師市右衛門

- 一同年七月十二日、又候金澤御公事場、御指向に而、御呼出御座候而、五六人被召捕候、

- 一同九月、町役人肝煎、并町頭組合頭御公事場江御呼出御座候人々

肝煎坂東屋宅左衛門

- 一天保元年七月十八日、濱屋彦助、獵師市右衛門、此兩人御公事場に而、打首に御座候、其上同二十一日、上の端住吉村領分におゐて、兩人之首立置、梟首之高札に相立申候、

- 一同九月二日、吉見屋幸助首右同斷に而、同所上の端右同斷、

梟首 越中魚津橋向町

吉見屋幸助



此者同町祭禮之儀に付、兼々信仰いたし候神社持分之神主申合不相立義は、手筋之役人、外々賄賂を取請候故、不筋之取捌に相成候、坏と品重き虚談を外之者共江申合書認め、其外の支配奉行人手前を悪祭いたし候趣をも調込、手違之方江及内訴に候義有之畢、不届至極に付如斯申付者也、

寅九月二日

一 御公事場行、相濟申候故、右之者共都合七百餘人印を押、則御公事場に相納可申候事、

天保元年庚寅

紀元二千四百九十年

三月 己丑 朔

加賀藩、領内に用金を賦課す、

〔憲令要略〕

文政十三庚寅三月、御領國町在へ五ヶ年に而五千貫御調達被仰渡、尤割符左之通

一 三百貫目

高岡町

一 百三十一貫八百目

三ヶ所

一 内四拾貳貫六百目

今石動

五拾五貫目

氷見

一 三拾四貫貳百目

城ヶ端

一 六拾六貫目

魚津町

一 四百七拾參貫三百八拾目

礪波郡

一 三百三拾六貫百七拾四目

射水郡

一 貳百九拾貳貫四百五拾八目

新川郡

〔參考〕

〔金府舊記〕

問、拜借銀は何年何故事起候哉、答、利家公御代徳政と云事被命、借狀破却して貸損借徳返濟なく、又連々諸士困窮して、借銀莫大におよび、延寶五年、公庫の金銀を被出諸士ニ與へ、知行之内令除知上濟する事也、銀主は銀を渡す證文取返破却す、今年以後年銀相定之通、拜借銀上濟知行令收納候、然る所元祿年中日本一統花美に成、諸國困窮之處、將軍家の金銀吹替被命、古金銀元之字金銀ニ吹替所品下リ候故、米價貴となり、是ニよつて世上ゆるやかに、御領國商人柳橋屋某、諸民之貯用銀等請、諸士收納一々被償、不足の輩は其頃ニ□□銀子を借足を償銀と云、利足を指添兩收納賣代を以返濟する事也、連判退轉人及



借延等、以延引之風俗成、七八歩は相濟、二三步は何となく年季返濟、是又捨行之様成、此銀子も相止候、是松雲公御代也、享保十年、護國公御代、御家中諸士初急難御救として百石に付、銀貳百目宛御貸渡、諸士上納、并借銀等双方書出す、公義へ御引請、諸士は百石に付五石宛圖リにて除知御藏入に相成、大坂登せ拂代を以て上濟、并町方配分、當割合有之、夫々被渡下候、又延享三年大應公御代、右之通書出ニ被仰付、御貸銀は無之候、寶曆元年、謙徳公御代、上納銀及借買銀最前之如く書上ニ罷成、百石に付五百目圖リ、銀子は拾五年之年賦を以、無利足にて返濟なり、

〔憲令要略〕 天保七年丙申五月、被仰渡候、三州町在江御用銀四千五百貫目、五ヶ年ニ御調達之事〇中

- 一五拾貫目 魚津町
- 一貳百七拾貫目 高岡町
- 一八拾貫目 三ヶ所
- 内貳拾五貫八百五拾六匁 今石動
- 三拾參貫三百四拾四匁 氷見
- 貳拾貫八百目 城ヶ端

一八貫目

遠所寺社門前地

一貳千七百七十九貫目

三州御郡地

五月戊午朔

二十日、丁丑富山儒臣大野鼎歿す、

〔諸藝雜誌〕三 拙齋先生大野君墓碑銘

昔余遊京塾也、始識先生於大典禪師之門、并榻月餘、風標端整、舉止儉朴、食不求美、衣不務華、心既欽其德行、而聆其譚吐、閱其著撰、雄偉佚蕩、中自有風流間雅之態、蓋亦服其才調矣、先生名鼎、字國寶、稱十郎、氏大野、本姓紀、拙齋其別號也、其先自越前徙、越中富山、六世孫彌次兵衛、乃先生父、賣藥爲業、而治家有法、母沖野氏有子十人、先生其季也、幼敏悟異、凡兒本長寺日深見奇之、欲請以爲僧、先生不肯、後使學、方伎於藩醫某、某曰、元龍必爲良醫矣、元龍先生小字也、然非其好、則亦棄而去之、讀書於妙傳寺、却掃人事、鑽尋典奧、於是乎學日益進、一時耆宿、皆期遠到富山、故大夫村公、殊愛其才、厚餽以資學費、上毛河子靜應藩辟而至也、一見遽稱曰、是國之寶也、因以字焉、德憲之、學於上國、乃遊京、往來乎搢紳文儒之間、所交皆當時名流、會得脚疾、而還國、後再遊、修刺謁大典禪師、々簡亢不狠容接、三往乃見、使留侍側、夙夜矻々、刻意



力學師恐得疾時慰諭之先生曰昔有相鼎者謂及壯而死自願君子疾沒世而名不稱焉是所以刻苦自勵也師曰汝志雄氣旺吾保汝決不夭折也先生執經質問反覆師曰鼎論經義固合我意鼎也可與言經仁正侯聞其名聘之不應及歸鄉聞越之系水某多藏異書往就而讀之偶與師書至言白河侯因師召先生之狀亦不應先生屢辭聘召蓋非為少室索價不忍去父母之母也年二十八始解褐於富山藩儒員夫不出鄉邑坐露寵祿奚啻衣綿之榮但以父母不見之為憾乃推俸贍兄以終其身富山侯薨嗣君立寵遇益渥拔例異數文化九年之江戶入昌平學讀未閱之書學中矜佩無不心竊敬服者或以疑義質精里古賀先生曰十郎在何煩吾之為其為識者所器重類如此明年歸鄉侯命蠟術群公子及藩貳自江戶至屢召延接大崇重之陞為祭酒每歲特賜白金若干文政十三年五月二十日得疾卒年五十有九矣先生性至孝及遭大喪哀毀過禮事死如生一思親輒淚涔々而下至老不已為人忠信篤厚事權貴不阿遇幼賤以誠撫宗族有恩待故舊不渝教督後進威愛兼行故卒之日閭閻無不痛惜焉配三村氏生一男二女先沒不再娶二女皆夭男名士文稱欽一郎有才識恩襲補教授屬先生疾士文在江戶遣人召之疾革手書數字付姪某曰兒至則示之自是緘默而不言八日而終士文至撫棺悲慟殆如不欲生聞者感之六月十日葬於

妙國寺會葬者數百人香火不絕于墓亦可以觀先生恩義結人之廣也士文不遠千里持狀來乞銘墓余謂先生之學無常師其入京所交淇園諸子皆一時峻儒特慕典師從之不挾方之內外親灸研講韓子所謂吾師道也者耶平居端默寡言淡于物欲所著文詩率不留稿或者乞字亦不甚拒至其好學猶飢餒之於飲食也故學無所不通造詣之深非人所能窺測余也文非其道況才短筆短何以彰先生之美而傳之悠久乎願昔遊典師之門者才髦不為黜而皆既歿矣非余誰宜銘不得辭以不敏銘之曰  
身出賈家 學窺聖域 釐下求師 方外便得 糲飯敝衣 俛焉學殖  
蓄久發遲 造詣匪測 本藩登庸 舉朝取則 品名不虛 遂寶于國  
人茲闡推 道厥茅塞 嗚呼遺孤 一經傳德

敕住妙心賜紫沙門阿波寔玉潤撰

天保二年辛卯

紀元二千四百九十一年

二月甲申

八日、卯富山中町火あり、

〔富山市沿革志〕

天保二年二月八日、中町ヨリ出火シ、五十戸許ヲ燒失ス、

二十七日、庚加賀藩、伏木佐渡間の通船を達す、



〔社團伏木商工會調査〕

天保二年二月二十七日、拾參艘ノ倭船ヲシテ、伏木浦ヨリ佐渡通往來開届ラル、弘化四年ニ至リテハ、月三十五艘乃至四十艘ノ商船絶エズ、轉集セリ、

四月 朔 癸未

十二日、<sup>甲</sup>富山西田地方火あり、

〔前田氏家乘〕

天保二年四月十二日、富山城南四ツ谷ヨリ失火、風烈城下大半延焼シ、三升形、東出丸、庫藏、各役所悉ク焼燼セリ、公子及ヒ城中ノ婦人等、皆避ケテ布勢村ニ到リ終夜泣涕ス、依テ急ヲ江戸ニ告ケ、又國境不慮ノ備トシテ澁谷猪右衛門部下ノ足輕ヲ率シ、加賀澤村ニ出張ス、城下戸數凡ソ五千餘ヲ延焼シ、川ヲ隔テ石坂村又ハ奥田村ヲ燒クニ至ル、

〔富山市沿革志〕

四月十二日正午、西田地方濱田彌五兵衛ノ家ヨリ出火ス、燒ケト解ス、當初其ノ火元ハ谷七兵衛ナル歟、將タ濱田彌五兵衛ナルカ、未ダ分明ナラザリシカ、或ルヒトノ狂歌ニ曰ク、谷濱田誰ガ火元カ知らねども谷と云ふ字ハ火の會マ、南風最モ強烈ニシテ、黄昏ニ及フ比、漸ク鎮火シ、三升形、東出丸、西出丸、本丸等ノ庫藏、各役所皆盡ク燒亡シ、東ハ稻荷町、柳町ノ間ニ架セル橋ヲ界トシテ火ヲ消シ、北新町等ヨリ飛火シテ、東田地方、西稻荷二ヶ村ノ内ニ類燒

ノ家モアリテ、小島新川原、今木町、木町モ悉ク皆燒燼シ、東南ハ石倉、餌指、上金屋、黒木、五番、南新、中野、東橋、西横千石、及ヒ東西大工、山王各町モ亦延焼シ、南西ハ西四十物、旅籠、平吹、鐵砲、七軒ノ各町ハ言フニ及ハス、舟梁モ二十艘許ノ舟ヲ燒失シ、橋北ハ愛宕町、舟橋、今町ニ至ルマテ延焼シ、神明社前ノ橋詰ニ於テ漸ク撲滅シタリシカ、一時燎原ノ勢ナリシヲ以テ、燒失社寺人家合セテ八千三百四十三戸、土藏百四十四棟、納屋六百十棟、毀家四十二戸ニシテ、九十三ヶ町二ヶ村ニ亘リ、燒死者七十人許ノ多キニ及フ、其ノ慘狀推シテ知ルヘキナリ、斯ノ時、東西四ノ所ノ魚問屋共ニ類燒シ、就中東四十物町ノ間屋ハ一旦假ニ之ヲ造作シタルモ、二番町吉川屋多七郎ノ燒跡ニ就キ、新ニ魚問屋ヲ設置シ、從來分立セル兩所ヲ廢シテ之ヲ一所ニ合ス、

〔參考〕

〔前田氏家乘〕

五月還城、近藤丹後、淺野大學ノ邸宅ヲ借り、公ノ居所及ヒ政事堂ニ充ツ、此ノ月、城下火災ノ實況ヲ具シ、官金貸與ヲ請願セラレ、幕府請ヲ容レ金五千兩ヲ貸附ス、

是夏、霖雨、諸川氾濫す、

〔前田氏家乘〕

夏期霖雨シ、米穀腐枯シ、川流汎濫、田圃大害ニ罹ル多シ、爲メニ



米一萬三千石、銀百二十貫、免除セラレ、

八月庚辰朔

二日、辛巳新川郡魚津火あり、

〔富田覺書〕

天保二年卯八月二日午上刻より、新下獵師町江口屋三四郎出火

ニ而、折節西風強氣敷候而、數多諸寺庵迄燒失仕候、

ヶ所

一新下獵師町、鬼江町、新下新町、八間町、寺町、中町、荒町、馬出シ町、東小路町、眞成寺町、餌指町、立町、神明町、金星町、大町役所まで、十人町、川原町、加茂川町、近在、下村、木村、家數六十四軒計燒失仕候、

一車屋佐平次、御給人藏所有米二百石餘燒失仕候、

一神明橋燒失仕候、高倉神明本社、

寺庵井山伏

一專光寺、法善寺、常泉寺、口陽院、眞成寺、長教寺、勝樂寺、等覺寺、榮明寺、常德寺、來寶

院、寶勝寺、

一下村、本村、照善寺、井寮

佛教寺、正圓寺、教恩寺

同村、安成寺、井寮

法林寺、誠明寺

同村、大泉寺

本江村、花王寺

外本江村、燒失

一家一軒ニ付、御貸米一石宛、拾五ヶ年賦被仰付候、

一右側斷葺文宛、御役所より當分御貸被仰付候、

一貳千石拾五ヶ年賦被仰付候ニ付、此分家建銀興して御貸被仰渡候、

一通筋家建被仰付候ニ付、間口一間ニ付、百目宛、御貸被仰付候、

一右燒失ニ付、軍代前田才記様御代ニ而、巡見ニ御座候、

天保三年壬辰

紀元二千四百九十二年

七月乙巳朔

六日、庚戌幕府、富山藩の城廓を修營することを許す、

〔前田氏家乘〕

三年六月十五日、城郭修營ヲ企ラレ、御用番青山下野守等ニ上



申セラル、曰ク越中國富山城ハ去ル卯四月十二日、城下町家ヨリ失火シ、延焼城  
内ニ及ヒ、本丸ハ往年焼亡、屋宇之レナキモ、三ノ丸借家、二ノ丸諸役所、其ノ餘諸  
番所焼失セリ、依テ本丸内ニ從前三ノ丸假屋ノ如キ屋宇ヲ作り、外形櫓門等ハ  
假リニ作り、追テ構造ヲ完備スヘキ旨、繪圖ヲ附シテ上達セラル、七月六日、松平  
周防守、大久保加賀守、水野出羽守、青山下野守連署ニテ、越中國富山城大手門番  
所一箇所、本丸居住一箇所、鐵門一箇所、侍番所一箇所、足輕番所一箇所、同所土居  
上塀打廻一箇所、搦手門番所一箇所、同所小門櫓門一箇所、西出丸足輕番所一箇  
所、本丸二ノ丸堺兩側櫓一箇所、二ノ丸櫓門一箇所、足輕番所一箇所、同所堺門並  
ニ番所一箇所、同所時鐘所一箇所、三曲輪櫓門三箇所、同所足輕番所四箇所、同所  
長屋五棟、同所赤藏一箇所、西出丸後通櫓門一箇所、東升形門番所一箇所、西升形  
門番所一箇所、許可セラル、旨示達アリ、

天保四年癸巳

紀元二千四  
百九十二年

是秋凶作、

〔前田氏家乘〕

此ノ年、氣候不順、穀風水ノ爲メニ損シ、五千六百石餘免除、

〔石埼記録〕

天保四年、領國非常ノ凶荒ニ由リ、引免ヲ以テ貸米拾六萬石ヲ申

渡シタリ、

天保五年甲午

紀元二千四  
百九十四年

二月

丙申

二十一日、丙辰新川郡魚津火あり、

〔富田覺書〕

天保五年午二月二十一日、戌上刻々、下新町四ツ屋傳左衛門より

出火御座候て、折節風強く御座候ニ付、焼失之箇所、

一下新川町、鬼江町、立町、寺町中程、荒町、照顯寺大門切、馬出シ町も同斷、中町、大町、

岡町、島屋九右衛門邊迄、上新町中程、新上獵師町、橋向町、北側通新鹽屋町、右同

斷、出丸町光勝院迄、家數六百七拾軒、除焼失仕候、

一家一軒ニ付、御貸米一石宛、拾五ヶ年賦被仰付候事、

五月

乙丑

前年の凶荒を以て饑る者多く、疫病流行す、

〔前田氏家乘〕

此ノ年五月ニ至リ、昨年ノ凶作ニテ饑人多シ、依テ五百六十石

餘救恤セラル、

〔石埼記録〕

翌五年春ニ至リ、貧民益々多ク、疫病大ニ行ハル、乃チ夫食ヲ給シ



藥劑ヲ施シ、百方救助セシ爲メ國庫空竭セリ、

〔参考〕

〔杉木御觸留帳〕

貧民御救方之儀ニ付、今般被仰渡之趣申談候處、猶又其元中  
 詮議之趣、書取を以申聞ニ付、拙者共におゐて猶重々及詮議、委細夫々御達申候  
 處、御年寄衆に於ても種々御詮議之上、村々江右御手當御米御渡置之儀ニ、重而  
 御治定之旨被仰渡候、根元御危迫之御中、當時米銀共御手當方甚御手薄之御内  
 には候へ共、御國民御撫育方之儀ハ、大切之御儀ニ付、格別之御詮議を以右體厚  
 御取扱も被爲設候儀ニ候條、幾重にも是等之處、厚存込過分之御難題ニ不到様  
 取計候儀專要ニ存候、此段村役人一統不相洩様、譯て念頃ニ可申談置候、依て先  
 一村江御米少々宛可相渡候、所ニ寄代銀にて請取置、雜穀等買置申儀勝手次第  
 ニ候、右兩様共尤不虞ニ備置候て、萬一可行倒程之者之爲めに可致置候、右之趣  
 に候條、是迄身元相應之者共、被取救候者共、猶又志を盡し相救候様可申聞候、右  
 ニ付心付候品も有之候ハ、早速申聞べく候事、

午三月六日

御郡奉行

諸郡 惣年寄中

〔憲令要略〕

犬目付江

天保五年

年 寄中

時疫流行之節此藥を用て、其煩をのかるへし、

一時疫には犬つぶなる黒大豆をよくいりて壺合、甘草壹匁水にてせんし出し、  
 時々吞てよし、

右醫瀆に出る、

一時疫には茗荷之根をば、つきくたき汁を多く吞てよし、

右時後備急方ニ出る、

一時疫ニは午房をつきくたき汁をしぼり、茶碗半分つゝ、二度吞て、其上桑の葉

一握ほど火にてよくあぶり、きいろニなりたる時、茶碗ニ水四盃入、二盃にせ

んして一盃飲て汗をかきてよし、若し桑之葉なくば、枝にてもよし、

右孫真人食忌ニ出る、

一時疫にはねづ殊之外つよく、氣ちかいの如くさわきて、くるしむには、芭蕉の  
 根をつきくたき汁をしぼりて飲てよし、



右時後備急方ニ出る、

一切の食物之毒ニあたり、又いろくの草木きのこ、魚鳥獸など煩ニ用て其死をのかるへし、

一切之食物之毒ニあたり、くるしむよは、いりたる鹽をなめ、又はぬるき湯よかき立飲てよし、

但草木之葉を食て毒にあたりたるは、いよくよし、

右農政全書ニ出る、

一切の食物の毒ニ當て、むねくるしく腹張痛ニハ、苦參を水にてよくせんし飲て、食を吐出してよし、

一切の食物にあたりくるしむに、大麥の粉をこふはしくいりて、さゆにて度々飲てよし、

右本草綱目に出る、

一切の食物に當られて口鼻ハ血出てもたいくるしむには、ねきをきさみて、

壹合水にてよくせんじ、ひやし置きて幾度も吞へし、血出やむ迄用てよし、

右衛生易簡ニ出る、

一切の食物の毒にあたり煩に、大つふなる黒大豆を水にて煎し、幾度も用て

よし、魚にあたりたるにはよくよし、

一切の喰物の毒に當り煩に、赤小豆の黒焼を粉にして、はまくり貝に一ツ程

宛水にて用ゆへし、獸の毒にあたりたるにもよし、

右千金方ニ出る、

一菌を食あてられたるに、忍冬の莖葉を生てかみ汁を吞てよし、

右夷賢志ニ出る、

右之藥方凶事之節、邊土の者雜食之毒ニ當り、又凶事之後必疫病流行之事あり

其爲に簡便方を撰むへき旨、依被仰付諸書之内より致吟味出也、

享保十八年辛丑十二月

望月三英

丹羽正伯

右享保十八辛丑年、飢饉之後、時疫流行候處、町奉行所江板行被仰付御料所村々江被下候寫、

右者當時諸國村々疫病流行いたし、又ハ輕き者共雜食之毒に當り、相煩致難義



候趣相聞へ候處、前書、享保十八丑年村々江被下置候、御藥法書付候議、年久敷事  
故村々ニ而致遠失候義も可有之候、付、此度爲御救右之寫、村々江領主地頭  
相觸候様可被致候以上、

五月

御算用場

奉行江

〔杉木御觸留帳〕

天明四年、諸國村々疫病流行、又は輕者とも雜食にて毒ニ當  
り致難義候趣相聞候ニ付、藥法之義從公儀相渡候、御書付寫別紙之通ニ候、當時  
御那疫病流行ニ付、御醫者をも被遣候得共、右藥法ハ村方之者共、杯用候には、至  
極簡易にて可致品に付、猶又寫相渡候條、一統相觸候様、御那奉行並遠所所々町  
奉行等江可申渡候事、

五月

今般御郡方へ、御醫師被下候儀ニ付、心得方御窺申上候處、左之通被仰渡候、

一御醫師之儀、先ハ町立等之所々ニ止宿有之間ニ候間、其所々並近邊等之病人  
罷出診察相願、御藥頂戴可仕、難罷出程之病人は其所江御醫師可被罷越候間、

其段村役人より可相願、尤大抵之所は御醫師步行にて可被罷越、遠方にても  
切棒にて、其所々人足を以て被罷越候様被仰談有之候間、常體金澤より招待  
仕候如く、人足に雜費相懸候儀と心得違不仕様入念可申談置、併右様にても  
相招候儀出來不申人々は、病氣之様子、村役人委曲聞請、其様子御醫師被申達、  
御藥頂戴可仕事、

附、御醫師泊り所より遠方之者にて、急々診察相願候義に候へは、兩手合  
之中、何方へ成共願出可申事、

一疫病に不限、何病氣にて、御療治相願度者有之候は、右之通相心得可申事、  
附、身元相應之者にて、御療治相願候義、不指支事、

一右御藥頂戴仕候人々、名前并御藥數可一々帳面に記置、追而御改作方江指上  
可申事、

一右之通被仰渡候に付、今般御醫師被下候御趣意者、所方におゐて服藥も仕得  
不申、因窮人共江被下候儀と奉恐察候、左候へは身元相應之者迄も、御療治相  
願御施藥頂戴仕候儀は、奉恐入候儀に御座候段申上候所、其儀は身元相應者  
にて、御療治相願候儀不指支、尤身元相應之者志有之、藥禮仕候義、勝手次第、



御醫師江直に指出可申、若御醫師不被致受納候は、其儀に不及、左様の所に相泥み不申、追て右之様子御達可申上候旨、被仰渡候事、

一右御醫師被下候儀は、格別之思召を以被仰付候儀に候間、萬一心得違いたし、御療治可受者相洩置候ては、村役人始いつれも申譯難立候間、此處組主附より入念に申談、村々心得違少しも無之様可致段、重々被仰渡候、尤右は御改作方に付、格別之御取扱被仰付候儀に候間、難有奉存、彌農事出精可致段被仰渡候事、

右之通、御窺申上候趣、諸郡へも可申談、山森殿等より被仰渡候に付、相廻申候間、納より私方へ御返可被成候、以上、

午五月十一日

五十嵐小豊次

諸郡 惣年寄中様

年寄並中様

九月 癸亥

十八日、庚辰新川郡滑川火あり、

〔中新川郡滑川町役場調査〕

天保五年九月十八日夜、子ノ刻、大風中滑川字順

家町村、梅ナル者ヨリ出火、九百餘戸ヲ焼失ス、

十月 壬辰

二十五日、丙辰富山藩家老蟹江監物以下十四名、金銀札發行の任に當りて失あり罪せらる、

〔前田伯爵家舊記〕

御九代、利幹公御代、御勝手方に於て市中融通旁爲御仕法、

町方御郡方等有金家等の名前を以、金銀札出來被仰付けるに、其係りには御家老蟹江監物、淺野大學等を棟梁とし、御勘定奉行、御勝手方、御郡、町兩奉行を初め、其出來せし札に過札出來せし風聞専ら相聞、其掛り小役人に至る迄御糺し方有之、同年八月八日、御郡足輕小毛利甚八郎、亦八、公事場へ引渡し御詮議有之、暨御郡頭取渡邊會守、田部吉左衛門、金岡彦四郎、皆彦一郎等も公事場に於て同日より御詮議相始る、其後御郡奉行磯野新右衛門、山崎竹毛等も詮議有之、同年十月二十五日左之通凶事、

元知千四百石之處七百

蟹江 監物

石減知高知組禁定陰居

淺野 直太郎

元知千二百石之處、六百石減知、高知組但父

藤懸 茂理彌

大學六月十二日病死ニ付在勤中之御咎

奥御用所金銀方御免指控



百二十石減知閉門

百石減知閉門

百石減知閉門

百石減知閉門

三十石減知閉門

家財御取上山越

同

同

同

引下十人扶持釘

二人扶持之減釘

右之通被仰付候事

〔蟹江監物御答一件〕

一千四百百石

御家老職 蟹江監物

右先達て御勝手方主付被仰付置候處身分令忘却萬端任我意御逼迫に事寄御

林 太 仲

浦山權太夫

加藤 左 門

磯野新右衛門

山崎 竹 毛

福村理兵衛

渡邊 會 守

田部吉左衛門

金岡彦四郎

島田欣左衛門

澤村 文 太

作法を取失、不筋之取計儘有之、御領中爲及難儀、私曲ニ拘種々不埒之致方共有之、御政事に相障り、御外聞を穢し、上を蔑に致候段、重役不相應成事共、重々不届至極、御心外之至り、思召に依て、殿重被仰付筈に候へ共、思召有之格別之御用捨を以て、役義差除高知組隠居被仰付、急度慎可罷在旨、被仰出候、以上、

午十月二十五日

寄合所蟹江主膳

右父監物不輕過失有之、隠居御答被仰付候、依之御知行之内七百石減知、家督相續被仰付候、此段可申聞旨仰出候、以上、

午十月二十五日

寄合所

是歲、加賀藩、領内の木綿に檢印し、丈尺を定む、

〔杉木御觸留帳〕

追而判押人江相渡候勤方帳寫壹冊、并木綿に押候印鑑、各爲承知相達之候、以上、御領國出來之絹布等、丈尺不足無之様、每度被仰渡も有之候處、今以不正之族有之體に相聞候間、今般殿重改方之義、且木綿は是迄判押不申候へ共、調理方不行届に付、以來は木綿にも判押短尺等相改、判賃可取立旨、御勝手方年寄中等被仰渡候に付、丈尺改方左の通可相心得候、

仁孝天皇天保五年



一 絹布、木綿、一端二丈七尺二寸の儀、公儀御定に候處、近年猥に相成右丈尺に不  
滿分織出候者有之體に候、右品々は他國へも多指遣候品に候處、御定丈尺に  
不十分有之候ては、第一御外聞にも拘り候儀不輕趣、且於賣先格別値段劣り  
候儀にて、織出候者共初甚不爲の儀に候處、是又短尺之品織出候儀不埒の至  
りに候條、以來判押候節、丈尺嚴重相改可申候、

一切れの分は、無判にて取扱可申候、併一反に近き寸尺の分、切れ取扱にては紛  
敷候條、二丈四尺五寸より以上の分、無判にて取扱候者、及見聞候は、二ツに  
切分相渡可申候、

一 無判之端物、都て致賣買間敷候、若無判の品取扱候儀、及見聞候は、取揚可及  
行候、

一 丈尺相改候儀、他國等へ多遣候節、且常の賣買にも數多の節不殘相改候ては、  
商人等可及迷惑候間、判押候節惣高の内圖取を以、百疋々五十疋迄は六疋、五  
十疋より三十疋までは三疋、三十疋より拾五疋迄は二疋、夫以下は一疋宛、相  
改可申候、若其中短尺の分有之候は、惣高不殘相改、丈尺全分は判押渡、短尺  
の分は切すべ相渡可申候、

一 短尺の分、一反に少分の不足にても判押不申、切れ取扱の箇條通相心得可申  
候、

一 幅の儀は、御定有之候處、是迄他國にても幅廣幅狹多様に取扱候儀に候へは、  
以來不殘御定尺に相成候は、賣買方に指障可申候間、通例之品は九寸五分  
以上に織出可申候、其餘幅廣幅狹と申品は、是迄の振合の通可相心得候、

一 絹布之儀は、前々より判押人有之、出來高相調理判賃取立來候、尤丈尺等可相  
改處、是迄の所流例の様に相成居、出來高迄相しらへ候體に候、以來は丈尺等  
嚴重相改候上、判押渡、御定の判賃可取立候、

一 木綿は、是迄判押の儀無之候へとも、今般相改以來判押候儀申渡候條、一反に  
付判賃三厘宛取立、判押渡可申候、判押方等の儀絹布同様可相心得候、尤木綿  
判押人の儀は、絹布判押人の外、別人に申渡候、右判賃一反に付三厘之内一厘  
宛、判押人へ可被下候條、殘銀可致上納候、

一 木綿判賃の儀、賣買の節買人より可取立候、併品により賣人より可取立分も  
可有之、此儀は絹布判賃取立方に准し可申候、

一 絹布、木綿、共一ヶ年惣判押高、判賃取立高、並被下銀、上納銀共、一ヶ年切勘定帳、



毎歲翌年正月、中、産物方役所へ可指出候、  
 一、木絹判賃は、前年十二月朔日より、其年十一月晦日迄の分取立、毎歲十二月二十日切、産物方役所へ可致上納候、  
 一、都て判賃の内被下方有之候へとも、前條の通改方繁多に相成儀に候間、雜用も懸り可申候條、歳々判押高相調理候上、遂詮議、増雜用可相渡候、  
 一、絹、木綿の儀も、白木綿同様相改判押可申候、  
 右今般改而申渡候條、判押方並丈尺改方等、嚴重可相心得者也、  
 天保五年正月  
 御算用場印

絹布木綿判押人

〔下新川郡魚津高等小學校報告〕

高岡、魚津、放生津、氷見、石動、七尾、小松、八加能、越ノ七宿中稱シ、利家公ノ時代ヨリ夫々各商業上ノ特權ヲ與ヘラレ、我魚津ニハ加越能三州ノ木綿ヲ集散スルノ特權ヲ與ヘラレタリ、從テ魚津木綿商人ノ手ヲ經スシテ、木綿ノ賣買ヲナスヲ禁セラレタリ、而シテ越後地方ヨリ輸入ノ絹織物等ヲ防壓センガ爲メト、質朴ナル民風ヲ馴致センガ爲メニ、絹織物等ニハ重稅ヲ課シ、木綿織ハ殆ンド無稅ニ取扱ハシメラレタリト、尙魚津木綿商

ノ威ヲ振ヒタル一端ヲ舉ケンニ、高岡ニハ海番所ト稱シ、國外ヨリ來ル凡テノ物品ヲ檢閲シ、之ニ課稅ヲナスコトヲ司ドレル奉行アリシモ、魚津ノ商人ノミハ國外ヨリ來ル綿及ヒ木綿ハ、伏木及新湊ヨリ直ニ海岸ニ沿ヒテ、四方及ヒ岩瀬路ヲ辿リ、海番所ノ檢閲ヲ經ズシテ殆ント、公然之ヲ魚津ニ運ビタリ、魚津商人ノ威ハ郡奉行、即俗稱御郡ノ後衛ニヨリテ、高岡ニ於ケル海番所奉行ヲ壓シタリト云フベシ、

天保六年乙未

紀元二千四百九十五年

四月庚寅

一日、庚寅射水郡放生津火あり、

〔射水郡新湊町役場調査〕

天保六年四月朔日、朝六ツ頃、四日會根町野村屋次郎左衛門ヨリ出火、北東ノ大風ニシテ、放生津新町、放生津町字中町山王町荒屋四十物町東町、町へ延燒、戸數約五百戸燒失セリ、

十月丙辰

十九日、甲戌富山藩主前田利幹致仕す、利保封を襲ぐ、

〔前田氏家乘〕

十月十六日、宗國ヨリ同姓淡路守、去年四月參府スヘキ處、宿病



ノ爲メ長途ノ旅行耐ヘガタク、東觀延引シ、永ク在邑シ恐縮ニ耐ヘス、藩醫及加賀守ヨリモ醫師ヲ遣ハシ、療養力ヲ盡スト雖トモ快氣ニ到ラス、參府ハ勿論、容易ニ全快スヘキ様無之、從來規定ノ在ルアリト雖トモ在邑ニテ隱居ヲ命セラレ、嫡子出雲守家督ニ願達セン事、淡路守企望ナルニヨリ、代理トシテ老臣ヲ富山ニ遣ハシ病狀ヲ調査セシニ、回復ノ程期シ難シト云フ、依テ淡路守郷邑ニ於テ隱居被命、嫡子出雲守ニ家督ヲ命セラレンコト、深ク加賀守ヨリ上願ス云々、青山下野守等へ連名ニテ上達セラル、十八日、宗國へ御用召ノ書來リ翌十九日、宗國ノ代理駿河守、利幹公代理藤堂佐渡守、利保公、同行登營セラレ、隱居家督ヲ命セラレ、略○中利保公、御幼名ハ啓太郎、後チ出雲守ト稱ス、致仕後、長門守ト改稱ス、寛政十二年二月廿八日、江戸邸ニ降誕セラル、實利謙公第二公子也、生母姓氏不詳、名ハ稻、後芳心院ト號ス、文化八年閏二月五日世子ニ立セラレ、略○中、天保六年十月十九日、利幹公病痾ノ故ヲ以テ宗國へ稟議ノ上、隱居セラレ、家督御相續アリ、十一月十五日、繼目ノ御禮諸式例ニ因リ、長臣四人拜謁、西尾逸角、近藤丹後、富田下總、近藤大炊也、

是歲、加賀藩、備荒倉を礪波郡、射水郡、新川郡等に建て、蓄米蓄銀を出さしむ、

〔石埼記録〕

天保六年、令シテ備荒倉ヲ加賀國能美郡小松泥町、口米廩園ノ内一箇所、石川郡松任ニ一箇所、河北郡津幡ニ一箇所、以上九月落成能登國口郡大町ニ一箇所、十月落成奥郡宇出津ニ一箇所、普請中越中國礪波郡六家村、池尻村ニ各一箇所、射水郡下村ニ各一箇所、以上七月落成小杉新町ニ一箇所、九月落成加納村ニ一箇所、新川郡滑川ニ一箇所、以上普請中三日市ニ一箇所、十月落成泊町ニ一箇所、普請中ヲ建テ、蓄米、初メ指册二万石ヲ申渡シタリ、銀ヲ以テ出スモノハ是ヨリ先キ天保四年、領内非常ノ凶荒ニ山リ引免ヲ以テ、貸米十六万石ヲ申渡シタリ、翌五年春ニ至リ、貧民益々多ク疫病大ニ行ハル、乃チ夫食ヲ給シ藥劑ヲ施シ、百方救助セシ爲メ國庫空竭セリ、今年ニ至リ領國稍々豐饒ナリ、因テ此令アリ、此時ニ方リ、礪波郡福田組六家村小百姓新兵衛、其村肝煎善兵衛ノ家ニ於テ、蓄米三升ヲ出サン事ヲ約シテ、家ニ歸リ、其山ヲ妻ニ告ク、是ニ於テ妻國恩ヲ報セン爲メ、當分ノ内、晩飯ヲ廢シ、更ニ米二升ヲ出サント云フ、清兵衛之レヲ肝煎ニ願ヘリ、近隣之レヲ聞キ、蓄米ヲ納メン事ヲ願フ者五人ニ及ヘリ、肝煎之ニ感シ、米五斗ヲ出サント云ヒ、一村貧富ヲ論セス、米銀ヲ出サント組主付十村五十嵐小豐次ニ願出セリ、一郡風ヲ聞キ、競ヒテ蓄米銀ヲ出ス事トハナレリ、



天保七年丙申

紀元二千四  
百九十六年

二月甲寅

二十八日巳辛氷見郡氷見火あり、

〔氷見郡氷見町役場調査〕

天保七年二月二十八日丑ノ刻、濱町小境屋火事トテ、三百餘戸焼失セリト云フ、老年者ヨリ聞ク處ニ依レハ、此時北風激烈ニシテ雨アリシモ、濱町ヨリ朝日新町ヲ貫キ、本川町宮城榮順ト云フ家迄延焼シ、風ノ吹ク状態ニ依リ類焼セリト云フ、

四月癸丑

十六日辰戌幕府、富山藩に江戸淺草御倉火の番を命す、

〔前田氏家乘〕

四月十六日、淺草御藏火ノ番ヲ命セララル、

〔参考〕

〔前田氏家乘〕

天保九年四月二十二日、櫻組火防ヲ命セララル、略中 天保十年四月十九日、復淺草倉廩火ノ番ヲ命セララル、略中 同年八月四日、淺草火ノ番免除アリ、略中 弘化元年

四月二十六日、淺草倉廩火防ノ命アリ、略中 二年四月二十六日、淺草倉廩火ノ番免除、

七月壬午

二十日丑辛前富山藩主前田利幹卒す、

〔前田山家譜〕

利幹、小字福十郎、後頼母ト稱ス、同宗備後守前田利道ノ第八子、

明和八年十二月朔、江戸邸ニ生ル、母井上氏、利道ノ臣某ノ女 享和元年八月利謙ノ嗣トナリ、十月封ヲ襲フ、十二月從五位下ニ叙シ、淡路守ニ任セララル、二年江戸市河寛齋ヲ聘シ、儒員ニ備フ、且ツ釋菜ヲ更メテ釋奠トナス、十一月倉廩ヲ創立シ、命ノ惠民倉ト曰フ、錢穀ヲ儲藏シ以テ凶荒ニ備フ、三年十二月、從四位下ニ叙セララル、文化四年是ヨリ先城北ノ舟梁三板ヲ並ヘテ以テ人ヲ濟ス、利幹ニ至テ臣内山逸經ヲ更ニ三板ヲ増サシム、爾後誤リテ溺死スル者ナシ、故ニ世人今ニ至ルマテ其功ヲ稱セリ、五年十二月、魯西亞ノ蝦夷ニ來ルヤ、幕府ヨリ命シ曰、松前宮司ノ報ヲ待ツテ師旅ヲ蝦夷ニ出スヘシト、即チ兵ヲ修メ以テ待ツ、然レモ幾ハクモ無ク事平ラキテ罷ム、七年三月、元祖利次ノ靈ヲ追尊シテ以テ、邦家ヲ冥護スルノ神トナサント、神祇官ニ請フ、神祇官公文所ヨリ即チ國玉社ノ社號ヲ許



可セラル、今ノ新川縣管下富山山王街神明社ニ合祀スル者是ナリ、文政三年十二月侍從ニ任セラル、八年十月江戸邸延焼、天保二年四月十二日富山城下大火、治城延焼、三年政事堂ヲ牙城内ニ作ル、六年十月致仕ス、七年七月廿六日卒ス、享年六十有六、諡ノ靈昭ト曰フ、正室利謙ノ長女、卒ノ後再ビ右京亮大河内輝延ノ女ヲ娶ル、男利阜、左衛門尉松平近訓ノ嗣トナル、男利裕、七日市大和守前田利和ノ嗣トナル、女鏡、右京大夫佐竹義厚ニ嫁シ、女錦、遠江守加藤泰幹ニ嫁ス、女鎮、淡路守脇坂安坦ニ嫁ス、其餘利民、利親等數人アリ、初メ利幹居恒閑暇アレハ輒チ老臣等ヲ延ヒテ置酒シ、自ラ割烹シテ魚水ノ交ヲ締ヒ、杯杓ノ間政務ノ得失ヲ談ス、或ハ子弟輩ヲ集會シ、自ラ經書ヲ講說シ忠孝ノ道ヲ教諭ス、是ヲ以テ法度紀綱創設スル者亦頗ル多シ、

〔前田氏家乘〕

七月二十日薨去、御齡六十六、諡號ハ靈照院殿中大夫前拾遺淡州刺史建中日權大居士ト曰フ、大法寺ニ葬儀シ長岡ニ葬ル、八月六日、上使奏者番青山因幡守ヲ以テ賻銀三十枚ヲ賜フ、夫人通稱勝子、利謙公ノ長女ナリ、文化八年九月二十七日卒去、諡號ハ輪見院殿圓智妙體大姉ト曰フ、廣德寺ニ葬ル、中略公天資寬仁大度、加フルニ御幼若ヨリ江戸ノ儒、泉仙太郎ヲ以テ師トシ學術

ヲ修メサセラレ、後チ又太田錦城ヲモ屢々召サレ、經籍ヲ講セラル、享和二年江戸ノ儒、市河寬齋ヲ聘シ、儒官長トシ藩學校ノ釋菜ヲ更メ釋奠トシ、大野十郎、佐伯順藏ヲ士列ニ引キ上ケラレ、儒官ヲシテ交番侍講セシメ、藩士ニ拜聽ヲ許サル、文學、兵學、劍槍、弓馬、炮ノ諸術ノ場ヘモ、繰々演習出座セラレ、老臣諸頭以下モ令セスシテ、勉ムルニ至ル、中略公、兵學、劍術共ニ皆傳セラレ、炮術ハ大聖寺藩臣酒井莊兵衛定賢ヨリ受ケ其ノ蘊奧ヲ極メラル、又政治ニ於テハ忠孝廉直ノ人ヲ登庸シ、專ラ道德ヲ以テ士民ヲ鼓舞セララル、文武諸師範人藩士引キ立テ宜キヲ得ル者ヘハ昇進、或ハ扶持ヲ增加シ、諸士子弟ニ至リ精不精ヲ察セラレ黜陟アリ、特別精勤者ヘハ賞典ヲ賜フ、又倉廩ヲ創設シ命シテ惠民倉ト稱シ、錢穀ヲ儲藏シ凶荒ニ備ヘラル、又大久保野、雪中渺茫トシテ行人途ニ迷フヲ以テ、若干ノ杉樹ヲ列植シ眼當トセシムル等ノ事アリ、民大ニ安堵スト云フ、

〔加賀藩史彙〕

歷世襲封一覽

淡路守利幹、大聖寺藩主利道第八子、享和元年十月襲封、天保六年十月退老、七年七月卒、年六十六、

〔富山侯御家譜〕

抄

利謙

仁孝天皇天保七年



某幼名松次郎

利幹公幼名福十郎又頼母實ハ大聖寺五代利道公八男

女子諱ハ勝

女子諱ハ榮

利保幼名啓太郎

女子諱ハ光

女子諱ハ美

八月壬子朔

風雨稻登らす、

〔前田氏家乘〕

八月某日、風雨猛烈米田大ニ荒ル、爲メニ米二百石ヲ救助シ、罹

災ノ村民ニ一万五千石ヲ免租セラレ、千六百石ヲ翌年ニ延納スルヲ容レ、且ツ

藩士ハ收納米一俵ニ付糠一升ヲ餘シ、之レヲ納入者ニ與フヘシト訓示セラル、

九月北風晚稻ヲ害ス、爲メニ二千九百石ヲ罹災民ニ免租セラル、

〔越中地方農業雜誌〕

天保七申年、長雨ニテ大荒凶稻ノ實ノリ多分秕ニナリ、

領内稻刈取ラサル村一步通リアリ、尤日影田谷田冷水懸リノ箇所ハ別テ多シ、

此年村々農民富山覺中町舊旅屋迄、日々數百人バンドリヲ着ナガラ押寄せ飢渴ノ由ヲ訴ヘタリ、依テ現石壹萬石免許アリ、外ニ又借用米等數多アリ、尤此際米價騰貴シテ一石代價錢拾貳貫文ニ至リ、人民大ニ困苦ス、

〔參考〕

〔富田覺書〕

天保七年凶作ニ付御算用場方書付相渡り候寫

米糍の食法、このぬかは毒なるものにて、之を餌へは腸胃を傷め、肌膚青腫れ、甚

敷は終に死に至る也、瓦蓋類のすやき物を碎きて、このぬかと共に鍋にて煮れば

毒氣去也、其を篩にて瓦蓋の碎きたるを降り、穀類を少し加へて團子、或炒粉に

すへし、雑炊にませて可也、

粟皮を炒粉に製らへる法、ぬかを水に浸せは褐色の氣出る也、其色の盡るま

て數回も水を換へて後熬乾かして、一斗大豆又は米麥のいりたるを二合計加

へて石磨にて碾也、ぬか一斗は屑七八合と成也、

米糍にて糰子を製らへる法、藁を一分許に刻み磨にて末にし、水にひたして

褐色の惡氣を去り、米粉杯を加へて團子にする也、藁の末壹斗に稻麥の粉なら

は五六合、粟黍ならは壹升なるへし、



右の三件はよく知りたる人もあれと、又曾て聞たるとなき人も猶多かれは、今  
版行して其傳を普くせんと欲へり、常人は故俗に安んずと、古人も言たれば、好  
善の君子冀くは之をこしらへて貧者に常食させ、幸に可食と謂は、製法を授  
へたまへかしと、

天保七丙申十一月二十七日

小松湯淺寛伏京

天保七年、凶作に付、八月より米石壹石に付、九拾目計に相成、夫々段々高直に相  
成、町中一統及困窮難儀人数多御座候に付、町中名有衆より御救方等夥敷御座  
候、既に米石高直に相成來る、八年正月追々高直と相成、米石一石に付、二月中旬  
頃より、百六拾五匁に相成、小豆百三拾五匁大豆百四十目と相成、就夫下々難澁  
人御救方、第一米石に付、糶屋座相立人別調理、男一人何程、女一人何程、小兒一人  
何程、札を所持爲致、糶屋座相向上中下三段に振分、上之分御定之糶賣米、中之分  
壹分、御償下之分二分、御償極難澁之者一人に付、一合宛御救御座候、尤二月  
か小賣糶屋米一升に付、百六十五文相成申候、町中一統死人多し、追々余内相立  
候内、同年七月に至り、御仕法方被仰渡候書物寫二通相渡り、此節金子壹兩に付  
七貫貳百文計、銀札拾壹貫文計、七月下旬に新米少々宛取附候所、米壹升に付百

拾五文に相成候、就夫御救方等も八月朔日迄切御座候、當所質屋之儀は、十歩一  
を以、七月廿八日より相始り申候、

十二月 戊辰

測量家石黒藤右衛門歿す、

〔石黒系譜〕

藤右衛門基信

射水郡

此信基は、天保七年丙申四月朔日、朝六日出生、幼名藤太郎、嘉永四年二月、十六歳  
にて父藤右衛門名代誓調と位付、則新開方測同五年十二月、父病死、同六年七月、  
射水郡新田才許被仰付、同九月、能美郡安宅の湊水矯御用相勤申候、同七年閏七  
月、於礪波郡太田村詰所、定檢地御奉行所より庄川筋付役被仰付候、御奉行所松  
本作右衛門様、木村九郎右衛門様、安井和助様也、安政三年閏九月、定檢地所より  
射水郡海邊瀉廻勢子役被仰渡候、同五年、新川郡山抜にて常願寺川筋洪水、後川  
除御普請御用として定檢地御奉行御出役之砌、御召連御繪圖等所々にて相調  
候處、同十二月、右御繪圖御用相勤候に付、爲骨折金百疋被下之候、同十一月海邊  
筋外國御奉行御見分之砌、御改作御奉行爲押受御出役、爲御繪圖方爲御用御連  
被成候、外國御奉行堀織部正殿御目付駒井左京殿、其外從者等大勢御通行、且御



國方御役人は御聞番並改作方御郡方御奉行所御供被成候、略中

一文久三年四月、三州測量繪圖校正方被仰渡候事、尤文政度之御繪圖所一分之圖、

一同年九月、新開方蔭開方兼帶被仰付候事、

一金石港測量御用相勤、軍經方金石町改作方三手合慶應二年、

一會津公守衛職之節、今津等三ヶ村繪圖御願に付、慶應三年、被遣候事、

一越前敦賀より京都との楡道、御開方御用に付、敦賀より江州湖水迄、水矯測量御繪圖方等、御用相勤申候事、

一海岸製鐵所と見分爲御内御用、生駒勘右衛門殿、澤村恒右衛門殿、小幡和平殿、稻葉助五郎殿、木村九左衛門殿、佐野鼎殿御出役之節、藤右衛門、半兵衛、大坪岩次郎御召連御用相勤申候事、慶應三年、

一外國御奉行所等海岸御見分之節、渡邊糸太郎殿御出役に付、御召連御用相勤申候事、

一正月、王政復古に付、北陸道勅使御下向に付、高倉三位殿、四條太夫殿、御巡行之節、御繪圖方爲御用、改作御奉行渡邊糸太郎殿御召連御用、小生、并殿村、津幡江

村喜兵衛兩人被仰渡相勤申候事、

〔越中史略〕

石黒藤右衛門は、越中射水郡高木村の人、與三吉の嫡男なり、幼字を與十郎といひ、名は信由、藤右衛門と通稱す、光格天皇第八代天明年中、富山の中田文藏名高に就き、關流算術の蘊奥を究め、特に測量術に精しく、屢々藩命を受けて、加越能三州各地の丈量に従事し、文政元年四月、新田裁許に任せらる、同八年、加越能略地圖及村名簿三冊を製し、藩に上る、藩賞するに五人扶持金二兩を以てす、その他檢田量地の功勞に依り、賞賜を受くること前後數回に及ぶ、天保六年、加越能三州測量圖籍成る、三州に完全なる地圖あるこれを始めとなす、同年、射水郡年寄班に列す、是より先、藩侯命を下し、増補加越能大路水經を作らしむ、未だ稿を脱せず、天保七年十二月歿す、年七十八、其孫信之祖志を繼ぎ、大路水經を補訂し、完成したりといふ、又藤右衛門に従ひて算術を學びし者頗る多く、五十嵐篤好、日下文太夫等、その高足たり、著はす所、算學鈎致、渡海標的等世に行はる、關流算法指南書百九十三卷あり、家に藏す、

〔郡方御觸〕

石崎記 録所收

高木村 藤右衛門



右之者、御領園丁間御用被仰付候間、相廻り候は、諸手合とも、夫々不指支様御申渡之事、

但御領地方之義も不指支様御心得之事、

右之通人見吉左衛門方申聞候條、各支配所相廻り之節、夫々不指支様可被申渡置候、以上、

六月六日

御算用場

有賀甚六郎殿

中村逸角殿

〔石黒舊記〕

天保六年、渡海標の開版仕略六十歳ニテ算學鈎致三冊開版仕、

是歲、新川郡松本開墾成る、

〔中新川郡五百石高野等小學校報告〕

五百石町ハ、今ヨリ七十餘年前ハ一般ノ

小松原ニテ高野ト稱ヘ居リシカ、高野ハ東西ニ分レ西高野ハ天祥寺村ノ組才許金山十次郎カ願ヒ、東高野ハ金澤藩扶持人朽木兵左衛門カ願ヒ出テ開墾ニ着手セシカ、願フトキ毛付高トテ五百石開墾シタキ旨申出テタルニヨリ、五百

石ノ名稱起リシナリト、斯ノ如クニシテ朽木氏カ自ラ萬障ヲ排シ、天保七年ニ始メテ家建ヲ願ヒ、米澤新村ノ盛田某最初ニ出テ、其後諸方ヨリ集合シ町トナルニ至リシナリ、松本開ナル名稱モ開墾ノ初メ松樹最モ多ク繁レルヲ以テ、斯クハ名ケシナリ、爾後近傍ノ村民集リ來リシモ容易ニ戸數増サス、開墾後百戸ニ至ルマテバ少クトモ十年餘ヲ要セリトイフ、當時ノ組合頭等種々苦心セシモ多少増加セシカト思ヘハ直チニ減シ、遂ニ家ヲ有スルニハ、確實ナル證人ヲ立テ身元ヲ證明スル等種々ノ考ヲメクラシ、以テ今日ニ至リシモノナリ、左ニ當町開創以來ノ大要ノ碑石ノ全文ヲ記サン、

松本開碑 富山縣始審裁判所長正六位勳六等小林藹篆額

松本開者、東對立山西控常願寺川、地勢平衍、商賈運發、爲中越一小都會、此地五十有餘年前、稱高原野、方數里間、榛蕪穢、狼狐晝驕、殆絕人跡焉、有朽木兵左衛門者、時爲金澤藩扶持人、村職、以地屬其部內、居恒抱墾拓之志、衆皆難之、兵左銳意不撓、遂請拓其地于藩、藩嘉兵左志、賜原中稱松本野、數萬步許、墾田五百石、兵左乃大起土功、斐榛、經營數年、而功較著、隣村盛田某等、亦構儼舍以待耕者、自是人家漸增、以墾拓之餘、營商賈業、往々而有、以故人呼曰五百石市、天保七年、兵左請藩定名松



本開蓋墾拓之初松樹最多所以名也安政五年地大震、嵩山崩、溪水瀦而不洩、經數旬而一時決潰、人畜漂流、損命者無算、此地亦被害、然以大致淤泥、質一變、墾拓甚易、於是墾之、避害四方者稍々來歸、爾後近傍村民亦爭來、地益闢、戶益殖、其間組合頭等、前後督事者、皆辭俸、拮据黽勉、殆如一日、明治二十年官新設警察分署、明年又置裁判所出張所、亦可以卜此地之日盛矣、兵左諱義通、上新川郡新堀村人、資性慈仁、家世襲扶持人十村職、以安政六年八月六日歿、享年七十、男義嗣稱兵三郎繼襲職、今爲新堀村長、有故改姓稱佐々木云、今茲庚寅有志者相謀、欲刻此地開創以來之梗概于石、以示來者、囑予文、會小林裁判所長巡視于茲土、聞其舉、大贊之、爲篆額、予來從事私立文學舍、三年於茲矣、義不可辭、乃叙其梗概、係以銘、銘曰

一人興業 衆又鞠躬 原野爲市 百貨殷充

明治二十三年二月

越前 福田推清撰

杉江重一書

〔舊記雜聞〕

一 婦負郡草島、西岩瀬、荒屋、窪、今市、五ヶ村、文化二年頃、舊草高、新田概略貳百石計、

一新川郡松本開文化文政年間、

天保八年丁酉

紀元二千四百九十七年

正月己卯朔

前年凶作のため、餓孳頗る多し、

〔杉木御觸留帳〕

木葉を喰用にいたし候法有之、一助にも可相成義に候間、今度各様困窮人救方に付、御廻村之節、村々役人中へ御申入、困窮人共等へ教候様、入念御申談被成可然、此段各様へ可申談旨、永原貢様へ被仰談候ニ付、御渡之拔書相添相廻申候、急々御順達落着、御返可被成候、以上、

酉正月十九日

五十嵐小豊次

諸郡 惣年寄中様

年寄並中様

伊勢足代權太夫弘訓著、おろかおひ之内救荒之方拔書

飢民を救ふに至て仕やすき法ある事

米穀を以て飢民を救ふことは、有力の者ならてはなしかたき、力なき者にてても



志たにありて、兼而心懸置けは飢民を救ふへき一法あり、其方は三四月新樹の頃、檜、櫛、榊、椋、椋、柿、栗等之若葉を取、是を酒にてゆて、茶を干如く日にほし、いくらもく蓄へおくへし、三四月の樹木の若葉をとれば、又生盡ることなきものなり、只澤山に取るを全として俵になし置へし、木も楠、天笠等の香氣あるものを除く、其餘は何によらすとるへし、飢民を救ふには右の干葉に鯉節にても、魚肉にても加へ、味噌汁に焚て與ふへし、米穀を加ればなほよくよろしく、鯉節の類か、米穀の類かを少々加へされは、干葉計りにては一向力なく養となりかたし、これ水府物産家、佐藤氏通稱弘訓に教へたる法なり、救の志ある人、いさゝか意を用ひなは、何千俵の蓄へも、金銀を費やさす、いかにもたやすく出來すへきなり、

松葉團子の事

青松葉をとりて釜に入れ、よくゆて、匂ひをさり、細にきさみ、ほうろくにていり、うすにて挽粉となし、蕎麥粉六分に松葉粉四分くらへあはせ、團子となす、東叡山に木食の僧ありて、此松葉團子を常食とせり、聖堂の宰長大岡廉平語れり、廉平は近江長濱在曾禰村、大岡右仲の弟也、兄弟共に學識ある人也、予こゝろみに

右の團子をつくりてくらふに、さのみたへにくもなきもの也、是も救荒の一方に備ふへし、

御郡村に、困窮人取救方之義は、去冬以來厚途詮義御救米等被仰付、且於村々も身元相應のもの共、種々取救置候義に候、其上先頃以來、其元中廻村介抱方等も申談有之、村々役人とも御請書を取立置有之候處、村々に依、必至と指迫候者も有之、殊相聞得候、剩頃日御城下御郡方の貧民多罷出、御助小屋江倒込、或は町家軒下等に打伏罷在候者共不少、殊甚不相當義に候、是等は村役人介抱方等勢子不行届等閑故の義と相聞得、若村役人の内、心得違御救米割符不正の義も無之哉、自然右様の族有之候、而者沙汰の限り不輕義に候、去秋已來度々被仰渡の趣も有之、其時々其元中へ入念申渡置候通に、而於拙者共も申譯も無之義、第一於其元中も申諭方不行届義に候、是等の處得と心を付穿鑿有之、其様子無泥申聞可有之候、且非人頭とも江申渡、右御城下江罷出居候、貧民とも住所等爲聞統手附候、行渡其村々江爲送届候條、得其意向更其村々切に而如何にも介抱方親切に取救以來御城下等江罷出不申様、縮方無油斷可相心得候、將亦他國の者多御郡方へ入込居候體、粗相聞得候、右様の義有之候、而者、村々困窮の者、取扱方



の指障にも可相成に付、御領内江入込候、他國者は、御關外江送出候様、御用番方被仰渡も有之候條、他國者と承候は、廻藤内江及案内送出候様可申談候、猶更藤内頭ともへ夫々申渡候條可得其意候、右等の趣村々役人ともえ不相洩様、如何にも入念に可申渡候、以上、

酉二月二十日

武田九郎兵衛

渡瀬七郎大夫

諸郡 惣年寄中

年寄並中

〔前田氏家乗〕

八年三月又八十九石ヲ救助シ、糶糠五百六十石餘ヲ下附ス、那村ノ小民猶力役ノ資ニ窮ス、依テ二千六百石ヲ免租シ、別ニ米一合、麥二升、干鰯五枚ヲ附與セラルルモノ二萬四千人ト云フ、

〔荒木舊記〕

天保八年乙酉、大飢、僅米一升二百二十文、

〔越中地方農業雜誌〕

天保八酉年、一月頃ヨリ餓孳多シ、其後月ニ増シ、究民所々山奥ヨリモ出デ來リ、市街道路ニ僵ルルアリ、尤追々米價騰貴、一石代錢貳拾四貫文ニ至ル、此年五六月頃迄ニ餓死人許多アリ、右米價現今ニ比スレバ、金貳

拾四圓ナリ、故ニ究民<sup>(窮カ)</sup>山野ノ樹木ノ實、又木之葉、諸草ノ芽、或ハ根株ヲ掘採リ、諸笹ノ筍竹ニ生スル、粃又米糠五穀ノ粉類、酒醬油酢豆腐ノ粕類、諸民喰盡シ、肥物ニ用ユル種類一切是ナク、就中救荒本艸中ニ記載ノ樹木類ノ葉根モ盡ル計ナリ、故ニ諸民ノ困難筆紙ニ盡シカタキナリ、此頃適、米穀貯蓄スルヲ見レハ縁ヲ求メ、一食ヲ乞ハントテ與ヘサル間ハ、其場ヲ立去ラズ、實ニ悲歎スベキナリ、尤此際ニ臨ミテ金銀ヲ以テ小賣ノ米店ニ向フトモ、二合三合ヨリ上ハ斷ヲ言ヒ、家族多キ家ニハ幾米店ニモ巡回シ、漸ク其日ヲ糊口ス、故ニ舊藩主モ米倉ヲ開キ、時々究民<sup>(窮カ)</sup>ヲ賑恤ス、尤其頃、貴賤ヲ隔テズ、家毎ニ粥ヲ食セザルモノナシ、又舊藩市郡ノ豪富ニ令シテ、其救ヲ乞ヒ、市郡共ニ究民<sup>(窮カ)</sup>ニ朝夕粥ヲ施ス許多ナリ、然レトモ、幸ニ今年ノ秋作体可也ニアル、其中七八步通り熟セザル稻ノ穂先、人民摘採リ、村路通行スル田地ノ片端ノ一行ハ、其穂先ヲ掠メ行者許多アリテ、持主々々困却スルモ見逃シ、是ヲ許ス故ニ、此申年ハ舊藩ヨリ造酒ノ制限ヲ令シテ例年ノ四步ニ至ラサルナリ、好酒社會涎ヲ流セトモ、其翌年早ク酒店モ賣切レ又困難スル人少ナカラズ、

二月 己酉朔

仁孝天皇天保八年



幕府、大鹽平八郎の亂を爲して潜匿せしを以て、加賀藩に命し、其封境を警戒せしむ、

〔杉木御觸留帳〕

大坂表、大鹽平八郎等召捕方等之儀に付、別紙寫之通り仰被渡候に付、相越之候條得其意、御郡方一統江は、組主附年寄より夫々不相洩様、急速申渡承知之驗致名判刻附直送りを以て、先以相廻落着より可相返候、以上、

酉三月朔酉ノ中刻

山口新左衛門印

廣瀬順九郎印

新川郡 惣年寄 中

年寄 並 中

無役年寄 列 中

新田裁許 中

山廻リ 中

同 列 中

御旅屋 守 中

於大坂表去ル十九日、元當組大鹽平八郎義同、苗格之助、瀬田濟之助、同苗同心渡邊良左衛門、近藤梶五郎、庄司儀左衛門、並外々百姓とも數人かたらひ、市中焼拂及亂妨候に付、早速町御奉行衆御出張の上、先鋒之者共討捨、徒黨之者共追々被召捕候得共、平八郎外五人義、其節より逃去候哉、生死難相分候、然處平八郎儀、兼々御當地白山え、書經相納度志願有之由粗相聞候に付、此度之序御當地江入込候も難計候間、格別手配之上、召捕自然及手向候儀も候は、其仕義次第打捨に取計有之候ても不苦候旨、同所町御奉行、跡部山城守殿等より申來り候條、被得其意、支配所江自然右様胡亂之者立入候は、前段申來候趣ニ可被相心得候、已上、

二月二十八日

長 又三郎

山口新左衛門殿

廣瀬順九郎殿

追て猪谷御關所之義も被得其意、萬端無油斷、可被相心得候、以上

今度大坂表にて、大鹽平八郎及騒動候一件に付、京都於本願寺右防方用意、爲人



足門徒之者可罷出旨、諸國江觸候趣相聞江候、尤其許中油斷も無之義に候得共、一圓罷越儀難相成候、其上耕作專之時節に候間、嚴重心得方可申付置、若密に罷越候もの於有之者事不輕義に候條、急度曲事に可申付候間、能々可相心得、此段早速可申渡候以上、

三月二十八日

改作方御郡奉行

諸郡 惣年寄中

年寄並中

三月 戊寅朔

加賀藩、救恤を行ふ、

〔憲令要略〕

丁酉三月六日、町中見<sup>〇</sup>札米等之家高人數之覺、天保八年也、

一千九百三十三軒

町方惣ノ高借家畑地等居住人共

内二百八十八軒

分限人并札米指除候人々

二百十八軒

上札之家高

此人數千百人男女

七才已上壹日一人ニ付三合ツ、壹升代百三十八文

六百拾五軒

中札之家高

此人高二千五百七拾五人男女七才已上一日壹人ニ付貳合ツ、壹升代

百二拾八文、札米之内買餘リ米一合ニ付壹文ツ、相返ス

八百拾貳軒

下札之家高

此人高三千三拾三人男女七才已上男女一日一人ニ付二合ツ、壹升代

百拾八文、札米之内買餘リ米一合ニ付二文ツ、相返ス

人數 六千七百八人

此内千三百六人江粥救置候、但シ下札之人々也、一日一人ニ付米七夕ツ

米直段等追々相違仕候、

四月 戊申朔

二十二日、<sup>巳</sup>利保、旅費を節して窮民を救ふ、

〔前田氏家乗〕

二十二日、公、政廳ニ臨ミ、町奉行郡奉行ヲ召シ曰ク、昨年以來封

内ノ民人天災ニ困苦シ、聞クニ忍ヒズ、救濟ニ力ヲ竭スト雖トモ予ガ財貨モ限



アリ、汝等職トシテ予ヲ扶ケタルガ、予今年始メテ暇ヲ得テ國ニ還リ、江戸發程以降旅費等ヲ省減スルモ例規ノアルアリ、意ノ如ク爲スヲ得ス、纔ニ百金ヲ餘セリ、今之ヲ願テ汝二人ニ下附ス、些少ノ金夥多ノ窮民ニ與フルニ足ラスト雖ドモ、道路ニ彷徨スル者ニ宜シク分附セヨ、猶今ヨリ封内ヲ巡視シ、後チ謀ル所アラン、時汝等モ隨ヒ共ニ觀察セヨト、即日近村ヲ往復巡視セラレ、其ノ後婦負郡山中ヲ三泊巡視アリ、家老、若年寄、郡奉行、近習等併テ隨從スル者二百六十人トイフ、其ノ費全ク勘定所ヨリ出納セリ、略 六月公封内ノ巡視ヲ終リ、米廩ヲ開キ、町人ニ五十石、郡民ニ五十石ヲ救恤セララル、此ニ於テ豪農巨商モ亦各米穀或ハ金若干ヲ出シ、飢民救助ノ爲メ數萬人ニ與フ、是ニ因テ御領内道路他邦ニ比スレハ、餓孍ヲ見ルコト稀ナリト云フ、此時公國雅一首ヲ賦シ以テ農商ノ特ニ仁惠ヲ施ス者ニ賜ハリシ、其歌ニ曰ク、荒るゝ年何か罪せん、餓る人を救ふは我を救ふなりけり、

七月丙子

二十七日、壬寅一藩、窮民救濟の爲め、貸借典質の制を定め、町人の享和以後に有せし田畠を没收す、

〔憲令要略〕

去年、御領國中稀成不作ニ付、御救方等過分ニ被仰付、御勝手向必至ト御指支、此末之御手當無之ニ付、此度御家中一統半知御借上有之候、町在之義從來多分難澁之上加様之年柄、且は半知御借上ニ付、而も何廉指つまり輕き者別而無利足ニいたし、相對を以年賦ニ取極可申候、但是迄指遣候利足銀之分は、元銀ニ當て遣指引、殘元銀年賦ニ取極可申候、寺庵社家等之分、右同事たるべく候、御家中之儀者來年ニ至リ、右之趣ヲ以致返辨候様申渡候、

一 御郡方之儀、百姓共相互ニ爲助力無利足に而貸置候分、暨屎物並稼之品、爲仕入、前貸之分年賦を以、相對を以可遂指引候、町方等カ致借物候分ハ、如御定都而可爲無指引候、

一 借財之義、右之通り被仰付候ニ付、質物之義ハ、十歩一之元入を以來年七月中迄ニ請出可申候、但是以後布木綿之外者、質ニ置候儀仕間敷候、

一 御家中、給人收納米藏、縮向後指止候様申渡候、仍而無據節ハ、頭支配人與書之證文を以、借用之筈ニ候事、

右之趣得其意、可被申渡候事、

西七月



質入高之儀者、不相成譯ニ付、名目を替密ニ持高質ニ入候者、有之體不埒之至ニ候條、於改作方々相糺、名目ハ替リ居候とも、質入高之姿ニ相成居、高方格ニ相違之分ハ御法通り可取揚候、併今般諸借財等仕法方被仰渡候儀ニ候間、今度ハ右等之分有之候ハ、一先取揚重而高主江可被相渡候、尤以來之儀ハ、御法通殿重縮方可有之候、

右之趣改作方、御郡奉行江得と可被申渡事、

西七月

諸郡共、近年村々次第ニ難澁、深他村江之切高多中ニ者、本村之者多分小作ニ相成居候、村方も有之體、左候而は御救方等、被仰付候而も可成立譯も無之義ニ候條、先達而切高致し候節、取請候、高札代銀切人々爲指出切高、追々本村江爲引取村方難澁立直候様、改作方ニ而幾重にも遂詮議可申候、且享和二年高方仕法後町人江、切高いたし有之分は、尤格之通取揚可申候、

右之趣、改作方、御郡奉行格別ニ骨折、深致世話、村々成立方之儀詮議有之様得と被申渡、追々様子可被申聞候事、

西七月

別紙寫之通、御用番又三郎殿、被申聞、御郡奉行等江申渡候條、御自分支配所地方百姓共江、不相洩様、可有御申渡候、以上、

七月十八日

御算用場

石野右近殿

質屋共方へ、商物質入之分詮議之趣有之、渡方之儀、暫指留置候得共、今度段々御詮議之上、御領國一統商物之品ニ而も、無構拾分一之元入を以請出候事ニ相極候條、右品物早速相渡可申事、

一身元相應之者ハ質入之分、質屋共ニおゐて、彼是と申立不相渡者有之段相聞候條、是又拾分一元入を以、早速可相渡候事、

一質屋共之内ニハ、今度被仰渡ニ背き、相對ニ而拾分一之過ニ鳥目取請、品物相渡候分茂有之由相聞へ、沙汰之限リニ候、拾分一ヨリ過取請申聞敷候事、

一流レ月之儀ニ付、申四月入質之分、當六月ニ而拾五ヶ月相滿候故、於金澤者、申五月々之分致出質候ニ付、右振之通ニ相心得度旨、質屋共ハ願出候ケ所も有之ニ付、此分ハ當時御詮議中ニ付、追而否可申渡候事、

右之通り、今般改而申渡候條、若此上質屋共心得違於有之、急度谷方可申付候、此



段支配三ヶ所未々迄不相洩様急速可被申渡候事、

酉七月廿七日

石野右近印

高木隼人殿

〔富田覺書〕

御救方等も、八月朔日迄切御座候、當所質屋之儀ハ、十歩一を以七月廿八日より相始り申候、

〔富山商業會議所調査〕

天保八年ニ於ケル徳政ノ影響

天保八年富山藩ニ於テハ、徳政ナルモノヲ發布シ、一般貸借關係ハ其時ヨリ消滅スルコト、ナリ、爲メニ大打撃ヲ被リタル者多々アルガ中ニ、三四ノ實例ヲ摘叙セバ左ノ如シ、

- 一村落ノ地主ニアリテハ、小作人毎年ノ納米ハ其高全部ヲ免除シ、所有地ハ無償ニテ小作人ニ與ヘザルベカラズシテ、全ク小作人ノ利得ニ歸セシモノナリト、
- 一町家地主ニアリテハ、其借地人ハ地代ヲ支拂フヲ要セザルノミナラズ、而モ無償ニテ、其借宅地ヲモ利得セシモノナリト、

一質屋業者ニアリテハ、其質權設定額ノ三分ノ一ニ當ル金高ヲ受得シ、擔保品タル質物全部ヲ債務者ニ返還セシノミナラズ、之レガ利子ヲモ支拂フ者ナキノ損害ヲ見シモノナリト、

一貸金業者ニアリテハ、相互ノ債務關係ハ、其發布ノ時ヨリ直ニ消滅シ、所謂借徳ニ了リシモノナリト、

一町人士分ハ、一切黒ノ羽織、又ハ絹織物類ノ着用ヲ嚴禁セラレシ爲メニ、之ガ販賣業ニアリテハ、頓ニ顧客タル需用者ヲ失ヒ、從テ商品ノ停滯ヲ來タシ、且交通機關ノ備ハラザル當時ノ事トテ之レカ手持品ヲシテ、容易ニ賣捌クニ由ナク、是又多大ノ損害ヲ被レリト、

一現時代ニ最モ行ハレシ贈答品等ハ、一切爲スヲ得ズ、例ヘ重詰ノ如キモノト雖トモ、若シ途上役人ニ認メラレシ時ハ、有無ヲ謂ハセズ直チニ之レヲ沒收セラレタリト、

其他ノ事例ハ枚舉セスト雖トモ、影響範圍ノ一斑ハ以テ窺フニ足ランカ、

〔高岡商業會議所調査〕

天保八年ノ徳政

仁孝天皇天保八年



連年饑饉ノ爲ニ、藩内ノ人民生計ニ困難セルヲ救濟セントノ目的ニテ、加賀藩ノ家老、奥村丹後守ノ意見ヲ以テ、大要左ノ如キ政策ヲ行フ、之ヲ德政ト云フ、

一金錢ノ貸借ハ、都テ無差引トスル事、

一質物ハ、十分一對シ金ニニテ、其品ヲ返戻スルコト、

一享保以後町人ニシテ高ナ所持スル事於テ所持セシ高ハスベテ官沒スルコト、

高岡ニ於テ右德政ノ爲ニ受ケタル影響ハ、他地方ト同シク極メテ惡影響ニテ、僅少ノ細民ヲ除クノ外ハ、之ヲ喜フモノ更ニ無ク、益々不景氣ヲ増シタルノミ、殊ニ町人ノ持高ヲ沒收セラレシ爲ニ、非常ノ大打撃ヲ受ケ、惣塚屋十右衛門、増山屋善兵衛等二三ノ者ノ持高ハ、享保禁令以前ヨリ所有ニ係リシヲ以テ、沒收ノ難ヲ免レンガ、其他ハ多ク官沒セラレ、ソレガ爲ニ人氣沮喪シ、一時高岡町内ハ慘憺タル情況ヲ呈セシト云フ、

〔射水郡新湊町役場調査〕

德政カ我新湊町へ與へタル影響

一、一般町民ニ與へタル影響

何時ノ頃ヨリカ、身元確實ナルモノニシテ、商取引ヲ爲シ居ル者ハ、或最高額ヲ限リ、郡奉行ノ認可ヲ得テ、預金手形ヲ發行セラレタルモノニシテ、當町ニアリテハ、天保年度ノ如キハ商家ニシテ、多少ノ資産アリタルモノハ、大抵手形ヲ發行セシモノ、如シ、去レハ各家ノ手形ハ恰モ國貨ノ如ク廣ク融通セラレ、毎戸之ヲ所有セサルモノナカリシハ自然ノ状態ニシテ、其高ノ大小ハ兎モ角、德政ニ因リ上下共ニ夫々損耗ヲ受ケタルヤ疑ナシ、但細民ハ下條ニ述フルカ如ク、質物其他借入金ニ對スル恩典アリシニヨリ、一般ニ德政ヲ喜ヒタルハ事實ナリ、

二、高持ニ對スル影響

放生津町ハ、元來町立ナルモ、古來一種特別ノ取扱ヲ受ケ來レルモノニシテ、高岡、石動、氷見、魚津ノ各町ト違ヒ、德政ノ爲メニ持高ヲ取上ケラル、ノ悲運ヲ免レタリ、但放生津新町ハ純然タル町立タリシヲ以テ、同町在住ノ高持ハ、皆附近ノ持地アル村々入百姓ト爲リ居タルヲ以テ、其取上處分ヲ免レ、又寺院及共同所有ト爲リ居タルモノハ、特ニ假定人ヲ定メ、其者ノ所有ト爲シ、多クハ近村ノ持地アル所へ入百姓タラシメ、取上ケトナラサリシトノコトナリ、尤モ此制度



ノ發布セラレサル以前ニ種々ノ風評アリシモノト見え、本町全體ノ住民ハ、高ヲ所有スルヲ得サルコトニナルヘシトテ、態々近村ノ親戚故舊ノ名義ニ切替ヘタル結果、收納時期ニ至リ、元所有主ハ自己ノ權利ヲ主張スルノ途ナク、永ク紛議ノ渦中ニ在リシモノ少カラサリシトノコトナリ、高持ニ對スル影響、以上ノ如クナルカ、之カ爲メニ倒産者ヲ出セル如キ程ノコトナカリシカ如シ、因ニ斯クノ如クシテ、上ヘ取上ケタル地所ハ、其後更ニ下々ヘ拂下ケタルモ、再度ノ發令ヲ恐レ、買入レントスルモノナカリシタメ、十村ニ於テ夫々資産アルモノヲ見立テ、強ヒテ割當數ヲ購入セシメタリトノコトナリ、

三、質屋業者ニ對スル影響

徳政ノ爲メニ尤モ大ナル打撃ヲ蒙リタルハ、高取上ニ次キテ質屋業者ナリシナラン、當時放生津町、放生津新町ニ於テ、大小質屋ハ左ノ數ナリシ如シ、

大質屋拾壹戸 小質屋七戸

然ルニ、徳政ノ定メタル質物貸附金、元金ノ十分ノ一ヲ返濟シ、質入物ヲ引出スコトヲ得ルヲ以テ、貸方ノ流動資本ハ恰モ其十分ノ一以下ニ減少シタルモノト云フヘク、頗ル損害ノ少カラサリシモノニテ、大ナルハ百貫目ヨリ、小ナル

ハ五六十貫目位ノ欠損ヲ受ケタリト傳フ、

四、普通ノ貸金者ニ對スル影響

普通ノ金錢相對貸借ニ對シテハ、其詳ヲ知ルニ由ナキモ、多分ハ利足ヲ切捨テ、其元金ノミヲ永年ノ年賦ニテ、返濟セシムルノ制度ナリシヲ以テ、多少ノ資産アリシモノニハ、多少ノ損害ハ免レサリシモノ、如シ、

尙左ノ如キ一話アリ

當時某寺住職辯才アリ、説教ヲ善クスルヲ以テ、時々金澤ニ出テ、布教ニ從事セリ、之カ爲ニ士分ニ知己ヲ得、其人ヨリ、不日徳政ナル制度ヲ發布セラレ、町人ノ持高ハ上ヘ取上ケラル、トノコトヲ聞キ歸リ、窃ニ其縁者ナル放生津新町ノ甲家ヘ傳ヘタルニ、甲家ハ又其親友ナル乙家ヘ傳ヘ、二人共各二百石位ノ高持ナリシヨリ、各其内五十石ツ、ヲ切り、之ヲ賣拂ヒ其金ニテ、更ニ他ヘ貸附ケ置キタルニ、其後徳政行ハレタル所ニ依レバ、當町ノ高持ハ皆他村入百姓トナリ居タルヲ以テ、持高ニ故障ナク却テ貸金ハ元金ノミヲ、永年ノ年賦ナラデハ返濟ヲ受ケサルコト、ナリ、意外ノ損害ヲ蒙リタリトノコトナリ、

八月 丙午

仁孝天皇保八年



八日、癸卯、加賀藩、氷見に一時錢手形三千貫文の發行を許す、

〔憲令要略〕

（卷封之上） 石野右近殿

本多播磨守

當時諸方共、正錢拂底ニ而氷見町之儀者別而拂底ニ相成、下々及難義候ニ付、爲融通於所方錢手形三千貫文出來之義願出候ニ付、縮方之儀嚴重取極、指當リ行詰居候者へ、無利足ニ而貸渡、返上之義、來戊年七月、十二月兩度ニ銀札ニ而取立、此度出來之銀札ハ、一時ニ消込候仕法を以、錢手形致出來度旨等紙面被指出、無據相聞江一<sup>（時カ）</sup>作之義ニも候間、願之通リ承届候條、被得其意縮方之儀、入念被申渡、尤所方切通用可被申渡候、以上、

八月八日

九月<sup>丙子</sup>朔

大風晚稻を損す、

〔前田氏家乘〕

此ノ年九月大北風ニテ晚稻悉ク損ス、二千九百石罹災者ニ免除、二百二十石救恤セララル、

天保九年戊戌

（紀元二千四百九十八年）

三月<sup>癸酉</sup>朔

二十三日、<sup>未乙</sup>新川郡滑川火あり、

〔中新川郡滑川町役場調査〕

天保九年三月二十三日午ノ刻、西南暴風中高月村與三右衛門ナルモノヨリ出火、千三百餘戸ヲ燒失ス、

四月<sup>壬寅</sup>朔

十日、<sup>辛卯</sup>加賀藩、幕府の造營の費を助けん爲め、用金を郡村に課す、

〔憲令要略〕

今般御座之間等、御普請御手傳被爲蒙仰候に付、諸御郡御調達金別紙割合之通り申渡候、百兩に付、當御收納米百石充之圖りを以、當場印之切手可相渡候條、此度の儀は別而一統精誠御用可相立候、右之通可被申渡候、以上、

四月十日

御算用場

追而上納之義、來閏四月十日切、當場へ可被指出候、以上、

覺

一九百兩

能美郡

一千兩

松任



- 一 貳千三百兩 石川郡
- 一 千一百兩 河北郡
- 一 三千七百兩 口郡
- 一 五千四百兩 奧郡
- 一 五千五百兩 礪波郡
- 一 五千貳百兩 射水郡
- 一 四千六百兩 新川郡
- 一 三萬兩

閏四月 壬申

廿九日、庚子、儒者大島維直歿す、

〔同窓學友會雜誌〕 四三號

贊川大島先生墓表

先生大島氏諱維直字無害贊川其號越中新川郡人父曰休甫母某氏其先事松倉城主椎名氏及上杉輝虎滅椎名泰種有助七郎者抱主幼兒竄民間以圖興復比長天下大定無以成其志兒亦晦跡浮屠而助七郎遂去往越後矣是為七世祖子孫還

居本郡魚津里或業醫或服賈以至其父先生生穎異童弗助父行間從旁近祠官受句讀經目輒不忘檢校諱貞一者其叔父也居加賀金澤養以為子年二十三來江戶執贊簡順林先生入昌平贊治經專攻朱子傳注排去末疏獨刻意本注研鑽數歲自謂有發明然後取文集語類閱之往往與己意暗合先生素乏遊資囊爨屢空會柴栗山掌昌平贊務憫其窮舉為仰高門日講食其俸先生意不屑之辭弗就於是林先生以其族人百助新喪父家政無所統又須賢師友屈先生往相其室因以自支給先生訓誨修饒不遺餘力一如宗家意居數年學大進加賀侯聞之召還擢為府學助教尋為新番賜俸若干時寬政四年也文化七年新賜祿九十石為儒者先生制行甚嚴以師道自任將臨講座必齋宿改衣服掃除室中焚香靜坐至夜分以為常屢說經侯前闢善閉邪陰有匡弊之益侯有所問輒據經義條陳每寓規諷之意或密上封事侯常嘉納文政三年加祿五十石十二年為府學都講班列大小將給職祿五十石初府學創立先生多所建自至是愈益奮厲將大振學政革弊病補欠缺以有所再造建議不行因上書辭職不聽遂告病天保五年七月許致仕賜俸十五口先生天資廉自奉儉素無他長物而藏書萬餘卷齒德益邵寬有所容和無所忤人愈敬愛焉九年閏四月廿九日沒享年七十七用禮葬之城南大乘寺後岡而不用浮屠儀先生學貫經史



於歷代制度沿革尤加考覈其於洛闔之學造詣精粹壹以正綱常裨世用爲念居恒謂我輩生於今世讀聖人之書而得知道之一端者爲幸大而爲恩深矣唯有篤信力行不負所聞所以報之也又曰吾平生無異於人者獨不苟去就而已故當其進退取捨之際辨明義利奮然勇往無所顧慮所謂士大夫行己正如室女不可受人指點者吾於先生乎見之嗟乎可謂篤行君子矣配平野氏生三男而沒長子桃年襲祿爲儒者次皆夭再娶中村氏生安世出安世亦早亡養淺江總檢校女嫁藩士安田益新桃年克繼家學既除喪以予與先生交舊也千里簡其行述請予文以表墓顧余年十九始識先生先生長予十歲相得甚歡後五十年交游零落殆盡而先生歸然爲北陸碩宿而今又逝矣嗚呼如先生者固予之所願書也況有其子之請乎但恨年齒衰頹神耗筆澁不能揚其嘉言懿行萬分之一也

前掛川教授 松崎復撰

是歲巡見上使來る、

〔前田氏家乘〕 九年正月十七日幕府代替リノ故ヲ以テ舊例諸國へ巡檢使ヲ發出ス、

〔富田覺書〕

天保九年戊戌三月

國々巡見御用掛

御使番衆

貳千石

木下内記

紋五七ノ桐

御小性組御番頭

齋藤内藏頭組

貳千二百石

石尾織部

紋九ニ葛

御書院御番頭

小笠原長門守組

千五百石

寛新太郎

紋三ツ巴

近江 若狹

越前

加賀

能登

越中

越後

佐渡

〔参考〕

〔增補大路水經〕

巡見御上使

往來道筋能登越中 國境白ヶ峯子浦田江村ヨリ道程山一里三十一町八間九床鍋村日名田村

仁孝天皇天保九年







詰人不殘握飯持參、たはこ酒堅く不相成、高聲喧嘩口論等深く相愼み、都て不作法亂雜之義、堅く不相成、御宿之外火を焚申間敷義等申談候、町中火を焚不申、前日飯を焚置可申、御止宿兩日炭火之外、堅く不相成事、兩日獵業御指止め之段、被仰渡候、○中略

往來は下伊勢町、張田屋久兵衛向之通りより、仕切町通川原町江通り川尻港口にて渡舟出し、濱町今町通り北橋爪江出し、往來いたさせ申候、御宿詰之人々御用懸之人々も、外用の通行は湊町角屋甚兵衛角より北新町松村屋仁左衛門角迄、人留之内往來不相成、御宿詰小使は通り札懸させ申候、御荷物等之人足も不殘、御宿々之家名之一字づゝ記候小札を襟に懸させ申候、

小路々々せまき所より、籠一枚垣に而下の方に潜り申様に仕、廣き小路は喰違之簀垣に仕候、都て高さ八九尺より一丈計に仕候、燒小屋潰家見苦き家等之前も簀垣に圍ひ申候、

寺庵は、大門を閉ち、地藏堂杯は取除申候、西念寺前に丈六地藏有之に付、高き簀垣に而隠し申候、兩日共寺庵神社、都而釣鐘並鳴物御指留に御座候、○中略町年寄三人、二間て計町肝煎、馬問屋御會釋は五人共土につくばい地に面を附、

伏仕候、御與力も同様と申事、御奉行様は膝の少し下江手を當て、御腰を折御會釋御座候由、

御上使は駕より御出、膝之上に手を當て、御腰を折御受と申事、大躰御同様之由、御奉行様名札は、御近習之内より被讀上候、

松平加賀守様、内人持組今石動氷見城端、支配人原五郎左衛門殿と、彼の方にて御讀上之由承り申候、町年寄三人は片狭箱に草履取召連申候、○中略

御行列略寫左之通

禊着壹人	<small>宿按内</small>	乗物	<small>切棹</small>	兩掛二荷	御先乘	町走	町足輕
	<small>之者</small>	四人			御歩一人		
						町走	町足輕

御具足四人	御歩	御歩	御鎗	御歩	御侍
				手替	禊着一人
					<small>御宿</small>
					御乗物八人
	御歩	御歩	御鎗	御歩	御侍



長柄 一人  
草履取 一人 茶辨當 兩掛 兩掛 兩掛 竹馬 竹馬 竹馬 竹馬 合羽籠  
御杖

合羽籠 押貳人 袴着 一人脇亭 御家老之御切人 鎗 一人 草履取 一人  
御侍

兩掛 竹馬 末略す御用人等同様也

富山及び氷見に富籤を行ふ、

〔前田伯爵家舊記〕 富山市街に有志輩古く相傳ひて興行有之富突と申は元來神社等之天災不慮之際に當り貯蓄之元素として其方法を相企たるものと

想像せられけり爰に富山之該會は舊記等種々詮索すれども更に見えされども、古老之申傳へしに元婦負郡岩瀬驛の八幡社境内にて有志相募り木綿講と申す講會ありしを其建設方法を富山の山王社内に移して興行せし由其相始りし年限御歴代君公の何年に相始りしやをしらす概略御二代正甫公より御三代利興公の御治世ならんか其木綿講を銀價に引直して設立せしものならんか併し此興行を永續せしめん爲に該係りのもの共より請願して市役所江御冥加のため若干の銀を相納めけるよし其後に至り江戸表御改革等被仰出候際に當り賭勝負の類種に屬せし様にも見做されしにや御停止の事も舊記に見ゆれとも一つは人民融通賣買の資本にも相成り且其賣捌の札數幾千枚を賣捌する株主とし其札壹枚の株は代價何程と相定め年々月々の定會故壹枚の株主へは何程の賣捌手数料を附與せし故丁年の戸主無之寡婦等迄賣捌く株札を所持すれば可也小前の糊口にも相成至て手堅き商法とも相成候よし尤定會は一年中幾度一ヶ月中幾度と有之内月一會は銀貳拾貫目の興行又並興行は銀五貫目と相成居しを就中天保度の折には世間の人氣に絆され別紙板木摺の千兩金講を興行し尤一ヶ年貳會其札數鶴龜松竹之印を分け相催



し、一時流行して市中の潤色とぞ成にけり、右興行等も維新前迄時々興行も是  
あれとも、夫前より廢絶せり、

八幡社講 常戊年七月 定日二日 山王町於  
鶴龜松竹 壹字四千五百枚宛札一枚料銀拾八匁突揚札  
百枚表袖二百枚印違札三百枚同袖六百枚

第 壹	金百五十兩	兩袖	金壹兩二步	印違	金拾兩	兩袖	壹步宛
第 五	金五兩	同	壹步宛	同	金三步	同	貳朱宛
第 十	金拾兩	同	同	同	壹兩貳步	同	貳朱宛
第 十 五	金五兩	同	同	同	金三步	同	貳朱宛
第 貳 十	金拾兩	同	同	同	同壹兩二步	同	貳朱宛
第 二 十 五	金五拾兩	同	金三步宛	同	同五兩	同	貳朱宛
第 三 十	金拾兩	同	壹步宛	同	同壹兩二步	同	貳朱宛
第 三 十 五	金五兩	同	同	同	三 步	同	貳朱宛
第 四 十	金拾兩	同	同	同	壹兩二步	同	貳朱宛
第 四 十 五	金五兩	同	同	同	三 步	同	貳朱宛

第五十番	金百五十兩	同	金壹兩二步	同	金拾兩	同	壹步宛
第五十五	金五兩	同	壹步宛	同	金三步	同	貳朱宛
第六十番	金拾兩	同	同	同	壹兩貳步	同	貳朱宛
第六十五	金五兩	同	同	同	金三步	同	貳朱宛
第七十番	金拾兩	同	同	同	金壹兩二步	同	貳朱宛
第七十五	金五拾兩	同	金三步宛	同	金五兩	同	貳朱宛
第八十番	金拾兩	同	一步宛	同	壹兩貳步	同	貳朱宛
第八十五	金五兩	同	同	同	壹步宛	同	貳朱宛
第九十番	金拾兩	同	同	同	金三步宛	同	貳朱宛
第九十五	金五兩	同	同	同	金三步	同	貳朱宛
第 百	金千兩	同	拾兩宛	同	金百兩	同	壹兩宛
間 勝	金參兩宛	同	壹步宛	同	金貳步	同	貳朱宛

褒美金興行、翌日渡リ高之内、壹割引紛失札、落札、損札、斷不承届候

天保九戌年

富山中町講會所

仁孝天皇天保九年

四八一



〔憲令要略〕 去秋以來、所用米方損銀等、莫大至極之所、御算用場より御渡も無御座體故、御奉行所え御窺申上内分御聞届、富に似寄候、仕法、頼母子取圖借財返辨之手當仕候、右仕法は壹口五百目懸銀に而、三拾五口親分相立、右五百目を五匁づゝに切分け、小札相調町々へ割符いたし、會日には三千五百之番揉を以圖取仕候仕法

何之何番	會目
五匁也	所方仕法頼母子懸銀之内
受取	西十一月何町町役人
	與合頭中

十五町へ貳百枚づゝ、高町へ百枚、高方五町へ百枚、仲人棟取三人江三百枚

右會日十一月二十八日、御座町宮にて相催申候、

圖振出し人 久津呂屋長三郎濱本川町之長  
 圖振出し人 南上町屋八郎左衛門兵衛四人  
 圖振出し人 呼はり人本川町市三郎  
 書役は六郎兵衛、祐四郎、金助等當り、圖番附版木師、

金澤町幸助、手傳人七尾屋次左衛門、生くわしや、佐右衛門、大工吉三郎、伴等

- 神主下泉
- 第壹番當り銀 三百目 第貳拾五番當り銀 貳百目
  - 第伍拾番當り銀 五百目 第柒拾五番當り銀 貳百目
  - 第百番當り銀 七百目 第百貳拾五番當り銀 百目
  - 第百五十番當り銀 五貫目 十番々々ノ切 五拾目ヅツ
  - 五々ノ切 三拾目ヅツ 百番ノ兩袖 貳百目ヅツ
  - 百五十番兩袖 貳百目ヅツ
  - 百五拾番取當り南上町取次札、百番取當り北新町取次札、
  - 同十二月十一日會、光禪寺なり、夫々之人足は先會同様、神主と幸助は不居合候、
  - 第壹番當り銀 五百目 第貳拾五番當り銀 百目
  - 第伍拾番當り銀 五百目 第柒拾五番當り銀 百目
  - 第百番當り銀 五貫目 拾々ノ切 五拾目ヅツ
  - 五々ノ切 三十目ヅツ 百番ノ兩袖 貳百目ヅツ



五拾番ノ兩袖 五拾目ツツ

第百番取當リ、湊町取次札、第五拾番取當リ、濱町取次札、札數當會は、三千枚ニ仕候、

同十二月二十五日會、御座町宮也、人足等前同様に御座候、

第壹番當リ銀 七百日 第貳拾五番當銀 貳百日

第五拾番當リ銀 六百日 第七拾五番當銀 貳百日

第百番當リ銀 拾貫目 拾番々ノ切 八拾目ツ、

右兩袖 拾五匁ツ、五々ノ切 五拾目ツ、

右ノ兩袖 拾貳匁ツ、間々 貳拾目ツ、

右兩袖 五匁ツ、壹番ノ兩袖 百目ツ、

貳拾五番兩袖 三拾目ツ、五拾番ノ兩袖 百目ツ、

七拾五番兩袖 三拾目ツ、百番ノ兩袖 三百目ツ、

第壹番取當リ、南中町之取次札、第五拾番取當リ、上伊勢町取次、第百番取當リ、湊町紺屋伊左衛門取次札に、而池田村と申風聞仕候、札數三千枚也、尤札之表町名、指除壹枚拾匁、正味八匁五分づゝ、取立申候、

天保九戌年正月二十日會、中町光禪寺也、人足等前々之通り、

第壹番當リ銀 貳百日 第貳拾五番當リ銀 百目

第五拾番當リ銀 三百目 第七拾五番當リ銀 百目

第百番當リ銀 三貫目 十番々々切 三拾目ツ、

五番々々切 貳拾目ツ、間々 六匁ツ、

第百番兩袖 貳百目ツ、第廿五番兩袖 三拾目ツ、

第五拾番兩袖 六拾目ツ、第七拾五番兩袖 三拾目ツ、

第壹番兩袖 五拾目ツ、拾番々々切兩袖 拾匁ツ、

五番々々切兩袖 六匁ツ、

第壹番取當リ銀、中町取次札、第五拾番取當リ、町方へ餘り札、第百番取當リ、本川町取次札、今度札數三千枚壹枚三匁ツ、

同二月十五日、伊勢町西光寺に、而會仕候、人足等前同様、

第壹番取當銀 貳拾貫文 第廿五番取當限 拾貫文

第五拾番右同斷 三拾貫文 第七拾五番右同斷 拾貫文



第百番右同斷 三百貫文 十々ノ切 三貫文ツ、  
 五々ノ切 貳貫文ツ、間々 六貫文ツ、  
 第壹番兩袖 三貫文ツ、第貳拾五番兩袖 貳貫文ツ、  
 第五拾番同 四貫文ツ、第七拾五番同 貳貫文ツ、  
 第百番同 拾五貫文ツ、十々切兩袖 七貫文ツ、  
 五々切同 五百文ツ、間々ノ同 三百文ツ、  
 第壹番取當リ、中野取次札、第五拾番不知、第百番取當南上町取次札、三千五百枚  
 札三百文也、  
 同三月三日會、逆乘寺なり、人足等前々之通り、  
 第壹番取當リ銀 貳拾貫文 第貳拾五番取當銀 拾貫文  
 第五拾番右同斷 三拾貫文 第七拾五番右同斷 拾貫文  
 第百番右同斷 三百貫文  
 十々ノ切等前會同事、  
 第壹番取當銀、本川町取次札、第五拾番取當不知、第百番取當り、下伊勢町取次札、  
 小間物屋三郎兵衛取當り候風聞也、當會に而跡は御上使江近附候に付、先指止

富山藩、郡村の收額を幕府に上申す、

申候、尤會毎に借受候寺社へ謝禮、人足等骨折料、加州盜賊改方役人、魚津、今石動  
 足輕中へ少々宛、菓子料等遣申候、尤右仕法講、余銀相應に可有之筈之所、諸入用  
 多く暨賣残り札之多少、惡金銀等、過分に而都合通り、借貸之辨じ方不相成候、決  
 算等一卷別に留御座候事、  
 附番附振出し方等之道具、近頃西田國泰寺に被用候所借受申候

〔前田氏家乘〕

此の年、郡村收額を調査し幕府へ上申せらる、其略に曰く、六萬  
 二千八百五十石、婦負郡内古高村數百八十、外に一萬二千二百八十二石三斗九  
 升新開地也、三萬七千九百十九石、新川郡内古高村數七十三、外に九千七百五十六  
 石四斗八升七合新開地也、此の外、雜收一萬二千五百三十五石餘ありと、

〔富山前田舊領地調〕

舊領地調、但し舊幕府へ天保度書上高辻帳の表  
 六萬貳千八百五拾壹石 越中國婦負郡一圓百八拾箇村  
 外ニ壹萬貳千貳百八拾貳石三斗九升  
 參萬七千四百拾九石 同新川郡内七拾三箇村



外に九千七百五拾六石四斗八升七合

新田

都合高

郡數貳郡

拾萬石

村數貳百五拾三箇村

外に貳萬貳千三拾八石八斗七升七合

新田改出

壹萬貳千五百三拾五石九斗七升

物成詰込高

計拾參萬四千五百七拾四石八斗四升七合

天保十年己亥

紀元二千九百九十九年

正月

戊戌朔

加賀藩、復び扶持人十村以下を置き、其列次を改む、

〔租稅志〕

る、

天保十年良里正を擧げ、復舊の政を布かれ、以て維新の廢藩に至

〔石埼記録〕

天保十年正月、復元御潤色アリ、百姓モ十村支配ニ仰付ラレシ時

順列左ノ如シ

無組御扶持人十村

無組御扶持人十村並

無組御扶持人十村列

御扶持人十村

御扶持人十村並

御扶持人十村列

平十村

平十村並

平十村列

以上九等ハ改作奉行ヨリ願ノ上仰付ラレタリ

諸郡御用頭取テ無組御扶持人ノ内ニ

新田才許以下五役ヲ改作所ヨリ分山廻ト唱フ、押立トモ唱フルナリ、

新田才許並

新田才許列

山廻能劬ニテハ山廻モテ鹽懸相見人

山廻列

陰聞役兼新田才許ノ

仁孝天皇天保十年



諸郡打銀主付

定小物成取立人

散役才許以上三兼役御共

用水才許

測量方御用分間ナテ以地元テ量リ

以上

御仕立村勢子役

屎物方主附

桑楮植付勢子役

變地勢子役

以上四役ハ臨時ノ役ニテ十村ノ子弟又分役ノ者ニ申付ル、

封切相見人御藏封切ノ相見テナスル

村肝煎長ニシテ御人、大納村ニハ二人アリ、一掌村ノ

江肝煎用水ノ肝煎ニテ大用水ニハ二人ア

組合頭毎村ハ二三名代人アリ、肝煎助

繩張人檢地ノ時丈量

分地人田割ノ

竿取人田地割或ハ内檢地

番代各郡一請サセ、御用ノ取次ヲサシム金澤住人ナリ、改作

右天保十年復元ヨリ明治維新ノ際ニ到ルマデハ別段改革無シ、

〔勸農秘録〕

卷目 御算用場奉行江

無組御扶持人十村

同並

同列

御扶持人十村

同並

同列

右苗字爲名乘可申候、

平十村

仁孝天皇天保十年



同並

同列

右苗字名乗らせ申間敷候、

右今般御郡方御仕法、先規之通就被仰付候、御郡惣年寄共等、最前之通十村之名目被仰付候、依之苗字指省き、都而取扱方前々之通可申付義に候得共、御扶持人之義は、先是迄之通、苗字爲相名乗取扱方之義も、御扶持人平十村共、先づ只今迄之通被成置候條、彌諸事無禮緩態之族無之様、嚴重申渡候様、御郡奉行改作奉行江可被申談候事、

亥正月

〔参考〕

〔十村年中行事〕

正月

新古有米書上十日切○貳歳駒三歳駒並貳歳女馬牛所持有無書上○水附火事家並寺社等返上米書上○八拾歳以上之者書上帳○去年御助小屋江送遣候有無書上○引免上過失銀書上帳○走人明高主附窺帳○同主附相定書上○前年

被仰付候、川除御普請御算用帳可上○道程帳○百姓跡目立○御田地割願

二月

二十日以前主附村廻御注進并御請○御收納申出、御藏番人作喰御藏番人渡守往還道番人御給銀願書上、但御郡打銀渡リ、川上三組五箇山兩組去九月御貸鹽代銀上納○同春御貸鹽願御詰米並糶納書上帳

三月

十五日切春夫銀取立○屎代銀借用借用帳流刑人、五月朔日ヨリ十月晦日迄、御扶持方米願、但正月ヨリ四月迄三分小之圖リニテ、御米請置候ニ付指引相立可願出候事○荒起御見分御注進○御鹽小賣直段前年九月ヨリ當二月迄之分書上○御出役所御門番小使等御給銀半銀渡リ○宿續銀拜借

四月

宗門帳二十日切○舛廻請可申分米糶書上

五月

舛廻

六月



植付草修理春御郡廻御注進并御請○新開免願○早稻中稻步數帳

七月

組々牛馬通行札料上納○西赤尾大勘場口留所江取立置候牛馬通行札并札料上納青狗脊漬狗脊今石動江直達○楮皮他國出口銀五日切取立○五箇山兩組夏成御兩所銀取立

八月

宗門御横目廻ニ付御請帳○主附村廻リ御注進○秋縮御請御注進○御鹽横目廻五箇山鹽焔見本指上惣年寄貳百十日村廻御注進○川上三組五箇山兩組御貸鹽願○步入半紙目錄十五日ヨリ取立○内檢地可請新開調理○同初免附○山貳百十日後彼岸結築見分

九月

十五日切秋夫銀取立○同斷御圖免箇所春夫銀取立去八月御土藏江御預ケ之鹽焔御召上代米御渡○流刑人御扶持方米十一月朔日ヨリ來四月迄之分可相願事但正月ヨリ四月迄小圖ニテ可相願事○御鹽小賣直段三月ヨリ八月迄之分書上○川上三組五箇山兩組御貸鹽代銀上納

十月

越米書上帳○秋御郡廻御請○博勞役銀○月拂米代銀○質屋等三商賣役銀取立

十一月

引免御藏返米願帳○十五日切定散小物成銀取立皆濟日請菜種運上銀○諸代銀返上綿打役銀○質屋御役銀○質屋三商賣吟味役料銀○諸郡打銀返上○芹谷野用水安永四年小拂銀拜借返上銀○古田新開物成増物成帳○御通之砌三川江舟爲引登候御入用銀切手小矢部舟肝煎より可出事○宿續返上流刑人小屋々敷引高願○陶器送出來運上銀○駒出生有無按内○御出役所御門番小使等御給銀本勘渡○明和六年御延拂米淀御利足銀返上○座頭御貸米返上○埴生驛轉馬役銀貳百七拾目餘右驛ヨリ今石動御役所江直上納○井波現銀御拂米願書付○魚御役銀取立文化六年小百姓頭振江御貸米返上銀○天明八年金屋岩黒村用水堤入用銀借用同年より年々三百目宛返上

十二月

本勘目錄十日切○九十歳以上之者存命書上○來年初て九十歳ニ罷成候者御



扶持方米願書上○皆濟都合見届○御案内○御縮高作徳米代銀上納○商人米上卷等運上銀○御鳥見並諸郡打銀にて御給銀被下候銀高名前書上但御鳥見御給銀御納戸銀○西赤尾町大勘場口留所立置候牛馬通行札并札料上納外組々牛馬通行札料も上納○小矢部侯川出水之砌舟越人足賃銀願書上○流刑人喰事認人御給銀○所々御藏留封に出役○右按内二十八日に相達候事○楮皮他國出口錢十日切取立○五箇山冬成御納所銀取立皆濟御注進廿日限り廿八日に相成

加賀藩、諸郡の組割を改む、

〔勸農秘録〕

御算用場奉行江

- |     |     |
|-----|-----|
| 能美郡 | 七組  |
| 石川郡 | 八組  |
| 河北郡 | 六組  |
| 口郡  | 十一組 |
| 奥郡  | 十二組 |

礪波郡

十四組外五箇山二組

射水郡

拾組

新川郡

拾六組

右諸郡組數今般御詮義之趣有之右之通組割等被仰付候條、村數高數等一郡切、組々平均ニ相成候様、割合組名之義も組數に應し、尤當時之組名相用不足之處、郷庄之内廣方を相用、夫々取極相達之候様、改作奉行江可被申談事、

亥正月

諸郡十村裁許組割

新川郡

- |                                |           |
|--------------------------------|-----------|
| 中加積組                           | 寶田宗兵衛     |
| 西加積組                           | 三日市村嘉一郎   |
| 下條組                            | 下砂子坂村太左衛門 |
| 弓庄組 <small>但新川郡新田才許分才許</small> | 沼保村小十郎    |
| 上條組                            | 石割村彌助     |
| 高野組                            | 新堀村太三郎    |



廣田組

石佛村七三郎

嶋組

東長江村彦左衛門

太田組

天正寺村伊右衛門

三位組

沼保村彦四郎

五箇庄組

生地村前名

大三位組

伊東八左衛門

大布施組

福田村七郎右衛門

下布施組

神田村豐次

上布施組

入膳村久兵衛

東加積組

吉島村助三郎

礪波郡

宮島組

荒木平助

五位組

當分同人

石黒組

石黒市右衛門

蟹谷組

當分同人

糸岡組

埴生村佐次兵衛

若林組

安藤次左衛門

國岡組

長田金右衛門

野尻組但當分才許

野尻村六郎右衛門

山田組

右同人

太美組

田中村小四郎

井口組

埴生村佐十郎

船若組

權正寺村孫八

庄下組

當分同人

山見組

中田村源五郎

五ヶ山兩組但當分才許

大西村加左衛門

同組但指加

安藤次左衛門



射水郡

上倉垣組	寺林瀬一郎
下倉垣組	齋藤庄五郎
大袋組	當分右同人
八代組	加納村彌八郎
上庄組	當分右同人
西條組	大門新町宗次郎
南條組	五十里村庄助
下東條組	北野村甚助
二上組	中川村善左衛門
上在條組 <small>當分才許</small>	大門新町十郎兵衛

今般組分就被仰付候、組割之義申渡候通、條々五箇村組合相極早速可書出

亥二月二十一日

上月稻葉

諸郡

無組御扶持人十村中

御扶持人十村中等

平十村中等

三月丁酉朔

二十五日、辛酉新川郡滑川火あり、

〔中新川郡滑川町役場調査〕 天保十年三月二十五日夜、東北風中字神明町馬

方小右衛門ヨリ出火、六十餘戸ヲ焼失ス、

是春、新川郡を上下に分ち、郡奉行の支配を別つ、

〔勸農秘録〕

其御郡常春上下振分、御郡奉行被仰付、支配方相分り候に付、於改作方も振分け  
取扱度旨、御達申置候處、上新川郡、下新川郡と相調候而は、二郡に相當後に紛敷  
候間、略唱に上新川下新川郡と相調候様、御算用場より申談に候條、得其意、諸書  
物上新川下新川と相調可申候、已上、

亥十一月

改作奉行

新川郡上下



御扶持人  
十 村 中  
新田才許中  
縮高主付中

〔参考〕

〔上新川郡東岩瀬各小學校報告〕

寛文五年ニハ、新川郡管轄ノ御郡所ヲ設ケ

御郡奉行ヲ駐在セシム、

五月乙未

十八日、壬子、摩島弘歿す、

〔名人忌辰録〕

下 摩島松南名長弘稱助太郎、京の人、天保十年五月十八日歿す、歳四十九

〔婦負郡八尾尋常高等小學校報告〕

摩島松南名ハ弘、字ハ子毅、通稱ヲ助太郎ト稱

ス、八尾町字東町ニ生ル、家世々醫ヲ業トス、松南幼ニシテ學ヲ好ミ、長ズルニ及ビ、京都ニ遊學シ、若槻幾齋ノ門ニ入り、刻苦黽勉漢籍ヲ研究シ、秀才ヲ以テ名アリ、後醫ヲ以テ業トス、嘉永六年米使ベルリ相州浦賀ニ來リ、通商貿易ヲ求ムルヤ、上下驚駭、攘夷開國ノ兩論起リ、物議騒然タリ、松南大ニ攘夷ヲ主張シ、後ニ海

防論ヲ著ス、松南最モ書ヲ能クシ、著ス所ノ人才傳ハ尤得意ノ筆ヲ振ヒタル者ナリ、天保十年、行年四十九歳ニシテ寓所ニ世ヲ終ル、

八月甲子

三日、丙寅幕府、西の丸再築の費用を、富山藩に課す、

〔前田氏家乗〕

天保十年三月十日曉西ノ丸焼失、略中 八月三日西ノ丸土木ヲ

起サルル際、營築ノ費用ヲ助ケヘキ命アリ、依テ金壹萬五千兩上進セララル、略中

十一年六月二十二日、西丸營築落成ニ依リ物品ヲ賜フ、掛リ員モ亦例ニ依リ賜物アリ、

是歳、礪波郡安養寺新村始めて瓦を製す、

〔西礪波郡礪波尋常小學校報告〕

天保十年頃、安養寺新村西尾要吉初メテ瓦ヲ

製造セシヨリ、漸々製造人殖エ、今ハ安養寺新村ニ六、淺地村ニ一、凡テ七個ノ同製造場アルニ至リ、毎年製造高凡瓦七千坪、煉瓦百萬個、土管大小二千本ナリ、

蝗害

〔石埼記録〕

天保十年、非常ノ蝗害アリ、八年以來今年ニ迄ルマデノ別除米ヲ

拂ヒ出セリ、



婦負郡丸山村の人甚太郎、陶器を製す、之を丸山焼といふ、

〔加賀越中陶磁考草〕

越中婦負郡丸山村ニ陶器ヲ製セシトヲ聞キ、富山ノ人ニ質シ  
タレハ、其人記憶ノ儘ヲ筆記シ、余ニ示セリ、因テ之ヲ左ニ掲ク、

丸山製陶器、天保十年頃、越中國婦負郡丸山村同郡八尾宿近村ニ於テ甚太郎ト申者、  
同村産土石ヲ以テ、陶器製造開業、製造品繪具染付、粗九谷焼ニ類似タリ、尤當  
時ノ御領主從四位前田利保公、陶器製造方御得知被爲在、右甚太郎製造ノ義  
御奨勵ニ相成、御近侍ノ寺西左膳へ會テ陶器製造御傳習ニ相成居候趣ニテ、  
同人ヨリ甚太郎へ傳習シタル義有之由、殊ニ利保公、折節丸山村へ御出製造  
方御覽、陶器ノ諸器物御注文有之、其内夥敷製造被命候、石焼鳳凰丸模様植木  
鉢ニ有之候由、爾來甚太郎製造方勉勵罷在候處、安政年間故アリ廢業スト傳  
承罷在候事、

〔按〕余未タ丸山焼ノ製品ヲ見ス、其或ハ丸山焼ナラント云ニ品ヲ一覽スルニ、  
其一ハ白磁ニ赤繪ヲ附セシ壺ニシテ、嘉永安政頃ノ九谷焼ニ似タリ、其一ハ四  
角隅切ノ蓋物ニシテ、白磁ニ赤繪金襴ノ模様アリ、其磁質ハ肥前有田ニ似テ、其  
着畫ハ山代窯ニ類ス、二品共ニ丸山製タルノ信ヲ置ク能ハス、他日其製品ヲ得

テ然後其詳ヲ説ントス、

天保十一年庚子

紀元二千  
五百年

二月

壬戌  
朔

二十五日、丙戌暴風、

〔中新川郡滑川町役場調査〕

天保十一年二月二十五日夜、暴烈ナル南風ノ爲

メニ、全町家屋ノ屋根ヲ毀テ、二十二戸ヲ吹倒セリ、

天保十二年辛丑

紀元二千  
五百年

正月

丁亥  
朔

大雪積ること丈餘、

〔中新川郡滑川町役場調査〕

天保十二年正月二日ヨリ大吹雪アリ、積雪丈餘

ニ達シテ、町民薪炭ニ窮シ、牆塀ヲ毀テテ、之ヲ焚キタリ、

四月

乙酉  
朔

十八日、壬寅射水郡放生津火あり、

〔射水郡新湊町役場調査〕

天保十二年四月十八日晝九ツ、長徳寺町中野屋五

郎七ヨリ出火、風位南大風ニシテ、放生津町字古新町湊橋マデ延焼、戸數約五百



餘燒失せり、

五月甲寅

十三日、丙寅諸川出水、田島被害多し、

〔前田氏家乘〕

八月七日届ニ曰ク、本年五月十三日、領内諸川洪水、爲メニ田島

是歲、射水郡伏木、能登屋三右衛門、銀十五貫目を藩に獻じ、其利金を以て防波堤を築かんことを請ひて許さる、

〔伏木港防波堤築造ノ始末〕

日本海岸ノ陸地ガ、漸次海水ノ浸蝕ヲ被リ、之レヲ數百年前ノ口碑、若シクハ舊記ニ徵スルトキハ、桑滄ノ變轉タ驚クニ堪ヘタルモノアリ、之レ嘗ニ口碑ト舊記トニ依リテ傳ヘラル、ノミニアラヌシテ、日本海岸ノ浸蝕ニ關シテハ、世既ニ學說ノ證明スル所ナリ、而シテ本縣海岸モ亦實ニ此自然的變遷ノ例ヨリ免ルルコト能ハサリシモノトス、舊記ノ載スル所ニヨレバ、久壽年間、岩瀬ノ森ノ戌亥、約一里ニ當ツテ一良港アリ、打出港ト云フ、人家三千、船舶ノ出入頻繁ニシテ、商業賑盛ヲ極メタリシニ、其地今ヤ海中三里ノ沖合ニ埋没セラレタリト、又曰ク、古昔ノ打出濱ハ數回ノ高波ヲ受ケテ潰滅

シ、南方ニ村ヲ移遷スルコト六度、當時ノ海禪寺ノ如キモ亦海底ニ沈落シ、宛然駿ノ打出濱ニ似タルヲ以テ名ツケラレタル打出ノ地形ハ、毫モ其遺跡ヲ尋ヌルニ由ナシト云フニアラスヤ、

我伏木ノ地タル、今ハ水陸運輸ノ利便ヲ兼ネテ、北陸有數ノ良港トナリ、海深ハ二尋乃至七八尋ヲ有シ、千噸以上ノ汽船ハ一時ニ百隻以上ヲ碇泊セシム、ヘク、戸數千七百餘、人口七千四百餘、縣下樞要ノ位置ヲ占ムルニ至リタリト雖トモ、其伏木ノ地ヲシテ茲ニ至ラシメタルモノハ、抑モ偶然ニアラスシテ、全ク故三右衛門ガ防波堤ヲ築造セシニ基因セルモノナリ、今乞フ其顛末ヲ略叙セン、抑モ射水川口ヨリ國分村境ニ至ル、伏木海岸ハ往昔一帶ノ大砂濱ヲナセシガ、寛政以來激浪高波ノ襲撃ヲ被ルコト前後幾十回ナルヲ知ラズ、之レガタメニ陸地漸ク浸蝕シ去ラレ、人家亦其慘害ニ遭フ、於是乎藩ノ米廩ハ隣村串岡村ニ、神社ハ隣村一ノ宮村ニ移轉スルノ已ムナキニ至リ、民家各難ヲ避ケテ、隣村石坂村ニ退散セシカハ、當時ノ伏木ハ僅々三百戸ニ過ギズ、併モ居民ノ生活頗ル困難ナリシカ故ニ、腥風淫雨ノ一寒邑、誰レカ今日ノ變遷アルヲ知ランヤ、嘉永五年、三右衛門ノ調製ニ係ル伏木浦仕法波除御普請所萐形等、見取繪圖ニヨリ



テ按スルニ、現今燈明臺、日本郵船會社支店、郵便局ノ存在セル所ノ如キハ、都テ之レ海中ノ一部分ナリシナリ、而シテ舊藩ノ制度タルヤ、田地園ノ防波堤ハ其工事藩ノ支辨ニ屬スト雖モ、人家園ノ防波堤ハ其町村自ラ負擔スル所トナセリ、然レモ、蟻戶蟹舍其數三百ヲ出テサル貧困ナル伏木村ニシテ、蓋ンゾ築堤ノ負擔ニ堪エヘケン哉、彼等ハ戰々兢々トシテ、濤聲浪響ニ安ンセス、唯徒ラニ海水ノ氾濫ヲ座視スルノ外ナカリキ、

三右衛門ハ、其身伏木ニ生レテ、船問屋ヲ業トシ、算用聞役ヲ勤ム、幼ヨリ居村ノ慘狀ヲ目撃シテ痛嘆措ク所ヲ知ラス、陳情請願ノ結果、文政五年、郡所御普請會所及ビ定檢地所ノ管理ノ下ニ射水川口ヨリ海濱ニ接シテ、延長三百間ノ防波堤ヲ築造スルコト、ナリ、其工事ヲ三右衛門ニ托命セラレタリ、然レドモ爾來年ヲ經ルコト二十年、激浪ノ襲撃ヲ受クルコト亦數十回、防波堤悉ク破損シテ其功ヲ奏セス、終ニ海濱ノ往來ヲ途絶スルニ至レリ、於是天保十二年、三右衛門再三請願、銀子十五貫目ヲ獻ジ、其利金ヲ以テ工費ニ充用セラレンコトヲ乞フ、藩其ノ熱心ヲ嘉ミシ、伏木浦防波堤主附ヲ三右衛門ニ命ス、三右衛門茲ニ宿望ヲ成スノ端緒ヲ得、一身ヲ犠牲ニ供シテ該事業ノタメニ盡サンコトヲ決意シ、

即チ築堤ノ技術ニ熟練セル工人ヲ集メ、苦心慘憺其工ヲ起セリ、今三右衛門ヨリ、年々郡所ニ報告シタル伏木浦新波除御普請仕法銀根帳、及嘉永五年同普請見取圖ニヨリテ、其施設ノ順序ヲ考察スルニ、天保十三年ニ於テハ、海岸ニ接近シテ先ツ延長百六十二間ノ磯園波除堤ヲ建設シタリ、其内譯ニ曰ク、草槇二間ノ材木ヲ以テ、三角葎二十間、松二間ノ材木ヲ以テ、同六十二間、松一丈ノ材木ヲ以テ、同八十間、之レニ要セシ金額十四貫五匁一分二厘、

天保十四年ニ於テハ、前年ノ磯園防波堤ニ連續シテ、東南へ延長四十間ヲ加築シ、別ニ射水川口濱先へ十八間ノ張出シ三角葎ヲ築ク、内譯ニ曰ク、松一丈ノ葎十間、續四箇、松一丈ノ二間、續八箇、松一丈ノ二間、續十六間、及張出起點ヨリ約十間ヲ隔ツル砂濱ニ、松一丈ノ二間、續八箇、工費二貫七百七匁九分五厘、

弘化元年ニ於テハ、川口張出堤ノ起點ニ、長サ十間ノ三角葎ヲ築キ、磯園長堤ノ端ニ二間、宛二個所、及ビ磯園長堤ト並行シテ二間、宛二ヶ所ノ三角葎ヲ建設シ、更ニ磯園長堤ト直角シテ、海中二個所ニ各六間、宛ノ張出シ三角葎ヲ設ク、此工費三貫四百二匁一分一厘、

弘化二年ハ、磯園長堤ニ連續シテ、更ニ東南へ三十間ヲ延長シ、又前年海中ニ



張出シタル二箇所ノ張出葎ト、陸地磯園トノ間ヲ連續スルタメ、各二十間宛ノ竹籠ヲ敷設シタリ、此工費二貫五百九十五匁六分七厘、  
 弘化三年ニ於テハ、天保十四年起工セル港口張出葎ニ接續シテ、射水川ノ流勢ト平行シ、海中へ蛇籠十間葎二間ヲ突出セシメ、更ニ同張出シ葎之稍々上流ニ並行シタル十數間ノ突堤ヲ築キ、以テ川尻ノ左岸ヲ一直線ニ埋立ントシタリ、工費二貫八百十六匁四分三厘、  
 弘化四年ニ於テハ、港口ニ張出セシ汐止突堤ヲ延長スルコト、更ニ三十間、材料ハ、口徑四尺ノ竹籠ヲ以テシ、三重ニ積載ス、工費二貫三百八匁四厘、  
 嘉永元年ニ於テハ、港口汐止突堤ヲ延長スルコト、更ニ三十間、工費一貫二百九十七匁九分一厘、  
 嘉永二年ニ於テハ、港口汐止突堤ヲ延長スルコト、更ニ五十間、又磯園長堤ト直角シタル海中へ三箇所ノ竹籠ヲ張出セリ、其一其二ハ共ニ延長十五間、其三ハ二十間、工費四貫五百二十六匁六分三厘、  
 嘉永三年ニ於テハ、港口汐止突堤ノ損所ヲ修繕ス、工費三貫九拾三匁八分六厘、  
 嘉永四年ニ於テハ、八月港口汐止張出五十間ヲ改築シテ、工費二貫四百九十四

匁三分五厘ヲ要セシガ、同九月非常ノ激浪ニ遭ヒ、人家浸水磯園長葎悉ク砂中ニ埋没シ、若クハ破壊セラレシニヨリ、建替ノ命アリ、依テ九月ヨリ十二月ニ至ルマデ、磯園堤改築ノ大工事ニ從事シ、之レヲ竣工ス、其工費六貫九百四十七匁八分四厘、  
 嘉永五年ニ於テハ、港口汐止突堤竹籠五十間ヲ改造シ、川口崩壞四個所二十五間ヲ修築シ、濱先窪所四個所七十間合百四十五間ヲ竣功ス、工費二貫九百二十四分五厘、  
 安政元年ニ於テハ、港口汐止突堤ヲ修築シ、磯園堤ヨリ直角シテ新ニ三個所ノ張出葎ヲ築ク、工費五貫四百九十四匁一分三厘、  
 安政二年ニ於テハ、港口汐止突堤ノ損所ヲ修繕シ、同堤先端波切大葎ヲ改造ス、猶川口堤防崩壞個所ヲモ修築シ、工費一貫四百二十七匁五厘ヲ要セリ、  
 安政四年ニ於テハ、竹籠三百葎ノ損破ヲ修築シ、港口汐止突堤ノ屢々波浪ノタメニ破壊セラレ、ヲ慮リ、是レヲ石堤ニ改築セント欲シ、石垣積ニ着手シタリ、工費三貫三百九十匁二厘、  
 安政五年二月強震アリ、堤防ノ破損甚ダ多シ、依テ三月ヨリ六月ニ至ルマテ、港



口沙止突堤石垣及川口三角菱伏籠ヲ改築シ、六月ヨリ十月マデ石堤増築ス、工費三貫三百三十三匁五分二厘、  
安政六年ニ於テハ、破損磯園菱及竹籠修築工費一貫六百八匁八分五厘、  
萬延元年ニ於テハ、沙止堤石垣ヲ増築シ、川口竹籠ヲ修造ス、工費二貫六百八十四匁三分八厘、  
文久元年ニ於テハ、竹籠等修繕工費一貫二十八匁六分五厘、  
文久二年ニ於テハ、沙止突堤石垣増築、並ニ修繕工費一貫八十四匁五分、  
文久三年ニ於テハ、沙止突堤石垣増築、並ニ川内竹籠等修繕工費二貫六百二十六匁一分五厘、  
元治元年ニ於テハ、沙止突堤石垣増築、並ニ川内竹籠等修繕工費一貫九百四十七匁二厘、  
元治二年ニ於テハ、沙止突堤石垣六間増築、竹籠修繕工費三貫三百三十匁一分五厘、  
慶應二年ニ於テハ、沙止突堤石垣修築、四間并ニ川岸石垣新築、二十八間、工費三貫百五十四匁六分四厘、

慶應三年ニ於テハ、臺場横川岸石垣積等五個所工事、工費七貫三百九十三匁五分四厘、

明治元年ニ於テハ、沙止突堤石垣増築修築及川内張出新築、工費七貫九百四十三匁七分五厘、

明治三年ニ於テハ、沙止突堤石垣増築、修破及ビ川内石堤新築、工費三百二十八貫五十匁、

以上略叙セルガ如ク、天保十三年ヨリ元治元年ニ至ル凡三十年間、三右衛門伏木波除普請主付トシテ、幾多ノ激浪怒濤ト防戦苦闘シテ、毫モ屈撓挫折スルコトナク、當初先ヅ磯園ノ長堤ヲ築造シ、次テ川尻港口ニ沙止突堤ヲ築造シ、漸ク續出シテ終ニ百四十餘間ニ及ヒ、後之レヲ固ムルニ石材ヲ以テセリ、或ハ曰ク、本縣ニ於テ防波堤ニ石材ヲ以テスルコト之レヲ嚆矢トスト、之レガタメニ波浪年々退縮シ、次第ニ陸地ヲ再現擴張シ、終ニ今日ノ伏木町ヲ現出スルニ至ラシメタリ、三右衛門ガ防波築堤ノ結果、自然ニ埋立ノ功ヲ奏シタル新現地ハ、則チ今ノ燈臺、日本郵船會社支店、貸座敷、免許地ノ在ル所等ニシテ、何レモ當町一等地ノ位置ヲ占メ、其面積概算五町三畝七步餘ナリ、而シテ此新現地ハ元伏木



村領地ニシテ、舊高七町七段七畝九歩ノ内ニ屬シ、今現ニ所有權ハ伏木町ノ共有ニ屬セリ。

元治元年、正月三右衛門家督ヲ嗣子藤井能三ニ讓リテ隱居シ、能三代リテ同工事ノ主付ヲ命セラレタリト雖モ、廢藩置縣ノ際、役名廢止セラレ波除仕法銀殘高ハ仕法銀根帳ト共ニ、明治四年當時ノ伏木戸長蜂谷德平ニ引渡セリ、其領收證左ノ如シ

記

一、百五拾參貫五拾文

波除仕法銀殘

右正ニ請取申候也

明治四年二月

戸長 蜂谷德平

藤井能三様

該根帳ハ、天保十五年八月、三右衛門ノ調製スル所ニシテ正副二冊アリ、年々工費ノ收支ヲ詳記精算シテ伏木町才許ノ加判、及郡奉行ノ檢査ヲ受ケシモノニシテ其一冊ハ今猶能三之ヲ藏ス、以テ防波築堤ノ施設ヲ證明スルニ足ラン。

〔知事官房調査〕

富山縣越中國射水郡伏木町平民

藤井能三

亡父三右衛門、資性篤實公共心ニ富ム、夙ニ伏木海岸ノ防波堤堅牢ナラサルガ爲メニ、勵モスレハ激浪怒濤ノ崩壞スル所トナル、屢々民家ヲ浸害シテ慘情ヲ極ムルヲ憾ミ、遂ニ天保十年私資ヲ献シテ築堤基金ヲ備ヘ、苦心慘憺工事ノ經營董督ニ心力ヲ傾注スルコト二十七年、明治元年死後ニ至ルマデ毫モ懈ラズ、尙男能三ヲシテ遺志ヲ繼續セシメ、同四年ニ至テ之ヲ竣成ス、依テ以テ波濤ノ防波ノ目的ヲ達シ、且新地五町歩餘ヲ得ルニ至レリ、其効績洵ニ著名ナリトス、仍テ爲追賞木杯壹組下賜候事、

明治三十七年十月二日 富山縣知事正五位李家隆介

〔參考〕

〔上新川郡濱黑崎尋常小學校報告〕

濱黑崎村ノ海岸線ハ二十七町十六間餘ニ涉ル、毎年波濤ノ爲ニ奪ヒ去ラレツ、アリ、老人ノ言ニ據レハ、今日ノ海岸ト明治初年頃ノモノトヲ比スレハ約五百間減退セリ、サレド河身變更ノタメカ、近年ニ至リ春夏ノ交ニハ、十七八間モ沿岸線ヲ押し出シ、冬季ニハ復々奪ヒ去



ラル、ヲ見ルト云ヘリ。

〔下新川郡宮崎尋常小學校報告〕

本村海中ノ沖合十數町ノ間ニ、邊中沖ノ三島アリテ、往古ハ此ノ沖ノ島マデ突出セシ一小岬角アリテ、其突端ニ鹿島神社ヲ奉祀シ、東西ヨリ社殿屹然トシテ見エシ故ニ、始メ此地ヲ宮ノ崎或ハ宮崎ケ島ト稱セシヲ、何時ノ頃ヨリカ、宮崎村ト稱スルニ至リシナリト云ヒ傳フ。維新前ハ岩瀬、滑川、魚津生地、横山、赤川、宮崎ヲ七浦ト稱シテ、生地町ノ田村某ナルモノ之ヲ支配ス、

〔射水郡打出本江尋常小學校報告〕

古ノ打出濱トイヘルハ、數度ノ高浪ニ潰ヘテ六度マデ村モ南ヘ移避セシナリ、岩瀬ノ海禪寺トイヘルモ、元打出ニアリ、今ニ海中ニ寺跡見ユルヨシナリ、

〔射水郡堀岡尋常高等小學校報告〕

草岡神社ハ、原ト今ノ陸地ヲ距ル北方千六百間餘ノ海中ニアリ、彼ノ漁場トシテ有名ナル明神配神樂配ト呼處ナリ、今日ニ至リテモ草岡郷四十九個村ノ氏子祭日ニハ、相集リ神輿ヲ調ヘ、御神影ヲ奉遷シ、漁船ニ奉鎮郷内ノ各村順番ナリ以テ海中ニ漕ギ出シ神樂ヲ奏シ、舊社地ニ至リ祭事ヲ行ヒ、後郷内各村ヲ遠リ行クハ此故ナリト云ヘリ、

天保十三年壬寅

紀元二千五百二年

八月丁丑朔

諸川出水、

〔前田氏家乘〕

十二月二十六日、本年八月在所、川々洪水損シ箇所、田島損毛高二萬二百六十石ノ旨届アリ、貧民ヘ三百五十石救恤セラル、

十月丙子朔

痘瘡流行し死者多し、

〔三日市警察分署調査〕

天保十三年十月ヨリ痘瘡發生蔓延シ、翌十四年五月ニ至リ終熄セリ、而シテ當時ノ痘瘡ハ其病質極メテ惡性ニシテ、死者多ク又全治スルモノト雖トモ大抵ハ癩疾若クハ不具ヲ免レザリシトイフ、統計ハ素ヨリ正確ナラザルモ、各町村古老者ニ就キ調査シタル數ハ患者千四十人、死者六百二十四人ニ達セリトイフ、

是歲、新川郡の布施山開墾地の用水路竣工す、

〔下新川郡松倉尋常小學校報告〕

郡ノ中央ニ横ハレル布施山開ハ、文政三年藩命ニ依リ、道三實地踏查ヲ遂ゲテ起工シ、尅劃經營内山村字尾野治谷及宇奈



月谷ヲ水源トシ、蜿蜒蛇行セル用水路ヲ掘鑿スルコト七里十三町、天保十三年ニ至リテ竣工ス、是ヨリ開拓獎勵ノ爲メ該地ニ移住スルモノニ藩侯ヨリ錢拾二貫文ヅ、施與セラレタルニ依リ、今尙十二貫野ノ稱アリ、爾來住民四方ヨリ來リ、現時ノ盛況ヲ呈スルニ至レリ、(河崎敷造口述)

〔参考〕

〔杉木記録〕

大布施組拾貳貫野、今般詮義之上御手前開就申付候、地元引揚、其元中主附申渡候條、得其意、江筋堀立方、詮義之趣可申聞候、且道三申談、其元中之内代リ、壹人宛、爲勢子方可罷出候、以上、

戊十月

安田新兵衛印

稻葉助五郎印

寶田宗兵衛殿

神保嘉一郎殿

沼保村小十郎方

大熊村道三方

泊町與三左衛門方

入膳村紋三郎方

若栗村文助方

中新村覺右衛門  
悴嘉六郎方

天保十四年癸卯

紀元二千  
五百三年

五月  
癸卯

富山藩、財政整理のため、町人百姓より藩士に採用せしもの、士格を解き、又借入金<sup>の返済を延期す、</sup>

〔前田氏家乗〕

此ノ月訓合アリ、其略ニ曰ク、比年財政整理ノ道ヲ講スルモ、方

法未タ宜シキヲ得ス、宗藩ニ稟議シ事万已ムヲ得ス、曩キニ文政元年以來町人百姓ノ内ヨリ藩士ニ採用セシモノハ其士格ヲ解キ、廩米ハ從來ノ通り支給スト雖トモ、地方取リノ者ハ之レヲ廩米ニ換ヘ其一代ヲ限リ姓名ヲ唱ヒ帶刀スルヲ許ス、將タ内外ノ諸費凡ソ半額ヲ程度トシ、借用ノ金ハ渾テ一時延期ヲ乞ヒ、逐次貯米ヲ以テ後年返金ノ方法ヲ設ケントス、猶且ツ其目的ヲ達スル期ニ達キヲ以テ、今ヨリ以降三年、藩士祿高ニ應シ、多キハ十石ニ付五石、少キハ十石



ニ付八斗三升ヲ勘定所ニ借入レ以テ一助トス、從來藩士ニシテ返濟スヘキ金額ノ殘餘ハ之ヲ勘定除却スト。

九月辛丑

二十三日、癸富山藩、海岸防備の狀況を幕府へ上申す。

〔前田氏家乗〕

九月二十三日、老中月番士井大炊頭へ従前海岸防禦人員等ヲ届出テラル、其略ニ曰ク、番頭一人、物頭二人、目付役二人、内一人船手奉行使番一人、馬廻組侍二十三人、内二人役付ノ者鐵炮役一人、大筒鐵炮打侍五人、筆談役一人、與外四人、醫師二人、馬醫一人、徒組十二人、但小頭向具鐵炮足輕四十人、足輕十人、但小役向見小人三十人、外ニ大筒持夫水主二人、船子四百二十二人、火矢大筒並ニ五十目筒以下十挺、外ニ組頭等鐵炮五匁筒等四十挺、關船櫓五艘、四十四小早船三十一艘、早船四艘ナリ、然ルニ今回海岸防禦一層嚴ニ致スベキ命ニ依リ組頭付侍五騎増加物頭付鐵炮足輕五人宛ヲ増加シ、鐵炮亦十挺ヲ加ヘ舟數等モ准シテ増加、尙添ルニ繪圖ヲ以テ上申ス、且ツ領分海岸ノ形勝タル入海ニテ東西ノ隣地、同姓加賀守領分モ接続ス、故ニ萬事申談シ、見張番並ニ注進等、愈々嚴重ニ致スヘシ云々、又別ニ海岸地形並ニ海上淺深等ノ繪圖ヲ製シテ、附呈セラル、

天保中

紀元二千四百九十年より全二千五百三年まで

新川郡船倉村及二本松村を開墾す、

〔舊記雜聞〕

新川郡船倉二本松開、天保年間、但し新田概略該石高不詳、俚俗五百石と云、

射水郡小杉の人與右衛門、陶器を製す、之を小杉焼といふ、

〔越中史略〕

小杉焼射水郡小杉町にて製造するものなり、其開祖の誰たるやは未だ知るへからずと雖も、文化年中既に盛んに製造せしものと見ゆ、乃ち

覺

銀壹枚代

一四拾三匁

文丁銀

右下條村彌二郎組上野村仁左衛門等瓦並土鍋燒致商賣、爲冥加右銀高差上之候條、毎歲取立可上納者也、

文化十年五月

御算用場

射水郡散小物成取立人中



これと同時に、小杉新町彌右衛門せがれ鍋次郎といふ者、土鍋茶碗等を焼出し、運上銀四十三匁取立てられしこと舊記に見えたり、その後天保年中に至り、同町に唐津屋與右衛門といふ者あり、上野新村字平野の土を用ひて陶業を營み、その子二三郎父の業をつぎ、益々盛んにこれを製造したり、又同地橋下條村に林唐齋といふ醫師あり、製陶の法を與右衛門に學び、遂に窯所を同村に設け、茶器等を製出す、頗る精好なるものありき、

〔加賀陶磁考草〕

小杉驛ニ與右衛門ト云フ者アリ、奥州相馬ニ往キ、製陶ノ業ヲ習ヒ得テ歸リ、驛ノ南一里計隔タリタル平野ト云フ村ノ山北陸道ヨリ望メハ赤キ禿ケ山ナリノ土ヲ取テ燒キハジメタリ、其陶皆手重キモノハカリニテ、鉢ノ如キハ厚サ二寸計リモアル者ナトヲ燒キタリ、就中燭臺ハ加賀ノ金澤ナトヘ多ク賣レタリ、弘化年間ニ與右衛門六十歳ハカリニテ、人之ヲ唐津山與右衛門ト呼ビ、家モ盛ンニ富ミタリ、與右衛門ノ弟子ニテ別ニ窯ヲ創メタルモノアリシカ、遂ニ失敗セリ、明治維新ノ後ハ與右衛門ノ家モ衰微セリ、蓋其製スル所皆時好ニ適セサル故ナリト、明治二十年八月廿八日廣島控訴院評定官増田贊小杉驛ノ話

弘化元年甲辰

紀元二千五百四年

正月戊辰朔

十二日、卯巳礪波郡井波町火あり、

〔荒木留帳〕

天保十五年甲辰、正月十二日夜、井波三百軒斗燒失、火本は神明屋

仙助也、

〔参考〕

〔東礪波郡井波高等小學校報告〕

今般改て火消方役付等相極候條、以來左條之通、急度相守可申事、

一 火消方組合

水車組

拾貳人

但し新町山下町

掛矢組

拾貳人

但し島方町山見松島

碓組

拾貳人

但し北新町北川

井筒組

拾三人

仁孝天皇弘化元年



但し御坊所御手人

都合四拾九人之事

一 火事出来之節は、各水旗壹本、夜中ならば高灯燈壹張、懸矢貳挺、階子壹挺、爲口五挺、持參にて火元江馳付、防方に根精を抽、互に相働可申候、其節相應之餘内等相渡可申事、

附り強弱勇劣を争ひ、於火事場等喧嘩口論堅く不仕様、兼々相心得可申事、  
一 杉木、福野、城端、福光、右四ヶ所之内、火事之節、井筒組之外、三組共大勢相騒候ては混雜いたし候條、壹組宛月當番相定可申候間、右當番組より先驅に五人急速罷出可申、尤長く火鎖不申體に候は、壹組より五人宛罷出相働可申事、  
附り、人々我儘に走り行可申義にては無之、出勤之節頭取之指圖を請法被等持參可仕候、萬一頭取之指圖無之に罷出候者は、夫落に相成可申候間、此段急度心得置可申事、

右四ヶ所行夫代左之通、相極置可申事、

杉木行

貳百五拾文

福野行

貳百文

福光行

三百文

城端行

貳百五拾文

但し大火にて隙取候へは、別段臨時餘内可遣候、且又握飯指遣し可申事、

一 道程壹里半計よりの近村火事之砌、月當番組より貳三人罷出可申事、

附り、非番組たりとも、火事見付次第不拘遠近、町御用所暨月當番之頭取迄

急速爲相知可申候、警火消方人足不遺とも、水旗高灯桃之内遣し可申候間、

此段急度心得置、即刻案内可致事、

一 所方之者は不及申、外ヶ所火消之衆等出合之節、柔和に掛引可致、火防方のみ

專一に相心得可申事、

附り、猥に醉酒不作法之族無之様可仕候義は、人々第一之心得に候條、急度

相慎罷在可申事、

一 遠所等へ罷出、潰家等仕候節は、其ヶ所役人等之指圖を請、潰方等致し可申、任

我意勝手に右様之義仕間敷事、

附り、火防方に格別相働候節、萬一褒美酒等望來候様之義有之候は、其段

罷歸次第可及案内、并に人々名前留申候間、人々同道可致候事、



一前段ケ條書ケ所之外、火事之節は、町御用所まで及案内示談之上、夫々手配可  
仕事

附り、不致案内出勤いたし候共取揚不申事、

一火消道具等、相損候は、早速頭取へ迄可致案内、頭取之衆其品見聞之上詮義  
いたし、町御用所へ相届可申事、

附り、無謂引合杯仕、求て爲損候體に候は、其品其者より急度爲相辨可申  
事、

一火消方役付人々之義は、此度諸番之内亭主番之外、致用捨候へ共、火之元縮方  
專一之勤向に候條、風吹等之砌は、人々居町之義は、臨時に見廻り可申、且町廻  
り之義者、壹組より三人宛頭取指圖を請、一組つゝかわりく、二手にて、都合  
九人指圖を請、火之元之義、町中端々まで嚴重相廻り可申事、

附り、萬一不心得之者、火焚居候は、相咎火を消入念可申、噲候、右等之義に  
付、壹廻夫代五拾文宛、相渡可申事、

一火消道具、持運人々定之事、

水鐵砲 大鍵繩 指股 水溜桶 繩刷牙

右之品等置所へ、各早速馳付火事場へ持運、相防可申候、右懸り役蒙ながら、罷出  
不申者有之に於ては、越度に申渡過怠等、爲指出可申候間、此段常々心得置可申、  
尤夫代急度相渡可申事、

附り、近火之節、罷出義者格別之事、

一拾人組頭中江、手桶三つ宛相渡置候間、其組々より持運、火事場へ馳付、火を消  
候様、篤と組合中へ申談置、聊も心得違無之様、相心得可申事、

一水廻し定附人用水へ筋より水廻し方に付、不斷水道筋等之義、無手拔様、相心  
得置、火事之節、水廻し不都合無之様、專一に心懸可申事、

右之條々堅固に相守可申、右之外に、茂於火事場等難任我意義有之候は、其場  
に在合役人江申聞指圖を請可申候、就夫當年者別、而方々火災有之に付、每度火  
之元要心方等之義に付、被仰渡之趣有之、其時々一統江申渡置候通、心得違無之  
候様、急度相守可申候、以上、

弘化三年六月

町役人

二十五日、<sup>壬辰</sup>富山藩、天保饑饉の損害額を、幕府に報告す、

〔前田氏家乗〕 是月二十五日、去ル卯年夏中早損秋水損ニ依リ、損毛高合テ四



萬六千四百八十六石七斗ノ旨、及ニ富山表ニ於テ、糶千石蓄積セシヲ、老中日番阿部伊勢守ニ届出サル、

九月乙丑朔

十三日、丁丑新川郡滑川火あり、

〔中新川郡、滑川町役場調査〕 弘化元年九月十三日、南風中字順家町、四郎七ナル者ヨリ出火、七百餘戸ヲ焼失ス、

弘化二年乙巳 紀元二千五百五年

二月壬辰朔

十四日、乙巳射水郡、放生津火あり、

〔射水郡、新湊町役場調査〕 弘化二年二月十四日朝四ツ、放生津町字法土寺町、

三ヶ屋次助ヨリ出火、折柄北風烈敷、内川ニ繋留ノ小廻船ニ燃移リ留網ヲ燒斷、船ハ荒屋町川岸ニ着シヤ、人家ニ燃移リ放生津町字東町へ延焼、戸數約五百戸焼失セリ、而シテ燒失セシ重ナル建築左ノ如シ、

勝光寺 光明寺 本誓寺 七面堂 八幡宮 神明社 加州藩御給人藏榎 正米壹萬石入五棟

六月辛卯朔

十七日、丁未富山藩、江戸城の災ありしに依り獻金を稟請す、是日、幕府、之を許可す、

〔前田氏家乗〕

儀許可アリ、

六月十七日、江戸本丸燒失ニ付、金五千兩五ヶ年ヲ以テ上進ノ

〔参考〕

〔憲令要略〕

先般、江戸御本丸災上ニ付、金八萬兩御差上被成度、段被仰立候、然處一統承知之通、當時別而御逼迫至極之御勝手振ニ而何分御手當も無之候へとも、御公役之義不被得止事被指上候、依之乍御心外町方軒割ヲ以別紙之通、當年カ三ヶ年御借上銀被仰付候、尤御家中并御那方江も御借上銀被仰付候へ共、御不足ニ付、此分ハ地他所ニ御借入被仰渡、其外御平生御入用、是迄段々御手詰之上之儀ニ候得者、唯今カ猶又格別之御省略等ヲ以、幾重にも御辨合出來之様、被仰出候條、右之趣致意得御用立可申候事、

九月

仁孝天皇弘化二年

五二九



覺

一町地壹軒一ヶ年分

拾貳匁

但町役人も同様取立可申候且身元高下有之事ニ付支配人手前ニ而遂詮議  
或は五人出拾人出とか取極小手前之者へは乃至拾人又は五人にて壹軒當  
り爲指出隨分不相痛様割合せ一ヶ所當り惣軒數高當り取揃可指出候事  
右之通當辰年方午年迄三ヶ年中御借上被仰付候仍而當年分十一月中來年來  
々年分八月中御算用場江上納可有之候事

辰九月 ○弘化元年

覺

家高九百九拾貳軒 但壹軒ニ付拾貳匁つゝ

一拾壹貫九百四匁

今石動町

内七貫九百三拾六匁

壹軒ニ付八匁つゝ上納分

殘る三貫九百六拾八匁

過銀御渡被下之分

家高千六百拾六軒 但右同斷

一拾九貫三百九拾貳匁

氷見町

内拾貳貫九百廿八匁

壹軒ニ付八匁つゝ上納分

殘る六貫四百六拾四匁

過銀御渡被下之分

家高七百六拾六軒 但右同斷

一九貫百九拾貳匁

城ヶ端町

内六貫百廿八匁

壹軒ニ付八匁つゝ上納分

殘る三貫六拾四匁

過銀御渡被下之分

合拾三貫四百九拾六匁

右公義御上金ニ付御借上銀壹軒當り拾貳匁宛被爲仰付則先達而奉上納候然  
處今般右銀御減少之旨ニ而壹軒ニ四匁充可被御返下段候難有奉存候依而御  
返之銀高書上之申候以上

天保十五年十二月

今石動町年寄紅屋平 兵衛

氷見町年寄堀口屋平 左衛門

城端町年寄古道屋吉 左衛門

今石動御奉行所

十二月

成于朔

仁孝天皇弘化二年



二十三日、庚戌新川郡海岸怒濤起り、人家流失す、

〔中新川郡滑川町役場調査〕 弘化二年十二月二十三日ヨリ三日間、海面怒濤起り、滑川海岸人家三十三戸流没ス、宇山王町濱町ノ幾分、南方ニ移轉シテ今ノ堺町ヲ創ム、

弘化三年丙午 紀元二千五百六年

十月 癸丑朔

二十日、壬申富山藩主前田利保致仕す、利友嗣く、

〔弘化錄〕 十月二十日

嫡子 松平出雲守  
同 啓之助

病氣ニ付、願之通、隱居被仰付、家督無相違嫡子啓之助へ被下之、  
右於御白書院縁頗、老中列座下野守申渡之、

十一月十五日

御白書院

家督之御禮

松平啓之助

隱居之御禮

松平出雲守

金三枚  
御馬一枚

綿三十把

卷物五  
金馬代

〔前田山家譜〕

利保、小字啓太郎、利謙ノ第二子、寛政十二年三月朔、江戸邸ニ生ル、母ハ某氏、文化八年閏二月、利幹ノ嗣トナル、十四年十二月、從五位下出雲守ニ叙任ス、文化七年十二月四品ニ叙セラル、天保六年十月、封ヲ襲フ、八年天下大ヒニ饑ス、利保封内窮民ノ爲メニ百方力ヲ竭シ、賑濟ス、大農豪商モ亦各食ヲ飢民ニ與フ、此ニ由テ道路餓孍ヲ見ス、利保國雅一首ヲ賦シ、大農豪商ノ仁惠ヲ施ス者ニ與フ、其歌ニ曰、アル、トシ何カツミセンウヘ人ヲ救フハ我ヲスクフ成計梨、九年侍從ニ任セラル、弘化三年、致仕シ、長門守ト稱ス、安政六年八月十八日卒ス、享年六十、諡ノ龍澤ト曰フ、正室淺野氏、安藝守齊賢ノ女ナリ女弘、備前守前田利義ニ嫁シ、女定、飛騨守前田利啓ニ嫁ス、初メ利保其封内ヲ治ルヤ、先ツ奢侈ヲ禁シ、紀綱ヲ正シ、自ラ文學ヲ修シ、武術ヲ演シ、以テ文武ヲ振作ス、且ツ教官ヲ勉勵センカ爲メノ故ニ履校約言ノ撰アリ、時ニ白井流劍術、駒川流劍術、起倒流拳法、始テ之



ヲ演武場ニ備フ、致仕ノ後、最モ國雅本草ヲ嗜ム、海野遊翁ニ從テ歌學ヲ受ケ、小野蘭山、巖崎常正ニ從テ本草ヲ學ヒ、宇多川榕庵、畑中善良ニ就テ洋學ヲ受ク、是ヲ以テ皇漢洋ノ書、本草ニ干涉スル者該覽セサルハナシ、猶且ツ封内ノ諸山遠トナク、邇トナク、跋涉セサルハナシ、跋涉ノ間七十以上ノ老人有ル、毎ニ輒チ必ス金穀若干ヲ與ヘ以テ優待ス、然ラハ則唯本草ヲ窮ムルノミニ非ス、亦能下民ノ情狀ニ通セント欲テナリ、其著述スル所、本草通串、暨ヒ本草通串證圖、袖珍鑑等若干篇、國雅ハ則國頌專門、神用品品天門、推方專門、嘉嘉山途、蟲蟲等若干篇、利友小字、鏘之丞、又啓之介ト稱ス、利保ノ長子、天保五年二月朔、江戸邸ニ生ル、母橋本氏、江戸處士弘化三年十一月十月ノ封ヲ襲フ、四年從五位下ニ叙シ、出雲守ニ任セララル、嘉永元年十二月從四位下ニ叙セララル、

〔前田氏家乘〕

利友公、御幼名ハ鏘之丞、又啓之介、後チ出雲守ト稱ス、利保公第六子ナリ、天保五年二月朔日、江戸邸ニ降誕セララル、生母橋本氏名ハ柗、後チ每木東都ノ人、橋本市三郎ノ女ナリ、中十四年五月十六日、世子ニ立セララル、略弘化三年十月十八日、利保公御病氣ノ故ヲ以テ御隱居出願セラレ、十九日父子御用召ノ奉書到來、二十日、利保公代理黒田甲斐守長元、利友公御同道登城、隱居家

督和續願ノ通り臺命アリ、

孝明天皇

嘉永元年戊申

紀元二千五百八年

九月辛未

六日、丙射水郡大門の庄川舟橋を木橋に改む、

〔石埼記録〕

射水郡大門の橋は元祿年間までは假橋なり、しかるを年貢百姓

より、秋となりて川水道へ突き出し、往來迷惑仕候間、假橋を舟橋にいたし、被下度と願ひ出てたれば、加賀藩より年貢通ひの内はかり假舟橋可仕と仰出され、元祿八年より、町人請取普請にて船橋となれり、或書に大門新町の橋懸替被仰付、川幅八拾間の所に八拾貳間の橋を懸け渡されて、嘉永元年九月出来、同月六日渡初あり、渡初の人名は左の如し、

八十九歳

下東條組宮袋村

儀左衛門

孝明天皇嘉永元年

五三五



四十四歳  
五十二歳  
四十二歳  
二十四歳  
十六歳

儀左衛門妻  
同人悴吉左衛門  
吉左衛門妻  
同人悴勝次郎  
勝次郎妻  
ひる

右儀左衛門三十二三歳まで奉公いたし罷在、此節は持高八十五六石許所持仕居候と見えたり、

嘉永二年己酉

五月朔丁酉

二十八日、利保、千歳館を築きて之に移る、

〔前田氏家乗〕

二年五月二十八日、城東ノ出丸ニ、新ニ殿宇ヲ營築シ、千歳ト號

シ移住セラルル

〔千歳御殿〕

越中史料

千歳御殿は、富山舊藩主、前田利保公か御蔭居の後、江戸

から富山へ歸られ、本丸に接續する東の出丸、即ち今の櫻木町に地を撰び、嘉永元年工事に着手され、翌年竣功、八月に利保公御移住となつた、御作事總奉行は

二千石取りの家老村隼人で、作事奉行は河村右膳、石黒復磨の兩人、多くの町大工を使つた中に、彼の大岩の仁王門を彫つた名高い中村乙次などといふ、彫刻師もゐたとのことである、材木は四ヶ所の御用山より伐出したる外に、上方其他の各地方からも澤山御取寄せになつたさうだ、其工費は今日の金額に換算して、約六拾万圓との事で、何分珍らしい大工事の上に、利保公の御住居であれば、大工一同は非常の奮發で、献身的に腕前を競ふたものである、然るに安政二年二月二十九日の大火は、富山の町の殆んど全部を焼拂ひ、翌三十日の曉天には、惜しや、此善盡し美盡したる御殿をも空しく灰燼とは化して仕舞つた、今圖に就て説明を試みんに、先づ西側の堀の南端に在るのか埋み御門と稱するので、其處には番所の設けがある、正面の御式台は御類門、又は直參大名の外出入のてきないので、君公は本件の場合に之れより御出入なさるが、常には御休憩御式台から御出入りに相成る、御式台を上ると正面の御槍床には、御槍十文字、御槍御長刀を置いてある、休憩所には三組の御先手廻りが替るゝに御番をしてゐて、御式台の間へ出張るには、正面へ一列にならぶのである、御式台左方の頭溜といふのは、臨時に何か御慶賀のあるときに、乗馬士頭から同じく足輕頭



までが是れへ溜るので、斯かる場合に、君公は御書院へお出になる、諸頭分は溜から廣間へ罷出で御目見をするのだ、君公は臨時御慶賀の場合の外、或は御書院で御勝手の御用を御聴きになることもある、御書院の天井は極彩色の立派なものであつたさうだ、御内玄關は御殿に御用ある諸士が常に出入する所で、坊主溜には例の頭を剃つて羽織を着た無袴の御坊主が詰め番、人溜には袴羽織の足輕が詰めてゐて、坊主は殿内の御用を勤め、足輕は外の御用を勤める、内玄關の北の入口は日常御殿へ勤める諸士などが、常に出入する所である、こゝに御次坊主溜とあるは、御奥勤めの坊主の室、逢對間は役人が役筋につひて互ひに面談をする應接室で、御膳所は來客などのある場合に用ふる所、逢對間の手前に在る、吟味所には御次御近習が詰めてゐて、金銀に關する調べをする所、筆役などはこゝに居る、之れに相對する御用部屋は、吟味所と互ひに關係のある所で、御近習頭は晝夜共に詰めてゐる、其向ふの御台子、一名御茶の間には大きな爐が切つてあつて、君公用の大きな湯釜が掛つてゐる、之れには御近習御次近習等、即ち肩衣のある者、及肩衣をかけぬ者も居る所である、御用部屋の前の廣間の上には、二階があつて、殿内の諸士の狹箱を置き、こゝで衣服などを

着替へるため狹箱の裡には、上下はもとより火事裝束まで一通り入れて置かねばならなかつた、此二階の下の廣間は、奥勤めの諸士が辨當を喫する所に充てられ、こゝには刀掛けをも備へてある、御客間は君公への御來客の間で、先づ頭溜の奥なる御廣間に御待たせた上、やかて表勤めの士が出て之れへ御案内をする、其時御客の刀は案内に立つ士が携へるのであるが、坊主溜の前の御廊下に表と奥とを界する錠口の設けがあつて、此所に於て奥勤めの士が、御客の刀を受取り、表勤めの士と交替することゝなつてゐる、それから表御居間といふのは、元朝等御祝儀の折に用ゐられ、君公は其際此所で御膳を召上る、かゝる時家老は二の間、頭以下は三の間で御目見をする、之れから御舞台の方へ移つて、先づ鏡の間であるが、こゝには大鏡を備ひ裝束をつけ、面をかむつた姿を之れへ寫して見るのである、此間は舞台と同様の廣さがあつて、役者一同揃ふた上、舞台へ出る前に此間で式の如くに列ぶのだ、樂屋は第一がシテ、第二がワキ、第三が狂言、第四が笛大鼓、第五が小鼓、第六が太鼓、それから舞台裏手の長方形のが太鼓干し場である、御裝束の間は君公のみが御用ひになるもので、此間の總張付には、木村雅經の描いた能樂二百十番の極彩色の繪があつた、舞台正面



御覽所の間は、御居間との堺が観音開きになつて、室内は天井襖總べて金を用ひられ、一名總金の間と云ふ、金光燦爛目も眩むばかりとの事である、それから舞台の中庭は總へて青色の石を敷詰めてあつたさうだ、又舞台に向ふ前は籬南側の拜見所は、諸頭諸役人、其後は町年寄十村扶持人等、北側の拜見所は、家老、若年寄、奥勤め諸士、光嚴寺、大法寺等の陪觀する所、又御覽所の御納戸の前方へは、藩士の女子の許可を得て拜見をする場所と定められてある、彼等が拜見に出るときは、互に美服を競ひ、帯一筋に數十金を棄てたさうだ、今度は元へ戻つて、諸人入口とあるのは、奥勤め女中、又は吳服屋小間物屋などの出入するに用ひる所で、御休息御式台は、君公が常用せられるもの、裁許所に詰めるは、足輕で、御子様外出のときは、御付の士の外に、此足輕が付そいて先立をする、此所に御用達とあるは、御廣式付の御用達で、小目付は其れに屬する新番御徒歩の勤めるもの、對面所は奥筋の用向で、役人が御用達に逢ふ所で、時には女中の親戚が訪ねて来て、こゝで話をする、然し斯かる場合には必らず小目付が立會はねばならない、此御台子は君公平常の御用に充てるので、御次御料理人溜は諸士女中等の料理を掌る所、末女と云ふのは、老女の監督のもとに種々の勤めを

する者で、老女は女中の家老とも云ふべく、其權威は中々に盛な者である、老女は兩人あつて共に字の如く、年長者のこと故、之れに助役たる中老なる者があゝる、長廊下に沿へる御膳所は、君公日常の御膳だてをする所で、女中のみで其任に當る、其並びの老女の室は當番を以て、互ひに一日宛之れへ出張し、女中を指揮する所、御仕立所は差向き必要の分丈けを女中の手で辨する所で、君公御召物は富山衣服町の吉川某、平吹町の某といふ二軒へ御命じになつてゐた、御覽所の後ろの御納戸は、君公の御召物を納めてある所、又御覽所の地盤は高く丘をなして御覽所の二階と相通する程であるから、神通川及び向岸の風景を一望のうち、に鍾め得べく、即ち正北を望めば、神江を隔て、牛島村邊を見るべく、川向の堤上數百間には、櫻紅葉を植込みて、春秋の觀を添へ、東の方は木町濱口から東岩瀬の通船終日帆影を絶えず、遠くは立山、劔山、其麓の常願寺川まで、一目に見渡し、西は吳山で、其絶頂には七面宮の堂、三重の塔などがあつた、又御覽所の欄間は、紅白の梅の彫刻で床縁床脇は、杣田家の青貝の繪、三海家の埋詰で、二階の總欄干は朱塗であつた、御寢所の北に建つ一棟に、六疊八疊四疊の三室より成る、説明のない部屋が三ヶ所あるのは、君公の御休息所で、御寵愛を蒙つ



たる御妾は三人あつた、其名はおみね、おつや、おなをと云ふ、御子様は二人、之れへは末女が晝夜御付してゐる、御寢所から北の堀の中央にある釣殿を経て、納涼所へ通ずる廊下は、下は石垣にして其間を往來されるやうになつてゐる、廊の兩側に高窓が付いて鐵網が張つてゐる、納涼所では、月に三度つゝ御歌會を催ふされた、又此廊下から東へ分廊が通じて、梧桐舎と名づけられた、茶室へ往かれて、此茶室の周圍と廊下の左右には青桐を植ゑられ、俗に之れを桐の御茶室と謂つた、納涼所の西にある二棟の御土藏は、御子様等の衣服其他を納めてあるもの、又堀の東の十二間の長土藏は、二階の北六間は御能の御裝束、南六間は御書物、下は諸道具及能の小道具、活版等を入れてあつた、猶圖には示してないが、東の堀の北の橋の此方の詰に古木の櫻を植ゑられ、それから堀の東側一帯に二重に櫻樹を植ゑ列ね、其東には本草綱目の順序によつた、數千歩の藥草園があるのだ、藥草園は別に桐の御茶室の前にもあり、納涼所の前には鉢植の植物が並べられ、又堀の北端には森に包まれた稻荷の祠を置かれ、其邊に御金藏が建つてゐる、又堀の東には螺蝶山が在つて、此上からは富山の市内を瞰下す事ができた、其向ふは則ち御馬場、又堀の南方にも御土藏が建つてゐて、其

東には百種の梅樹を植ゑた壽祿天滿宮があるけれども、是等も圖では示してない、此天滿宮の額堂には奉納百首詠歌の軸を納めたる額を初め、種々の額が懸けられ、梅林の中央には別亭があつて、爰で毎月歌會を催されたさうである、以上十六才より二十五才まで殿中に仕へて居られた安井八郎翁から聞いた所に依つて、其の大略を記したので、若し誤りがあれば予の間違ひである、江井上

〔富山市沿革志〕

嘉永二年五月二十八日、新ニ殿宇ヲ東出丸ニ築造シ、千歳ト

號シテ、利保公移住セラル、當時、木町西側ノ民家ニ立退ヲ命ジ、馳又壽祿天滿宮ヲ三ノ丸、東外形ノ南ニ創立シ、繞ラスニ梅樹百種ヲ以テセラル、明治ノ初ニ至チノ四十餘種ヲ存セリ、

七月

丙申

二十一日、丁儒者佐伯順藏歿す、

〔碑文〕

君諱有毅、字孔實、稱順藏、號棠園、和田芳之弟、少從學鐘山先生、爲學精敏、過絕人、先生愛之、妻以女、養以爲子、遂冒佐伯氏、君爲人、惇篤孝順、言行不苟、博涉羣書、莫不究窮、天保辛卯之火、君疾馳至、費舍、此屬吏極力救防、書庫賴免災、官本得全者、實君之



力也、而君家亦罹災、還則百爾什器盡爲烏有、而特所甚惜者、祖先遺稿、煨燼掃地矣、嗣後萬方搜索之、零編斷簡、塵塵亡幾、君以爲終身之遺恨矣、文化五年戊辰、補疊舍訓導、十二年乙亥、轉學正、文政二年己卯、拜儒官、天保六年乙未、累遷祭酒、矜式、藩中丁酉歲、以善誘門生、職事特勤、故特恩增俸、以復祖先舊俸、可謂不墜家聲、恢先祖之考矣、君又命屬吏、謄寫難得書、而督課之嚴、一如營家事、然、是以疊舍寫本、多不啻充棟、是亦君之力也、可謂弗解乎職矣、君好學之篤、至易篋、日手不釋卷、講誦不休、如天假年、其所造詣、豈可測乎哉、噫、惜哉、生四男三女、長子有清、字種德、嗣家襲祿、季子有種、字秋實、長女適林氏、次女適余同宗岡田氏、餘皆夭云、君以天明戊申生、嘉永二年己酉七月廿二日、疾而卒、享年六十二、葬城南春日山光嚴寺、種德請銘墓、乃係以銘其辭云、

春日之山 神之攸寧 令德刻石 千秋斯馨

富山藩督御下大夫侍講岡田萬三郎橘淳之撰

男順二信之書

孝子有清立

嘉永二年庚戌

紀元二千五百十年

七月

辛卯朔

射水郡佛生寺村の農民、蝦夷地テンキ藺を移植して、莫産を織る、

〔杉木御觸留帳〕

蝦夷地テンキと唱候、藺苗、射水郡佛生寺村新助義、是迄數年致世話候之所、追々致繁茂候ニ付、當年テンキ之藺を以織立候、吳産見本、並新助願書付共被指出、尙又諸郡ニ於ても、植附差支無之旨も被申聞、遂兪議候之處、右莫産莖等、夫々も相見へ、右ハ山地谷内、或ハ荒地等に植付出來之品ニ候へは、追々植付出來高相増候ハ、御國益之事ニ付、望之者ハ先爲試植付候様、夫々可被申渡候、依て佛生寺村新助テンキ植付方主附申付候條、望之者はテンキ苗申請、培養方等習請候様、是亦可被申渡候、已上、

戊七月

改作御奉行中

御算用場

是歲、富山藩始めて種痘を行ふ、

〔富山日報〕

〇號

前田利保公は、明君にして慈仁の心深く、常に痘瘡の不幸を慨き、時の藩醫横地元丈を江戸に上せ、種痘術を習はしめ、嘉永三年横地醫の親



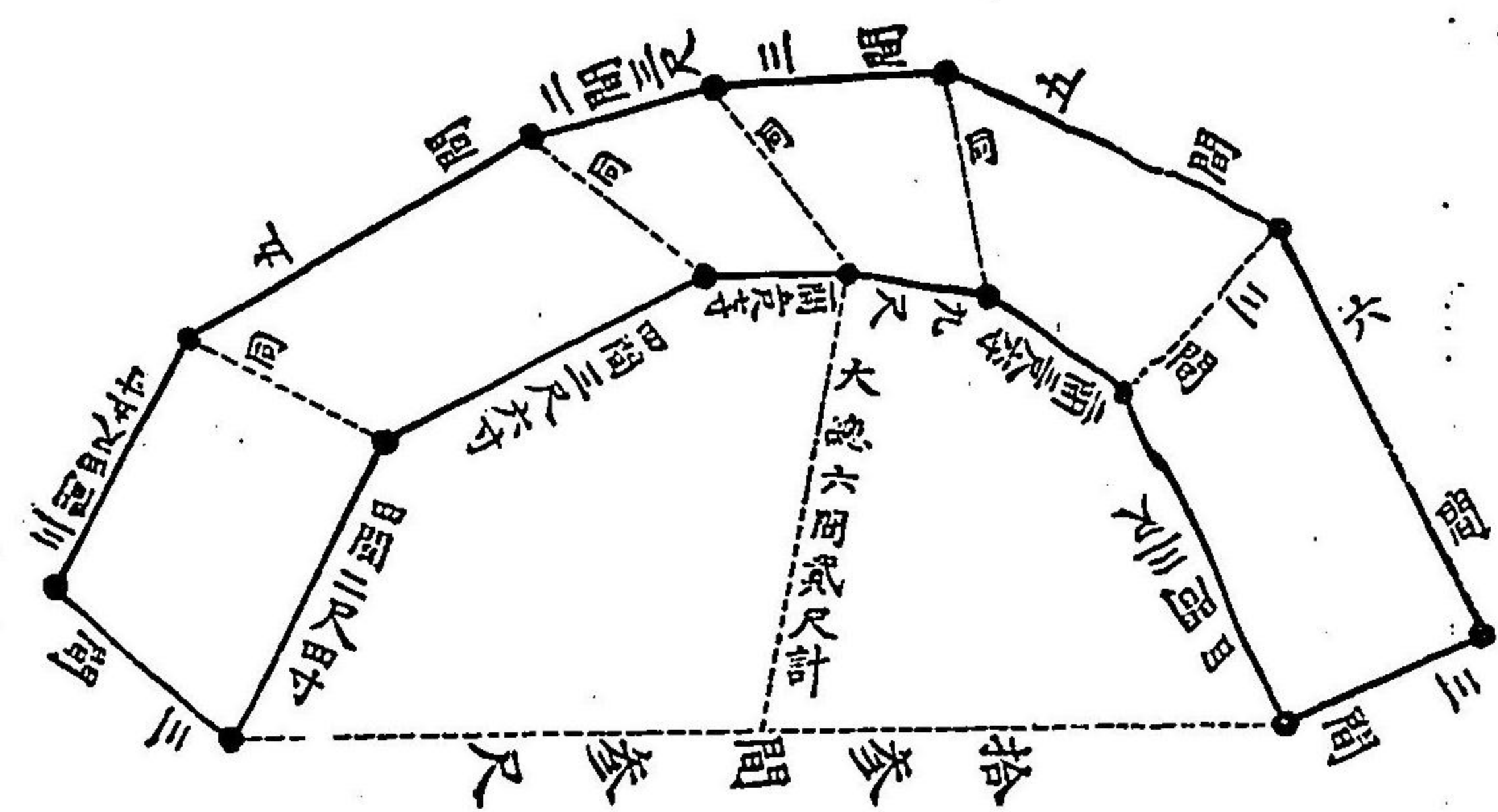
友須川義績の長女菊子及び長男成秀の兩童に種痘を行ひ、兩人共美事に善感したり、之れ富山種痘の嚆矢なり、  
 嘉永四年、天然痘大に流行し、人民皆怖る、然るに須川兩童、遂に其難を免る、依て人民皆種痘の功を賞し、大に種痘術の旺盛を極めたり、嘉永の天然痘以後、種痘は横地醫師の専門に歸したる如くなりし、されは人民童幼生れて六ヶ月、凡て種痘を行ふを例とするに到れり、

加賀藩、越中國沿海要所に砲臺を築く、

〔越中史略〕 嘉永三年、伏木浦等海岸各地に臺場を築かしむ、同年藩主齊奏、海岸各地を巡視し、翌四年再び巡視す、

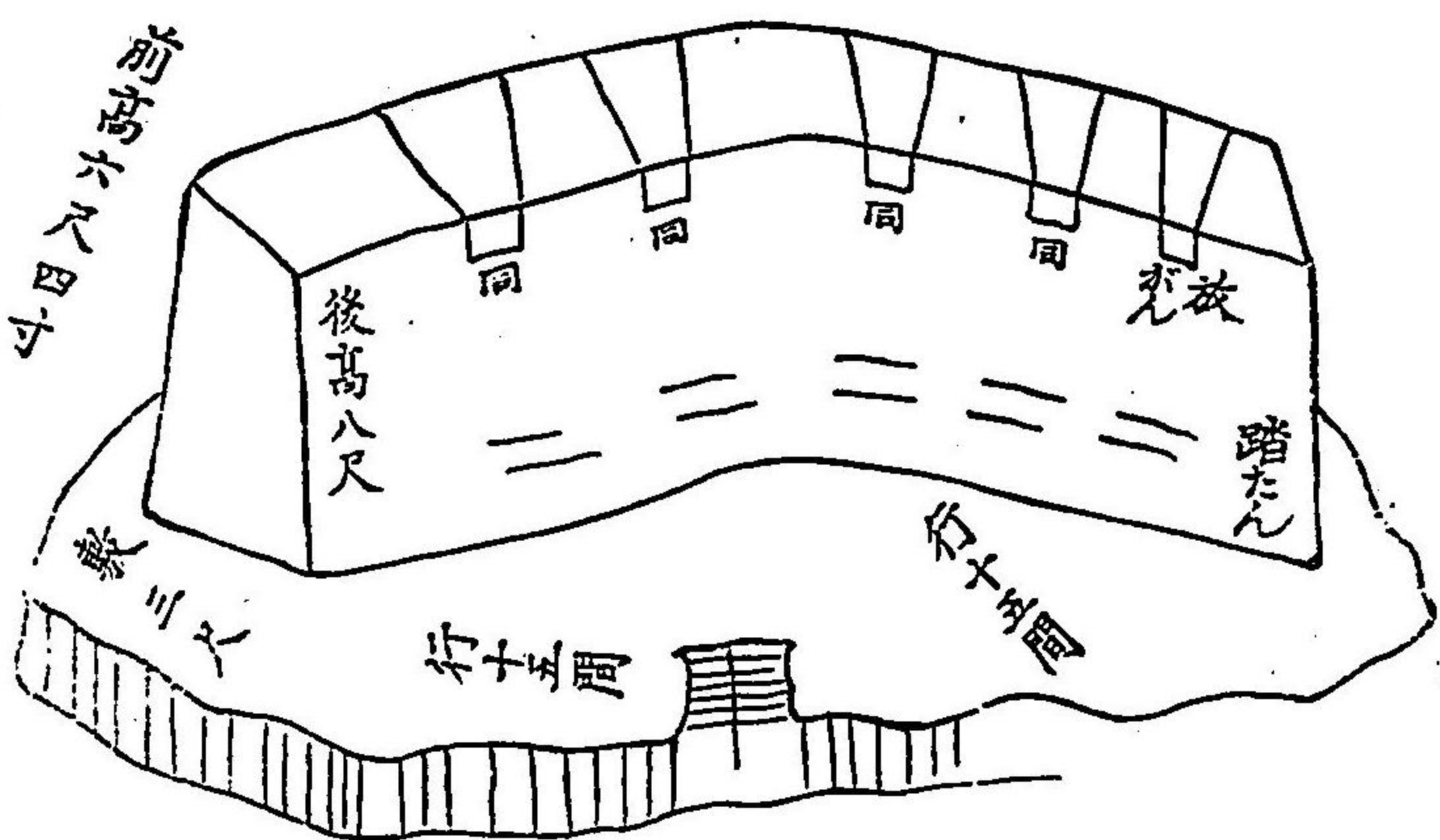
〔憲令要略〕

當所御臺場へ波打際を灘浦之内くでんと場所をさして、沖江百八拾間出、深さ貳尋四尺之河より左右へ開き、  
 左の方江、百五拾間開て、深さ貳尋三尺七寸、  
 右の方江、百五拾間開て、深さ貳尋二尺、  
 右二ヶ所を御見當也、



間ノ方拾九間六歩  
 幅兩方共三間  
 外の方貳拾五間貳  
 歩五厘  
 此步數六拾七步貳  
 分七厘五毛





此圖は伏木町に  
出来分也肝  
煎中船頭方下  
役伏木浦幸武  
兵衛方へ開合候  
圖九月上旬申出候  
十當二月開合申出候

氷見町之分は、其後御出来延引、杭札而已、建置被成候、右御主附は今度御手當方之内、河合清左衛門様等、並御郡惣年寄、五十嵐小豊次殿、中川南善左衛門殿との

由也

〔下新川郡生地高帯小學校報告〕

生地臺場は越湖濱の西南隅の字真鼻にあり、元槍ヶ崎と稱して海中に突出し、以て遠く能登岬と相對す、所謂越中灣の咽喉にして、軍事上忽にすべからざる地なるを以て、嘉永年間、幕府の命により、加賀藩主、此處に臺場を築き、其後堀織部正、海岸上使として、日本海岸を巡檢す、後復ひ幕府の命を受けて、元治元年十月修築を加ふ、其幅六間乃至七間にして、長八十間餘なり、竣工の後、加賀藩主、在藩兵を派遣して臺場に據り、異國船の侵入を警戒せしめたりといふ、爾來風雨幾星霜破損少なからずと雖も、今尙其趾を認むるを得へし、

〔参考〕

〔杉木御觸留帳〕

生地御臺場御用之御筒等、當六月、宮腰浦を積廻り候所、入置候御土藏未出来無御座ニ付、生地村役人詮議仕、同所撫育米藏、其節明居候ニ付、先借上御筒等仕抹仕置候處、右撫育米藏當暮ニ相成候へは、糶等積入可申筈ニ付、明渡候様村役人申聞、御筒等仕抹方指支申候間、御土藏、御臺場近邊ニ出来被仰付候様仕度旨、布